恵迪

厳寒の原生林と都ぞ弥生の碑（恵迪寮横）

恵迪寮同窓会　第6号 2006年

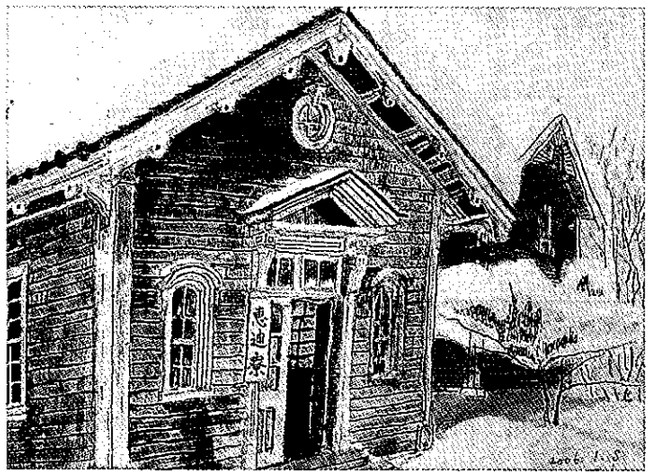
恵迪　第6号 2006年
恵迪寮同窓会

立身沃作真男子
臨事登為賤丈夫

今　裕　第4代総長揮毫の書「立身沃」から

＜揮毫者紹介＞

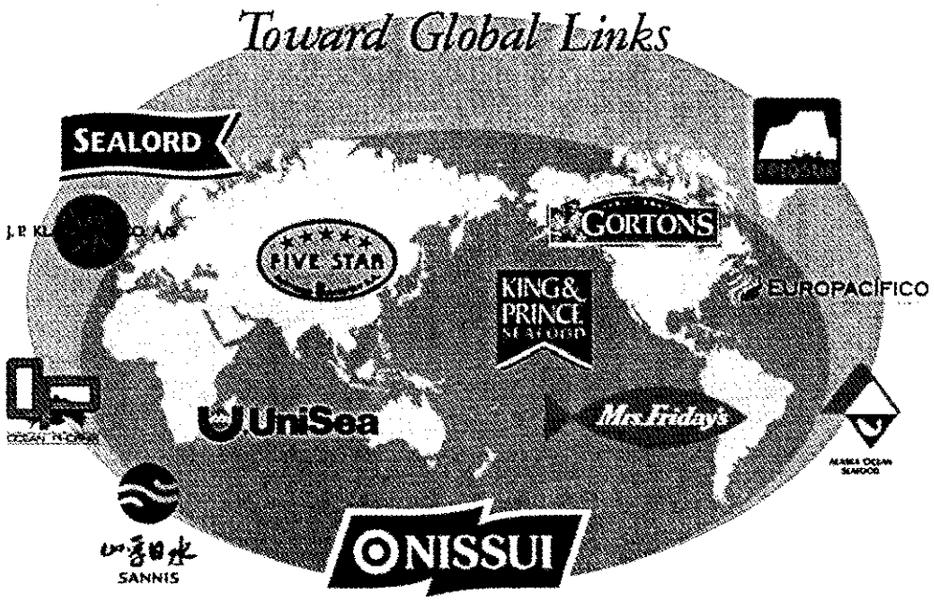
第４代総長　今　裕（こんゆたか）先生は、医学部病理学第１講座教授で、細胞学が専門であり、1934（昭和９）年に「組織の銀反応」の研究で学士院賞を受賞されている。戦時体制下の1937（昭和12）年12月から1945（昭和20）年11月まで総長を務められ、大変な苦労をされた。



北海道開拓記念の村にある旧恵迪寮

ニッスイは「グローバルサプライチェーン」を発展させます

日本水産の目指す「サプライチェーン」は、ニッスイグループやパートナーが持つ世界の生産拠点と世界の食卓を結ぶグローバルネットワークが、基盤となっています。グループ全体とパートナーが相互に機能を発揮しあって「協働」する「グローバルサプライチェーン」を構築し、食品・飼料・化成品・医薬品に至るまでの幅広い分野において、新しい価値を創造し、お客さまにお届けしていきます。



日本水産株式会社

代表取締役社長	垣添直也	
常務取締役	田中　汎	(昭43化)
取締役	細見典男	(昭48食)
取締役	藤本健次郎	(昭54食)
監査役	鶴田地彦	(昭41遠)
相談役	鈴木賢一	(昭36セ)

〒100-8686 東京都千代田区大手町2丁目6番2号　電話：03-3244-7000
http://www.nissui.co.jp

恵迪6号目次

扉　第4代北大総長　今　裕氏の書、旧恵迪寮 …… 1
巻頭言　恵迪寮同窓会会長　中瀬　篤信（昭和26年入寮）
挨拶　恵迪寮同窓会北海道支部長　幸　健一郎（昭和30年入寮）
同東日本支部長　篠原　猛（昭和29年入寮）
同　幹事長　関口　光雄（昭和39年入寮）
同西日本支部長　辻山　昌佑（昭和26年入寮）
グラビア　歌会初めの会・寮生活今と昔・大寮歌祭・大ジャンプ大会 …… 8
特報Ⅰ　繁富一雄恵迪寮同窓会名誉会長が自伝出版 …… 14
特集　北海道大学NOW　◆研究最前線・トピックス …… 16
寮歌物語
Ⅰ「新しき陽は」（歌）金子　公良（昭和39年入寮）
昭和40年度寮歌（曲）西雪　弘光（昭和40年入寮） …… 35
Ⅱ「生命萌え出で」（歌）小日山輝泉（平成8年入寮）
平成10年度寮歌（曲）長谷川　健（平成7年入寮）
特報Ⅱ　史上初・女子が寮歌作曲 …… 43
自由投稿
「橋本左五郎と夏目漱石」　村山　正（昭和23年入寮）
「恵迪精神ということ」　木暮　成一（昭和28年入寮） …… 44
「北大協同組合員登録予科生第一号は誰？」　和氣　和民（昭和20年入寮）
「波瀾の八十年の人生を顧みて」　高木冨士男（昭和22年入寮）
サークル史　シリーズ六　応援団概史（前編）　谷口　哲也（昭和48年入寮） …… 52

恵迪遺産

終戦前後の寮（1943～1946）　安井　勉（昭和18年入寮） …… 66
若き日のエピソード　宝住　与一（昭和33年入寮） …… 68
紀州発・故郷回帰塾　千川　浩治（昭和40年入寮） …… 71
わが青春の「三年半」　俵　正好（昭和44年入寮） …… 73
憧れの恵迪寮　千原　治（昭和50年入寮） …… 75

話題あれこれ　高商戦の一つの思い出　板谷　實（昭和21年入寮）
「恵迪開識社」講演会　和　孝雄（昭和32年入寮） …… 78
特集・現寮生の目から
高井宗宏副代表幹事が道新に登場 ……
北大総合博物館がリニューアルオープン
「自治の意義」　山本　圭介（平成14年入寮） …… 81
「寮行事の現状」　藤本　泰裕（平成15年入寮）
「寮歌に思う」　堀江　峻太（平成13年入寮）
「娯楽一考」　長山　一成（平成15年入寮）
「寮自治会の活動」　渕野　信也（平成14年入寮）
「女子について」　甲斐　千尋（平成14年入寮）
「寮生の食事情」　田中　泰文（平成14年入寮）
入寮記念「入寮50周年記念」　厚谷　純吉（昭和30年入寮） …… 98
「二度目の北帰行と3940会」　鮫島　正純（昭和40年入寮）
全国から集い盛大に　本田　彰（昭和44年卒寮） …… 103
東京・寮歌祭　伊藤誠也第5代総長揮毫の扁額「青年抱大志」 …… 106
恵迪寮の文化財No.7　本部・各支部活動・決算報告・事業計画 …… 107
同窓会だより　今年の大寮歌祭案内――九月三十日・東京で
原稿募集
編集後記　「恵迪」部会長　平岡　義康（昭和33年入寮）
カット　高野　豊（昭和32年入寮）

人物点描

帝大百年・恵迪百年　佐藤　昌介（農学校1期生） …… 94
北海道開拓の魁　内田　瀞（農学校1期生） …… 95
北海道私学の開基　戸津　高知（明治31年農学卒） …… 96
アラビア石油の快挙　山下　太郎（明治42年農学卒） …… 97

会誌「恵迪」6号発刊に際して

恵迪寮同窓会・会長　中瀬篤信
（昭和26年入寮）

昨年暮に出た文芸春秋二月臨時増刊号「司馬遼太郎ふたたび」という著名人たちの随筆集を読んだ。幼少時からモンゴルに憧れ、大阪外語学校蒙古語科に学んだ司馬遼太郎氏は、多くの著作から、或いは「この国のかたち」などで研ぎ澄まされた史観をもって我々日本人に苦言を呈して呉れた偉大な作家であり思想人であった。この本は司馬讃歌集なのである。この中の鯉渕信一氏の文中に面白い表現を見た。〔モンゴルには「肉といえば顔がほころぶ」という諺があるが、司馬さんはモンゴルというと顔がほころび、すべてを透視するようなあの厳しい眼が穏やかに笑った。〕なるほどと思った。

恵迪寮といえば無条件に顔がほころび、寮歌を歌っては厳粛な気持に立ち返る仲間たちが寮同窓会を立ち上げ、数年間の寮生活で刷り込まれた自治と開拓者精神を現代に残そうと同窓会誌「恵迪」を発刊したのは一九九五年一月の事であった。二年毎の出版四号をもって経済的困難から一時頓挫したが、四年の休養を経て昨年第五号として再出発することができた。

二〇〇六年正月の北海道新聞に「北大、新年度から科学技術ビジネスの一大拠点形成に乗り出す」と第一面に掲載されていた。この内容は既に恵迪五号誌に北大二十一世紀COEプログラムとして詳しく紹介されているが、「大学連携型企業家育成施設」、新型インフルエンザワクチン作成などの「人獣共通感染症リサーチセンター」、一秒間に一京（一兆の一万倍）回の計算をこなす「スーパーコンピューター開発導入」など北大リサーチ&ビジネスパーク構想は、文部省から最高ランク「A」の評価を得ているという。真に喜ばしい事である。昭和以降、戦争、敗戦、復興、学生運動の嵐、バブル経済の崩壊など世情の移ろいの中に北大キャンパスは少しずつ姿を変えてきて、漸く北大にも効率を重んじる、地域に密着した実務的な研究や教育が勢いよく始まろうとしている。こうした変革のバックボーンには、開闢以来のフロンティア精神が大きく働いているに違いない。

司馬遼太郎氏は「日露戦争後の日本人が思いあがって悪くなったように、物質的繁栄を遂げたあとの平成日本もまた「公」を失い、救い難いほど悪くなっている。精神の荒廃、無惨さは敗戦時よりひどい、ひどすぎる」と述べている。確かに現代日本では、親殺し、子殺しなど考えられないような犯罪の増加、そして安全性を欠く違法建築物を作りそれを平気で売り飛ばす者がそこらにぞろぞろ居るのである。真にもって情けない有様なのである。

ここで思い出すのは、恵迪第三号誌に載っている松本清嗣君（昭和五十九年入寮）の「カンボジア・NGO・恵迪」である。彼は一九九二年よりカンボジアに入り、民間協力団体を立上げ、その村の人々と共に弱者支援、孤児院運営、農業、保健、教育、人権など様々な活動をされている。彼はクラーク先生のbe gentlemanの教えから地域住民の誇りを重んじ、恵迪の自主性から地域の人々による活動を側面から援助する姿勢を崩していない。人間性喪失の時代に、我々の仲間にもこのような立派な人がおられる事に心からの敬意を表すると同時に大いなる誇りを覚える。さらに北海道青少年科学文化財団（理事長：広重力先生、専務理事：井口光雄君・昭和二十八年入寮）は、約四十年前、北海道の学生に資金を援助し、二年に分けて四十名もの学生にヨーロッパと北米の視察旅行をさせたのであった。貧しかった当時の学生達にとっては天にも昇らんばかりの大きな贈物であったに違いない。その後三十数年を経て、彼らは夫々の地位を占めるようになった時期に、その恩に報いようと毎年の寄付を申し出たのである。財団は、その寄付を奨学基金として松本清嗣君に托し、カンボジアの就学困難な女子中学生十五名を援助しているという。その他、ユニセフ、国境なき医師団に、また大地震などの災害地に、乏しい年金から寄付をされている方々が大勢居られる事も承知している。日本人は、それ程精神構造が破壊され尽くしてはいないのだと堅く信じている。

このような時代、同窓会にはその成立条件から活動に制限のあることは充分に承知しているが、少なくも会誌「恵迪」には、夫々の分野で活躍された先輩や、現在活躍している仲間達の経験や思考を掲載する事で、これからの日本を支える若い人の歩みに何らかの助けになればと願うものである。そして今、我々は日本の国のありようを、そして日本人のありようをじっくり考える時期にあると思われる。

さて、今期の恵迪寮同窓会各支部は、地方での寮歌祭などの会合を持ち、会員の増加を計る努力をされている。平成十七年七月には西日本支部の発想により、名古屋において初めて恵迪寮同窓会西日本大会が開催され、中京の仲間達と歓談できたのは幸いであった。また、二〇〇七年は、恵迪寮命名百年だという。同窓会本部ではこれを記念して何らかの行事を行うべく企画し始めている。同窓会諸氏のお知恵とお力を借りて是非にも成功させたいものである。

「恵迪」第六号の巻頭言をとの編集子の求めに応え、その発刊を心から祝すと同時に、いささかの感慨を述べさせて頂いた。

全国に誇れる恵迪寮

恵迪寮同窓会北海道支部長　幸　健一郎
（昭和30年入寮）

恵迪寮北海道支部から全国の皆さんにご挨拶申し上げます。

私たち北海道支部の活動として現役寮生との交流を大きな柱としております。

その一つは支部の役員に現役寮生から寮の執行委員長に参加して貰い、寮活動を逐一把握することに勤めています。

そして今一つは現役寮生と恵迪寮内で私たち寮ＯＢ数名が年二回交流しております。これらの活動を通じて現寮生の生活がリアルに握みとれます。

第一に私達が恵迪寮同窓会を設立のときの想いは、新しくできた寮名を「恵迪寮」として残すこと、そして明治四十年以来続けてきた、寮歌を毎年つくることでした。現役寮生は寮の伝統を守り、現在でも毎年寮歌をつくり、寮歌普及委員会が中心となって新入寮生に寮歌を指導し、寮歌は今も歌い続けられています。

第二に現寮生の紀律正しさです。私たちＯＢと接する時も先輩として敬い、寮内での先輩、後輩の秩序も保たれ、まさに恵迪寮の伝統である「Be Gentleman」を堅く守っています。良く言われる「今の若いものは礼儀を知らない」と批判されますが恵迪寮生に限ってはそれはありません。

第三に新しく寮が建てられたときは、恵迪寮は個室となっていましたが、寮生から共同部屋にしたいと強い要望があり、私たちＯＢもこれを支援し、大学当局に共同部屋の設置を認めさせ、現在五〇〇名の寮生の五十％は共同生活を実施しております。

このことは共同生活を通じて人の痛みを理解し、友情を芽生えさせています。

以上、述べたように昔の恵迪寮をほうふつとさせるような寮生活となっています。

このように恵迪寮の伝統を守る寮は日本国中で恵迪寮だけであり、恵迪寮は正に私たちの誇りであります。

声高々に寮歌を歌おう

恵迪寮同窓会東日本支部長　篠　原　猛（昭和29年入寮）
幹事長　関　口　光　雄（昭和39年入寮）

北大恵迪寮同窓生・北大同窓生・寮歌の大好きな諸君に告ぐ!!

恵迪寮同窓生・北大同窓生・現役生の皆さんこんにちは、元気に我らが誇る「北大寮歌」を歌っておりますか？東日本支部です。色々な歓・送迎会などの席上で寮歌放吟だけでは物足りなかった方、そしてストームもやりたいと心密かに願う皆さん、東日本支部ではここに「寮歌祭」のご案内をいたします。

同窓の諸兄姉よ、錦秋の東京で銀杏の紅葉を眺め、われらが「北大寮歌」を声高々と共に歌おうではないか！

お願い・勧誘等

さて、定年準備講座等が地上で騒がれております。ボランティア、非営利活動……。団塊の世代の斥候兵として、一言。何の準備も多額の費用も必要としないボランティア活動は「恵迪寮同窓会」では有りませんか？

大先輩、先輩、同窓等の喜ぶ顔を寮歌祭会場で垣間見る時、ボランティア冥利に浸れること請合います。母校・寮に恩返しするつもりで、是非とも「恵迪寮同窓会」に入会し、共に感動を味わいませんか。これこそ毎日が日曜日、毎日が「濡れ落ち葉」、認知症にならないこと確実です。

そして、少なくとも毎年一回は、開催される「寮歌祭」にフルムーン切符等を利用してご夫妻で参加し、愛妻孝行を実施してください。

挨拶なのか、不法勧誘なのか、こんな感じで東日本支部はやっております。旧制高校だからとか、歌い方がおかしいとか言う先輩はおりません。法治国家、自治寮で学んだ精神をもって、あの頃の情熱を取り戻してボランティア活動に参加し、まず自分から変わってみませんか。

継承すべき恵迪精神

恵迪寮同窓会西日本支部長　辻山昌佑
（昭和26年入寮）

現恵迪寮同窓会員は、古い人で予科、そして新制の教養学部時代に在寮した人が大半です。それだけに現在の寮が学部の一年目から四年目まで、大学院、留学生、女子まで在寮している状況に、かつてとは異った寮と感じておられるのではと思っています。同窓会の目的は恵迪精神の継承発展に務めることとされていますが、精神・文化が異なってきて、継承できないのではないかと疑問をもっておられるのではないか。そもそも恵迪精神とはいかなるものなのか、それを解明し、統一見解としてまとめ継承しなければなりませんが、私は今の処、まとめて記述されたものを探し出せないでいます。

恵迪寮の歴史は明治三十八年に旧理学部前、現博物館前に建設された二棟の寮に、同四十年に恵迪と名づけられ、本科四年予修科二年が入寮を許可されたのに始まります。大正八年に予科三年だけの寮になりました。昭和六年に北八条に移設され、戦後予科の消滅により新制大学教養部二年の寮となり、昭和五十八年に現在の寮が新設されているのはご承知の通りです。ところが恵迪寮同窓会名簿には明治九年の札幌農学校の一期生佐藤昌介先生から始まって二期生の内村、新渡戸、宮部の各先生が載っています。恵迪寮でないに拘らず高名な方々だから載せたのかと思って、恵迪寮史を読んでみますと、なんと明治五年の東京芝の開拓使仮学校、八年の札幌学校そして九年の札幌農学校の寄宿舎から始まっています。この寮史は第一巻で昭和六年に編纂されたものですが、その序文に当時の南総長、佐藤前総長が恵迪寮をその前の寄宿舎からの後継者として認知して、書かれておられます。まことに恵迪寮は長い歴史と伝統をもち、北大そのものの伝統と歴史と同一視しておられます。この寮史の中にこそ、恵迪の精神・文化があると思い寮史一巻、二巻と繙いて見ました。明治維新まもない頃から日清・日露戦争、日韓併合、第一次大戦、シベリア出兵、満州へ進出、日支事変、

大東亜第二次大戦、敗戦、戦後の混迷、学制改革、民主憲法、朝鮮戦争、冷戦、ベトナム戦争、学園闘争、入寮銓衡、寮の閉鎖など、大よそ百年にわたります。その時代時代により、恵迪の知性、精神は揺れ動き、紙数の制限上具体的記述はできませんが、全く反対の精神、文化が現出している場合があります。第一巻と第二巻の編纂者の時代が異なっており、当然異なった視点ではありますが、このように異なってはいても、その異ったまゝの状態がその時々の恵迪の精神であり、文化であると認識せざるを得ません。私は昭和七年の生れで、終戦の時中学一年でありました。終戦まぎわに旧制高校生や学部の学生が、神風特攻として死んでおられますが、どのような精神で死地に赴かれたのか。中学一年という幼い精神でなく、予科生、大学生としての情況判断力、知性をもっておられます。私は城山三郎氏（昭和二年生れ）の「指揮官たちの特攻」、神坂次郎氏（昭和二年生れ）の「今日われ生きてあり」。又別な視点で司馬遼太郎氏（大正十二年生れ）の「歴史と視点」を読んで見ました。それぞれ飛行兵と戦車兵として参戦されています。又、女性として、戦争体験のない昭和四十年生れの工藤雪枝氏の「特攻へのレクイエム」を読み較べて見ました。何をいいたいかと申しますと、時代が変わればかつてのその時代の精神文化の理解は難しいということです。私の年齢からは現寮生を、現寮生からは私の年齢の理解は難しいということです。しかしこゝでいう難しいという意味は、出来ないということでなく努力をすれば理解し合えるということで使っています。

そう考え乍ら寮史に通底する精神はないかと探しました。どうやらそれは寮史の序文にある。もう一つは寮歌集の序文です。

寮歌集は会員ならば誰方も持っておられますので、既に読んでおられると思いますが、今一度いかゞでしょうか。有島武郎、伊藤誠哉、島善鄰などなどの諸先生が序文を寄せられています。

（完）

初春や蛮声高く寮歌かな

初会の歌会始めの会

平成18年1月28日札幌・氷雪の門

全員で「都ぞ弥生」を高らかに

なつかしい制帽も……

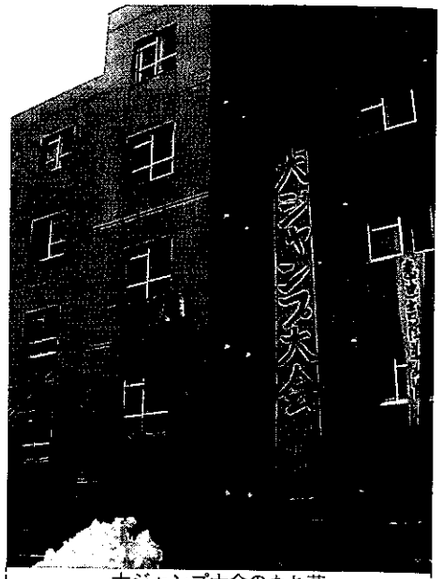
応援団の元顧問山元周行先生も大張り切り

女子寮生も元気いっぱい

現役寮生も登壇

恵迪100年 大ジャンプ大会

2006年2月22日



大ジャンプ大会のたれ幕

雪上のパフォーマンス見物人は大爆笑

200人近い市民が見物

大太鼓で景気づけ

審査員の札幌大谷大学の女学生

寮生特製のカレーラーメンもふるまわれた

ジャンプする瞬間

長谷川君、平成10年寮歌を披露

友情参加の二高OBも熱唱

青春回帰（ステージ上でストーム）

宴たけなわ

青葉城跡・伊達政宗像前で

「津軽の滄海の」の作詞者、二階堂孝一さんの墓前で献歌

佐藤惣之助さんの墓前で献歌

佐藤惣之助さんの墓前にて

都ぞ弥生の斉唱（河北新報社提供）―5．29の朝刊に掲載された―

杜の都で北大寮歌を！

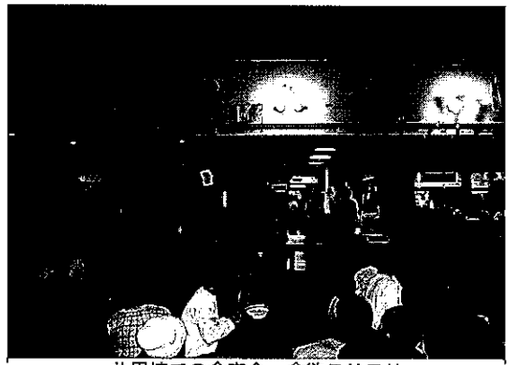
2005．5．28～29　於仙台。　東日本支部

両日の模様はミヤギテレビにより２日間に亘って取材され、６月２日の同局の自主製作のワイド番組の中で放映された。グラビアＰ４～５で、字幕スーパーがある写真はすべてミヤギテレビの映像から写したものである。

ミヤギテレビが放映（６月２日の映像より）

都ぞ弥生の斉唱（太鼓の右の白い鉢は真白き花の延齢草）

マチに出てのストーム


共用棟での食事会、食欲モリモリ

移行する寮生の送別会

今と昔

仮装で市内行列（昭和29年９月）

「都ぞ弥生」歌碑除幕式でのストーム（昭和32年９月24日）

観桜会（昭和31年５月）

希望者殺到のタンツェン大会

現恵迪寮（航空写真）

飲んで、騒いで……

エッセン準備また楽し

大相撲恵迪寮場所

寮生活

旧恵迪寮（北海道開拓の村に移設・復元）

万年床、せんたく物ずらり並ぶ室内

晩餐会（昭和30年２月）

繁富名誉会長が自分史を出版

恵迪寮ＯＢらが盛大にお祝い

北大恵迪寮の大先輩で、恵迪寮同窓会名誉会長の繁富一雄さんが自分史を出版されました。題して「Ｄｏ Ｔｈｅ Ｂｅｓｔ・吾が理想の人生」―愛妻ヒサに贈る書―。Ａ４版、二百三十二ページの大書で、カラー写真をふんだんに盛った豪華な一冊で、その出版を祝う会が十七年十一月三十日夜、京王プラザホテルで開かれた。

立派な装丁の本

繁富さんは明治四十五年（一九一二）三月九日、旭川市で生まれた。昭和六年四月に北海道帝国大学予科（工類）に入学し、同年十一月二十二日、移転、新築されたばかりの予科恵迪寮に入寮した。昭和九年四月に北海道帝国大学工学部（機械工学科）に入学した。

昭和十四年に生涯の伴侶となるヒサさんと結婚し、終戦後の昭和二十四年に札幌市に繁富工務店を設立した。その後札幌中央ライオンズクラブ会長をはじめ、北海道ゴルフ連盟常務理事、札幌西法人会会長、ライオンズ国際協会三三一―Ａ地区ガバナー、札幌国際カントリークラブ理事長、道経営者協会理事など要職を歴任した。

その間、ライオンズクラブ国際協会から国際親善大使（ライオンズ最高栄誉章）に任命されたほか、平成三年に大蔵大臣表彰、平成十六年には旭日双光章の叙勲を受けるなど、かずかずの栄誉に輝いた。

平成三年から恵迪寮同窓会会長を平成十三年に現会長・中瀬篤信さんにバトンタッチするまでの長期間つとめ、後輩のめんどうを見、現在名誉会長となっている。耳がやや遠いほかは意気軒昂で、奥様ヒサさんとの仲睦まじさはよく知られている。

祝賀会は恵迪寮同窓会代表幹事・横山清さんの開演の挨拶で始まり、箏曲山田流・琴友会主宰の佐薙岡豊さんが「春のうた」「千鳥の曲」をみやびやかに演奏。出席した約七十人はうっとりと聴きほれた。

このあと発起人を代表して元北大学長・有江幹男さんが「もう人生終わったなんてことを言わずに益々元気に我々を御指導下さい」と挨拶。参会者一同から絵画「晴天秋日」（長谷川良造画）と版画「白亜館」「恵迪寮」（大本靖画）が贈られ、祝宴となった。

出席者は恵迪寮関係者はもとより、元北大総長・廣重力さん、北大現総長・中村睦男さんら、そうそうたるメンバー。繁富さんが「盛大な祝賀会有難うございました。自分でもまあまあの人生を送ったと思います」と謝辞を述べた。最後に全員で「都ぞ弥生」を斉唱した。

カラー写真が豊富……

◇　◇

繁富さんは祝賀会前のインタビューで次のように話してくれた。

――「恵迪」に入った理由は？

昭和六年四月に旭川から札幌に到着した時駅に予科生が待ち構えていて、うむを言わず庭球部の合宿所に連れていかれた。当時理学部前にあった恵迪寮は取り壊し中。結局、その秋、新築された寮に第一期生として入った。

――寮で一番困ったことは？

「木のベッドだったので、毎日のように床に落ちたこと。一カ月ぐらい後にやっとベッドで寝られるようになった」

今もお元気な繁富名誉会長

――寮生活で忘れられないことは？

「購買部長をやらされたが、喫茶部を作り、自由に紅茶・お菓子などを飲食出来るようにして、寮生に喜ばれたことかな」

――現寮生にどう生きてほしいか？

「今の寮生は我々の時代の十倍ぐらい、全学で三百二十人ぐらいいるようだが、もっと少なくするため、勉強出来ない者は落とせば、良い者だけが残る。昔の旧制に直すべきだと思う。」

（文責・部会長・平岡義博）

挨拶する横山清代表幹事

「北大時報」からピックアップしたものを含む

研究最前線

北海道大学新渡戸奨学金を開設

新渡戸奨学金は、学業が秀でており、かつ、人格に優れ、他の学生の模範となると認められる学部二年次学生に対し、奨学金を当該年度に20万円を授与し優秀な学生を育成することを目的として、本年度から新たに創設された制度であります。

第1回授与式は

平成17年10月11日（火）情報教育館スタジオ型多目的中講義室において、総長から今年度奨学生81名（水産学部を除く）に対して奨学金給付証書が授与されました。

授与式のあいさつの中で総長から奨学名とした新渡戸稲造氏について『札幌農学校の二期生として海外留学を経て同校教授、第一高等学校長、京都帝国大学教授、東京帝国大学教授を歴任の後、東京女子大学学長になられた優れた教育者であったこと、また、「太平洋の架け橋となりたい」と国際連盟事務次長に就任した国際人でもあり、同氏の著書「武士道」は素晴らしい道徳書であるので、今回授与された諸君は是非とも一読することをお勧めする』と経歴と業績等について紹介されました。

奨学生は、偉大なる先輩の名を冠した奨学金を授与されたことにより、今後も勉学に一層励むべく自覚を新たにしておりました。

ニューメニュー

①北海道大学新渡戸奨学金を開設
②北大―JICA連携協力協定関連事業開催
③理学部創立七十五周年記念式典を開催
④サイエンスカフェ始まる
⑤各国の民族歌謡と踊り、ファッション
⑥光学顕微鏡使った研究スタート
⑦最先端の機器、企業に貸し出し

研究最前線

北大―JICA連携協力協定関連事業開催

北大とJICA（独立行政法人国際協力機構）は、平成17年4月12日（火）に開発途上国への国際協力の促進及び国際協力に資する人材の育成を目的として相互の協力が可能な分野において連携を推進するため、連携協力協定を締結しており、これに基づく、第一回北大―JICA連携協力協議会を、12月7日（水）に北大で開催いたしました。

協議会では、協定締結以降の北大とJICAとの連携状況として、学生向けの青年海外協力隊特別募集セミナーを開催したこと、JICA職員による北大国際交流科目の授業の提供を準備中であること、海外での連携協力事業としてスリランカ、内モンゴルでの連携を検討中であること等の現況報告が行われました。

また、北大の国際戦略構想及び、JICAの改革の今後の方向性の紹介などが行われた上で、今後の連携協力の進め方について、インターンシップの受入れ枠の拡大や、教員の語学力向上の必要性、JICA札幌の宿泊施設の有効活用などを含む幅広い事項について、意見交換が行われました。全学的・組織的に国際協力への対応を図り、北大が長年積み上げてきた国際協力の実績を基礎として、「持続可能な開発」をはじめとする人類が直面している喫緊の諸課題の解決に向け、相互に連携して、より積極的に国際貢献を推進していくことが確認されました。また、シニア海外協力隊は69才迄応募可能で、北大OBが多数参加しております。

理学部創立七十五周年記念式典を開催

平成17年11月11日（金）午後二時から、理学研究科・理学部五号館大講義室において、約二〇〇名の参加者を集めて北海道大学理学部創立七十五周年記念式典が間催されました。

式典は理学研究科長のあいさつに始まり、引き続き総長、毛利衛日本科学未来館館長及び鈴木章名誉教授からあいさつがあり、その後気象研究所主任研究官の忠鉢繁氏より、「南極オゾンホールの発見とその後」と題して南極オゾンホールを世界で最初に発見したときの状況等について、京都大学大学院理学研究科教授の齋藤軍治氏より、「有機導電体（半導体、金属、超伝導体）の化学の現状と展望」と題して一九五〇年代に日本人が創製した導電性有機材料の歴史と展開について、ハワイ大学生物発生研究所長の柳町隆造氏より、「私の歩んだ道と夢」と題して大学生時代に同氏を魅了した生殖細胞に関する概念についてそれぞれ講演が行われました。

サイエンス・カフェ始まる

北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット（COSTEP＝コーステップ）が「コーヒー片手に科学を語ろう」をキャッチフレーズに、十七年十月八日午後五時から札幌・紀伊國屋書店一階インナーガーデンで市民に科学を親しんでもらう催しを始めた。名づけて「サイエンス・カフェ」。

一回目は国立天文台広報室長の渡部潤一氏をゲストに「宇宙の香りのコーヒータイム」と題して約二時間行われた。この催しは今後毎月第二金曜日の午後六時から開かれ二回目は「世界遺産と科学」以後「サンタのふるさとの科学教育」「もしものときの科学―地震と防災について」「雪の有効利用」などと続けられる。

ゲストの渡部氏も紙コップのコーヒーを飲みながら…

7歳の子も興味深そう

ゲスト（専門家）と司会者がトーク形式でやりとりしながら地球外生命は存在するかなどを中心に行われた。参加無料、出入り自由、各自で飲み物を持ち込み、気楽なムードで興味深そうに聞き入った。

会場の壁には、さまざまな宇宙の写真が貼られ、月面のスライドも。集まったのは七歳の男の子をはじめ、中高年や若い男女。用意した椅子が足りず、立ち見もでき、それでも会場入り口までいっぱいになり、あきらめて帰る人も出たほど。二百人を超す老若男女が紙コップ入りのコーヒー、ペットボトルのお茶を飲みながら熱心に耳を傾けた。

立ち見の人もいっぱいの会場

渡部氏は「お星さまは永遠でない。百億年ぐらいで死ぬ」「太陽の表面は六千度あるから生命は存在しない」などとわかりやすく説明。時折、司会の杉山滋郎北大理学部研究科教授が「惑星にはすべて生命があるのか」などと質問。

こうしたかけ合いを続けた後、会場から質問を受けた。「生命の起源は地球か宇宙か」という問いに渡部氏は「たぶん地球だろう」と答えた。

集まった人たちは出入り自由にもかかわらず、席を立つようすもなく、二時間たっぷり学習した。

各国の民族歌謡と踊り、ファッションショー

――北大国際文化祭

まさに歌と踊りの饗宴だった――。十七年十二月十日午後から北大クラーク会館講堂で開かれた「第一回北大国際文化祭」。諸外国の若い男女がそれぞれの国の民族衣装などに身を包み、あでやかなパフォーマンスを繰り広げ、会場を埋めた市民らを熱狂させた。

北大には現在七十九カ国、地域からの留学生が七百六十四人いる。これまで毎年の北大祭などでは各国の料理の出店などで北大生、市民と親睦を計って来た。これを組織的に発展させようと、十七年四月「北海道大学留学生協議会」を結成。その記念行事として「北大国際文化祭」が企画された。

この日は午後二時から同協議会会長、サシーム・パウデルさん（ネパール）が「今日の文化祭をみんなで楽しみましょう」とあいさつし、さっそく文化祭が始まった。

まず、男女二人の司会が登場。各国の位置や日本との距離、四季の移ろい、名勝、音楽などをスライドを使って紹介。漫談風に披露しながらも時折トチるなどあって、会場は開始早々から爆笑の渦。

ナイジェリアからスタート、インドまで十三カ国、地域の独特な歌や踊りが繰り広げられた。なかでも人気を呼んだのがフィリピンのおなじみのバンブーダンス。また、モンゴルの女性四人が「さくら」や「マリモのうた」を上手な日本語で唄い、大拍手を受ける。

さらにインドネシアの男女十四人が「アンクルン」という竹製の民族伝統楽器を使って演奏したが、美空ひばりの持ち歌「川の流れのように」を見事なハーモニーで披露し、女性が日本語で唄うと、会場から割れんばかりの拍手が……。

パフォーマンスは次々と息つく間もなく続き、インドの民族踊り「ダンディア」でひとまず文化祭は幕。

第三部として、カナダ、ネパール、中国など十三カ国の男女による民族衣装ファッションショーが繰り広げられ、あでやかな色、独特のデザイン、スタイルに会場はうっとり。

最後は会場の人も一緒に、ジョン・レノンの「イマジン」の大合唱で締めくくった。

この日は時折吹雪く悪天候だったが、五百十人収容の会場はほぼ満席。なかには和服姿の中年女性や、中国のドレスを身につけた若い留学生など、各国の衣装もあちこちで見られ、会場全体がまさに国際交流の場だった。

フィリピンのバンブーダンス

「アンクルン」の演奏

各国のファッションショー

研究最前線

光学顕微鏡使った研究スタート

ニコンの子会社が寄附

北大は株式会社ニコンの子会社の株式会社ニコンインステック（日下裕文社長）からの寄附で、同大の電子科学研究所（北区北十二条西六丁目）に「北海道大学電子科学研究所ニコンバイオイメージングセンター研究部門」を十七年十月に開設。同年十一月から本格的に稼動を始めた。

この研究部門はニコンインステックのほか数社が最先端の装置や試薬を提供し、電子科学研究所の専任スタッフにより運営され、それら最先端の顕微鏡などの設備は、北大だけでなく、幅広く研究者や学習者に開放され、バイオ分野のイメージング技術とその応用に関する研究や教育に役立たせる。同じようなセンターはアメリカのハーバード大学、ドイツのハイデルベルグ大学にもすでに開設されていて、これで日米欧の三拠点がそろった。

同大は文部科学省の21世紀COEプログラム「バイオとナノを融合する新生命科学拠点」に採択され「ナノバイオサイエンス」という新しい生命科学領域の研究を創設するため、電子科学研究所をはじめ複数の研究科・研究所に所属する研究者が異分野横断的研究を進めている。

電子科学研究所では、細胞の中で繰り広げられるさまざまな現象をリアルタイムに可視化する「ライブ　セル　イメージング」技術に関わる研究に力を注ぎ「北海道大学電子科学研究所ニコンバイオイメージングセンター研究部門」を通じて得られる最新の研究結果を、いち早く顕微鏡利用者に還元できるよう、ニコンなどと共同して、新製品や新技術の開発に反映させ、ナノバイオサイエンスの研究を続けている。

◇　◇　◇

〔担当スタッフ〕　電子科学研究所　上田哲男教授、永井健治教授、齋藤健太助手

〔主な設備と目的〕①スペクトル対応レーザ共焦点顕微鏡（目的・三次元画像解析、経時変化観察、蛍光のスペクタル解析等）

②高速共焦点顕微鏡（目的・リアルタイム蛍光イメージング解析等）

③エバネセント顕微鏡（目的・一分子蛍光観察等）

④マルチカラータイムラプス顕微鏡（目的・多色蛍光を用いた経時変化観察等）

研究最前線

最先端の機器 企業に貸し出し

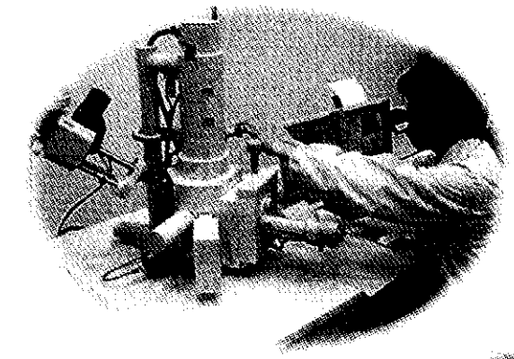
北大は十七年十一月から「オープンファシリティ」という事業を行っている。同大にある最先端の研究機器を安く民間企業などに開放する事業で、産学の連携を強めるねらい。

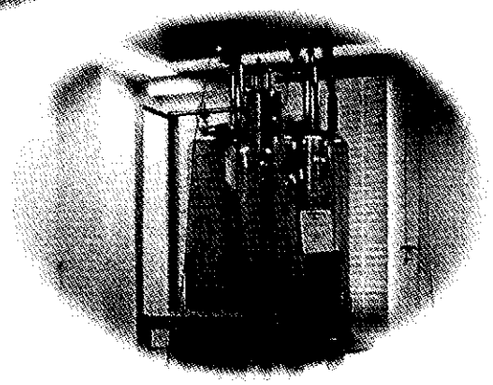
同大北キャンパスにある創成科学研究棟が〝舞台〟で、同大の創成科学研究機構、触媒化学研究センター、電子科学研究所附属ナノテクノロジー研究センターが所有する超精密な電子顕微鏡や各種の分析装置など五十一台が対象。一台数億円する機器もあるという。

利用出来るのは同大の教職員、学生、研究員はもとより、同大の教職員と研究協力関係（共同研究など）にある産学官の研究者ら。

装置を使いたい場合、まず利用したい装置の担当者に相談。担当者による指導または講習を受け、「共同利用申請書」を年度ごとに北大キャンパス合同事務部に提出して利用ＯＫとなる。

利用者は原則として研究の空き時間だけ。また利用料は同大オープンファシリティのホームページに示されているが、機器により一時間当たり数千円から数万円という。このような取り組みは全国の大学でも珍しく、大学と企業の共同研究をより広げることに役立ちそうだ。





北大で貸し出す
さまざまな精密機器

トピックス

青年寄宿舎の閉舎

メニュー
①青年寄宿舎の閉舎
②レーン先生のご息女訪問
③北海道大学カードの加入者が五〇〇人突破
④北海道大学広報センターについて
⑤倒れたポプラ並木見事復活
⑥二十七年後の地元発、チセ・フレップ
⑦旭山動物園の試み

「宮部先生の寄宿舎」「禁酒禁煙の寮」の通称でも知られた、北大の独立学生寮「青年寄宿舎」（札幌市中央区）がこのほど一〇七年の歴史に幕をおろし、同舎の創立記念日の十七年十一月三日、関連した一連の行事が行われました。

ここに若干の沿革をご紹介します。青年寄宿舎は明治三十一年（一八九八年）に当時の札幌農学校生の有志により札幌ＹＭＣＡの寄宿舎として設立されたものが五年後に独立し、初代舎長となった宮部金吾札幌農学校教授がクラーク精神を汲んで提起した信仰の自由と禁酒禁煙の二つの理念のもとに運営され、昭和八年（一九三三年）に法人格を得たものでありました。

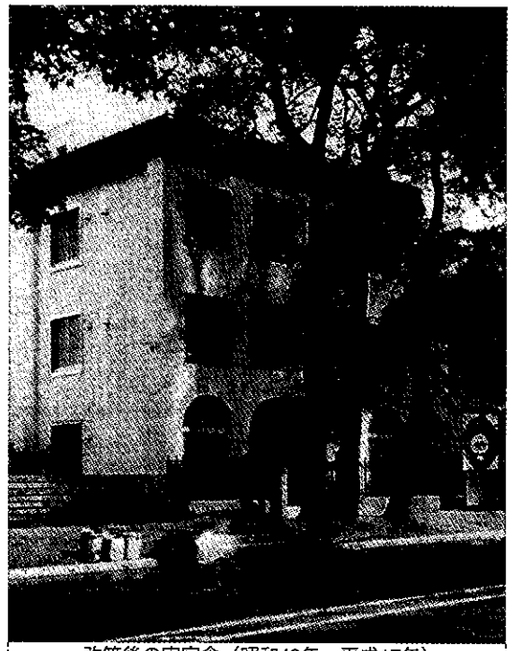
土地は明治三十三年（一九〇〇年）に植物園北隣の現在地が札幌農学校により提供され（青年寄宿舎が法人化後は貸与、戦後は大蔵省貸与）、昭和四十八年（一九七三年）には「払い下げ」となり、翌年ここに舎が改築されていました。

青年寄宿舎の旧建物（明治33年～昭和49年）

創立以来、青年寄宿舎は、シンプルな規則と学生の自治的な運営による学生の訓育において高い評価をうけ、その建設や修繕・改築他諸事業に際しては舎・大学の関係者のみならず、一般市民有志からも幅広い支援や寄附を得てきました。創立三十周年祝賀会（昭和二年十一月）では出席した当時の佐藤昌介北大総長や学生監の時任一彦教授から宮部先生のご功績とともに青年寄宿舎生は讃えられました。

レーン先生のご息女訪問

レーン記念賞をご存じでしょうか?学部一・二年次に受験したTOEFL―ITPの成績が特に優秀で、かつ、他の英語成績も優秀な学生に贈られる賞です。北海道大学で第二次世界大戦をはさんで通算三十二年の長さにわたって外国人講師として英語教育に尽くしたハロルド・M・レーン（一八九二～一九六三年）の功績を記念して一九六四年（昭和三十九年）に設けられた奨学金を引き継ぎ、現在はメダルを授与しています。



改築後の寄宿舎（昭和49年～平成17年）

青年寄宿舎は百年余にわたる間に九〇六名の「有志」の青年を送り出してきました。その中には、世上もっとも知られたところでは「アラビア太郎」の異名をとった、オブラート製造や石油開発の山下太郎（農芸化学科卒）がおり、さらに、戦前「北海道畜産界の父」とたたえられた石澤達夫、同じく馬産学で貢献した高松正信、出版社・叢文閣をおこし有島武郎の創作活動を支援するなどした足助素一（林学実科卒）、クラークとケプロンの伝記を著した逢坂信吾、などがくらしました。

そのレーン先生のご息女が、今回約二十年ぶりに札幌にお見えになり、十七年十一月二十八日（月）北大を訪問されました。

五女のキャサリン　ブルーワー氏、孫のマーク　ブルーワー氏は、キャサリン氏のご学友木下俊郎名誉教授の案内で総長を表敬訪問され、総長室においてレーン先生との思い出を語り合いました。

当日は天候にも恵まれましたので、モデルバーン、外国人宿舎跡地、ポプラ並木、クラーク像、エルムの森、農学部前庭を回られました。

今回のご訪問は、関係者にとっても生涯北大の英語教育に尽くされたレーン先生、夫人の功績を再認識する良い機会となりました。

北海道大学カードの加入者が五〇〇人突破

北大カードは、北海道大学連合同窓会（会長：松田昌士JR東日本会長）が北海道大学と連携して法人化後の北海道大学のファンド作りの一つとして発行するものです。北大カードを利用することで、同窓生にとっては後輩の支援に、教職員にとっては、職場の活動資金確保につながります。北大カードのキャッチワードを「北大人の証明書」としたのは、このカードが母校や職場を想う方々を証明する一つとなると共に北大人連携のための証明書となるとの思いからです。

主な特典：北大からは、附属図書館の入館証、植物園の無料入園証、北大ポストカード（―伝統と安らぎの世界へいざなう―）の贈呈等。

応援企業からは、道内西武系プリンスホテル及びゴルフ場等の関連施設の特別割引、高輪、新高輪、品川のプリンスホテル宿泊料の特別割引、紙おむつの宅配等のトータル介護・教育講座紹介サービス等。UCカードからは、ポイント、トラベル・レジャーサービス等のサービスの他、カード入会後三ヶ月以内に三万円以上の買い物をすると二千円のギフトカードプレゼントやゴールドカードでの買い物三十万円毎に二千円のギフトカードプレゼント等盛りだくさんのサービスがあります。

今後、応援企業の増加も見込まれており益々魅力的なカードを目指します。

トピックス

北海道大学広報センターについて

【交流プラザ「エルムの森」】

北海道大学には観光客の方々など札幌キャンパスを訪れたみなさんが自由に休憩できる広報センターとして、交流プラザ「エルムの森」を設置しています。この建物は、明治三十四（一九〇一）年に建てられた「旧札幌農学校昆虫学及養蚕学教室」を改装したものです。重要文化財に指定されているモデルバーンなどを除けば、北大構内に現存する建物のなかで最も古いもので、平成十二年には登録有形文化財になっています。

正門（札幌市北区北八条西五丁目）から中央ローンを左に見ながら歩いて行くと、やがて右側に「古河記念講堂」、左側に「クラーク博士の胸像」が見えてきます。クラーク先生の向側に見える緑色の屋根で白い壁の平屋の建物が、交流プラザ「エルムの森」です。

交流プラザ「エルムの森」

ここには、大学概要、大学案内、学部案内、各種広報誌の閲覧や広報ビデオの視聴、道内他大学のパンフレットや地域の生活情報などを閲覧できるように資料をそろえています。

北大の入試関係の資料も配付しており、夏休みや修学旅行を利用して多くの受験生や高校生が訪れます。なお、四月からはこの建物にショップを開店しました。ここのショップでは北大応援クッキー「札幌農学校」をはじめとして各種の北大オリジナルグッズを販売しますので、北海道大学へお越しの際にはぜひお立ち寄りください。

開館は、平日の朝九時から夕方四時半までですが、毎年、夏の期間は土曜日・日曜日も開館しています。

【東京オフィス】

東京都にある新高輪プリンスホテル内に「北海道大学東京オフィス」があります。

ここは主に①北大教職員の活動拠点、②学生の就職活動の支援、③大学広報、④同窓生との交流の場として利用することを目的に設置しています。一般の皆さんも東京で北海道大学に係わる資料などを手にすることができますので是非ご利用ください。

開館時間は平日の朝の十時から夕方の六時です。

●交流プラザ「エルムの森」
札幌市北区北九条西八丁目
電話　〇一一―七〇六―四六八〇
●東京オフィス
新高輪プリンスホテル一階
ミーティングフロア　サファイアルーム
東京都港区高輪三―十三―一
電話　〇三―五七九五―〇五六〇

トピックス

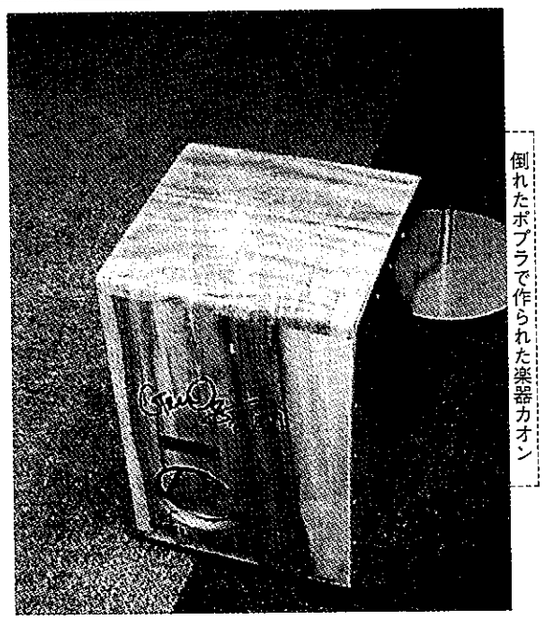
倒れたポプラ並木、見事復活

植えられた若いポプラ

平成十六年九月八日の台風十八号で無惨にも多くが倒れた北大名物のポプラ並木が平成十七年六月一日、見事によみがえった。倒れて助けられなくなった老木のあとには若木が植えられ、傾いたものはクレーンで元に戻すなどして再生された。また、新たに遊歩道も整備された。

一方、倒れたものは市民に無料で配られたほか、各地のクラフト職人によって、大小種々の器、道具、楽器に変身し、構内の「北大交流プラザ・エルムの森」などに飾られている。

理学部裏に約二百五十メートルにわたって続いていたポプラ並木は十八号台風によって、目もあてられないほど痛めつけられた。約五十本あった大木のうち、十九本が倒れ、八本が傾いた。このうち、助


倒れたポプラで作られた楽器カオン

トピックス

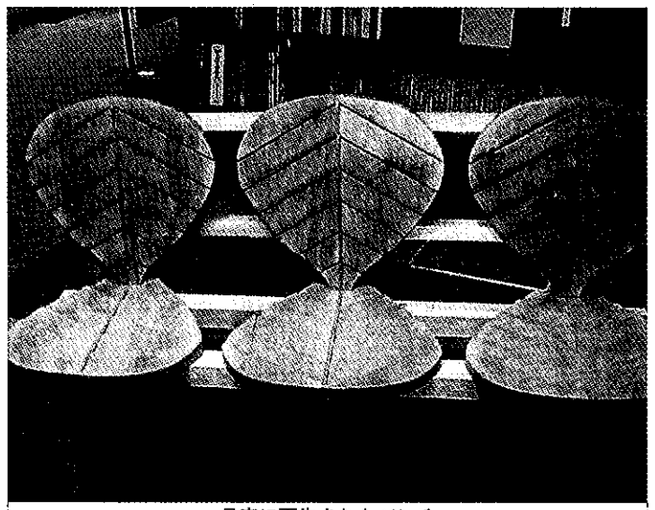
かる木はクレーンなどで起こしたが、老木のため救いがたいものも多く、これらは撤去。そのあとに高さ約三㍍の若木を植えた。この若木が以前と同じ高さになるには二十年以上かかるという。それでも結局、七十数本のポプラ並木となって、見事復活した。

これらに要した費用は三千万円を超す。しかし、北大内に設けられたプロジェクトなどの呼びかけに、全国のポプラファンが即応。二千数百万円の寄付が集まった。

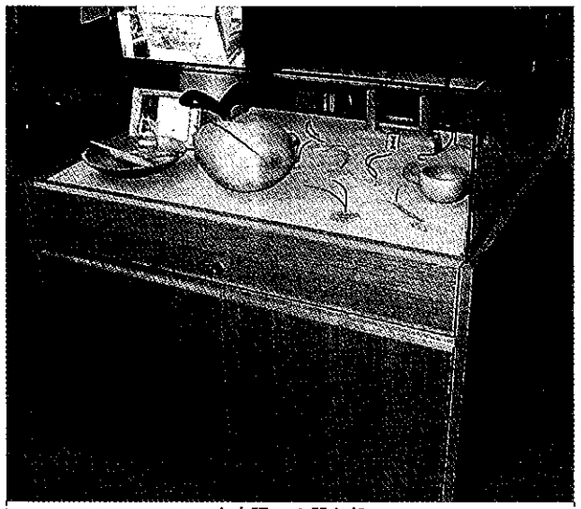
また、倒れた木の一部は市民に無料で提供し、持ち帰った人たちは庭に置くテーブルなどに利用している。さらに、網走管内置戸町にある木工芸品製作所「オケクラフト」は机や椅子などの大物や、時計、ペーパーナイフ、皿などを。道立林産試験場はベンチや南米ペルーで生まれた、手でたたく打楽器「カオン」を作った。

このほか、埼玉県に住む楽器製作者にチェンバロの作製を依頼した。さらに、札幌の林業土木業者が大きな輪切りでモニュメントを加工し、札幌市に贈った。同市では時計台前庭、芸術の森などあちこちに設置した。

北大のポプラ並木は倒れても色々な方法で愛され、再び観光客らの目を楽しませている。北大魂が台風に打ち勝ったといえるのではなかろうか。



見事に再生されたベンチ



大小種々の器と机

トピックス

二十七年後の地元発。チセ・フレップ

高橋幸彦
（昭和49年入寮）

お断りと言い訳から。チセについて私は、まったくの門外漢です。昭和四十九年秋の補充入寮で、北寮二階を根城にし、あの火災を経て、昭和五十二年春にめでたく卒寮しました。ふるさと十勝に関することですから、情報としてチセ建設運動が行われていることは知っていました。就職して十勝に帰って以降、存在を認めながらも、一度も足を運んだことがありません。

原稿を依頼されたときに「ふさわしくない」とお断りしたのですが、無理やり引き受けさせられました。この点を差っ引き、建設から二十七年経過した地元・士幌町側の感想を中心にしたリポートだと踏まえた上で、お読みください。認識違いはご寛容のほどを。

◆

士幌なまくら会の原尾進さんに連れられて、初めて訪れたチセ・フレップ（赤い小屋）は、東大雪山系の最南端、東ヌプカウシヌプリ（一、二五二㍍）の麓、建設中止になった士幌高原道路（道道士幌然別湖線）から三〇〇㍍ほど入ったミズナラ林のなかにありました。道道からは直線でそう離れていないのですが、象徴となる赤いとんがり屋根は、林のなかに隠れ、通りがかりの人はまったく気づかないと思います。道道脇に小さな案内看板がひとつ。見落としそうです。士幌市街から西へ一五㌔以上離れており、たぶん、一人で訪ねたなら、たどり着けなかったでしょう。しかも、鍵を借りにいった士幌町企画課で「熊が出るかも」と脅かされましたので、小道に分け入るときに結構ビビったかもしれません。

丸太小屋を想像していましたが、なかなか立派な木造建築物です。笹薮に入り込んで、まず写真を一枚。どの角度から撮影しても、木が邪魔になり、私のカメラの腕では限界がありました。玄関側に回ると、チセ・フレップの表札が脇に立てかけてありました。原尾さんに持ってもらって撮影。

中に入りました。広さは中二階合わせて二十坪（六四・八平方㍍）。一階北東側に台所、東と南に窓、木漏れ日だけなので、少し薄暗いです。西側には寮生と町民の交流の場になっている「林間学校」参加者の寄せ書き、それから利用者ノート（小屋日誌）など貴重な資料の詰まった書棚。小屋日誌は現在、サイト上の書き込み形式になっており、そのコピーの綴りもあります。部屋の照明はランプとはいきませんが、なかなかムードがありそうな感じです。誰が作ったのかブランコもありました。中二階はタタミで、二十人ぐらいは宿泊できそうです。室内は年輪を刻んでいますが、決して古ぼけてはいません。

◆

さて、チセは昭和五十三年に建てられました。旧寮が閉まる昭和五十八年に発行された「士幌小屋活動の記録1チセ・フレップよ永遠に」を中心に建設の経緯をざっとおさらいします。

五十年に恵迪寮で行われた結城清吾さん（当時士幌町職員、早稲田大学助教授を退職して役場入り）の講演をきっかけに、寮生が士幌の農家に民泊するなどの交流がスタート。士幌町は「自由大学構想」のなかで寮生を受け入れていきました。その交流のなかから「根城を」との声が上がり、五十一年に寮内部屋サークル「設立委員会」が発足。教官回りなどによる資金集めと建設地選定などの具体的活動に入りました。成果の少なかった大学学生部との折衝を経て、用地の借り入れ、小屋の所有権などの課題をクリア。建設資金も士幌町が二〇〇万円、当時の十勝支庁長が八十万円の支援を決断し、六一三万円が集まりました。

こうして学生の山小屋建設は、町と農協（現ＪＡ）が全責任を負うことで、ようやく五十三年に完成しました。

◆

チセは現在も士幌町役場によって管理されております。土地はＪＡ士幌町の所有です。管理費は年間十万円が予算化されています。年間の利用者は年々減り一〇〇人ちょっと。チセ完成直後の五十六年には一〇〇〇人を超えていました。町の現在の企画課長、森本英伸さんは「もう少し利用されれば」と話しています。

うっそうとした林の中に建つチセ・フレップ

チセオープン後、士幌町民と寮生の交流は、農業実習、五十六年に始まった林間学校、前述のなまくら会と合同の冬のふるさと縦走ツアーなどが行われました。すでに縦走ツアー、農業実習は途絶えて久しくなります。士幌町内の子どもたちとの交流事業である林間学校は当初、定員を超える子どもたちが集まっていましたが、ついに平成十七年は休止になりました。少子化とともに「同じような他の事業も行われている」（町企画課）こととともに、熱が失われつつあることも原因と思われます。当初の太かったつながりは、時を経て、細く寸断されそうな状況になっていると感じました。

寮生との関係の変化について、縦走ツアーなどを一緒に行ってきた原尾さんは「昔は、汽車やヒッチハイクで来た学生が、よくうち（市街地の書店）に寄ってくれた。うちから歩いてチセに向かう学生もいた。個人的交流もあった」と、さびしがっています。二十七年の交流の成果について「マチは北大生のチャレンジ精神を学んだ。ここに思い出のある恵迪ＯＢはすごい数になる。この全国に広がるネットワークは何にも代えがたいマチの財産」と総括。「建設三十周年に向けてネットワークを活性化できれば」。

◆

建設当時、町の企画課長だった浪内一洋さんのお話。「学生さんは夜行列車で来て、建設に一生懸命だった」と振り返った上で、町が寮生を積極的に受け入れた理由について「北大生と地元の若い人が交流を図ることで、食糧生産に理解を深めてほしかったし、農業青年にも刺激になってほしかった」。その狙いは「なかなか理想どおりにはいかなかった」と言います。「職業人と学生のギャップは思ったより深かった。学生は本州の人が多く、地元に深い関心を持っていなかった面も」。

交流促進とともに、チセを建設することで士幌高原の観光に弾みをつける狙いが、町側にありました。士幌高原は「見晴らしはすばらしいけれど、なにもないところ」（浪内さん）でした。士幌町は全国に名だたる農業の町で大田寛一さん（全農会長）を輩出した土地柄ですが、観光に資する名所はありません。そこで着眼したのが然別湖に近接する士幌高原の開発です。

チセ・フレップの表札

近辺は戦後、警察予備隊（自衛隊）が演習場として目をつけた場所で、士幌町側が気骨を持って拒否した結果、隣接する鹿追町に「然別演習場」が設けられています。それだけに町側としても別の用途で活路を開きたかったのでしょう。士幌高原からヌプカを越え、然別湖に抜ける「士幌高原道路」を基点に、士幌高原ヌプカの里の観光開発に望みをかけ、ばく進しました。道が道路建設の中止を決めるまで、町役場の最大課題は、わずか二キロちょいの「士幌高原道路」建設促進でした。チセの背景にも「学生さんにも開発を理解してほしいという気持ちがあった」（浪内さん）。

◆

チセ建設後の経過について、浪内さんは「せっかく苦労して建てた施設だが、学生、町とも世代交代して熱意が続かなくなってきているのは事実。行政の方に問題があった。高原道路の促進に力が入ってしまった。チセをもっと大事にしなけりゃならなかった。学生さんはユニークな人が多かった。社会に出て立派になっている方ばかり。私個人は学生さんとつながりを持てた。チセに来た学生さんも、士幌のことを時々思い出してくれていると思う」と話しています。

そしてチセの今後について「もう一度、設立の原点に戻って考えることが必要。また士幌高原も、この機会に一帯の利用を再度考えるべき。なんといっても眺望はすばらしいのだから」。

建設三十年の節目は目前です。

（教育学部卒、十勝毎日新聞社勤務）

◇◇◇

トピックス

旭山動物園の試み

菅野　浩
（昭和30年入寮）

旭山動物園は一九六七年に開園した日本で一番北の動物園です。今は、動物たちの生き生きした生態をユニークに観せる「行動展示」で有名になり、たくさんのお客さんで賑わっていますが、このような楽しい観せ方があるとき突然にできたわけではありません。その陰には、どうすれば自分たちが理想とする、お客さんに感動してもらえる動物園をつくることができるか真剣に議論し合い、そのために頑張った二十数年にわたる飼育係員たちの努力の積み重ねがあるのです。

人気呼ぶアザラシ

一九八〇年代に入り旭山動物園は、新しいレジャー施設の出現と展示施設の老朽化によって入園者が減少して赤字がかさみ、旭川市の運営する施設の中では、厄介なお荷物施設とさえ言われるようになってしまいました。

一方では「動物園は、野生の動物を捕まえてきて、狭い檻の中に閉じ込めて見世物にして、死ねばまた捕まえてくるという、野生動物を消費する残酷施設だ」、「動物園の動物は、野生の姿ではない、本物の野性の姿を観たければ現地に出かければよい」といったような動物園罪悪論や動物園不用論がマスコミを中心に取り上げられていて、動物園で仕事をする者にとっては不本意なつらい時期でした。

確かに、これらの論の中には、動物園がこれまで歩んできた歴史の中でのマイナスの部分を鋭く指摘しているものも少なくありません。しかし、動物園を一方的に悪いと決め付けるこのような論には、少なからず違和感がありました。動物園には地球上の様々なところから多様な動物たちが集まり、多くの市民がそれらの動物たちとの出会いを楽しみに来園されます。そうして、小さな子どもたちにとっては、初めてこうした生きた動物たちと出会うところが動物園なのです。

私たち動物の飼育に携わるものたちは、動物園の役割について、動物園で何ができるか真剣に議論しあいました。そうして、お金が無くてもできること「教育活動」をはじめたのです。テーマは自分たちが日頃感じている動物たちのすごさ、素晴らしさをお客さんた

トピックス

ちに伝えること。それは、生きている生命の輝き、奇蹟の星『地球』で共に生きている動物たちへの生命の共感を伝えてゆくことでもあるのです。

迫力あるホッキョクグマ

最初に始めたのは、飼育係が動物たちの前で話をする「ワンポイントガイド」です。

飼育係員たちは、どうすれば自分の担当する動物たちのすごさや素晴らしさを伝えることができるかを考え、さまざまな工夫をしました。

しかし、このワンポイントガイドも最初から順調にいったわけではありません。この案が出されると「それは飼育係の仕事でない」「おれは他人と話をするのが苦手だから、飼育係になったのに、大勢の人の前で話すなんてとんでもない」と反対の声もありました。

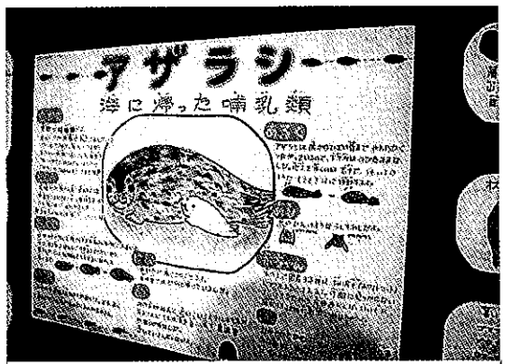
初めて話をする前の夜は、緊張で眠れなかったり、おなかが痛くなったり、食欲が無くなったり、一週間も前から奥さんとこどもの前で練習したりと、大変でした。

しかし、回を重ねるうちにお客さんの反応に手ごたえを感じるようになり、入園者がどんなことに興味をもち、何を求めているのかを感じ取れるようになっていきました。

ワンポイントガイドは、これを更に発展させた「もぐもぐタイム」と共に、旭山動物園の教育活動の柱として、二十年経た現在も続けられています。

次に始めた「手書き情報板」は動物のネーム板や解説板とは別に、飼育係が手書きで担当する動物の情報を、リアルタイムで知らせるもので、その数の多さはたぶん日本でも一番と思われ、動物たちと入園者との距離を近づける役割をはたしています。

動物収容施設が古くて狭く、動物たちがかわいそうという声の中で、飼育係員たちは、動物たちの居心地を少しでも良くしようと努力しました。動物は自分の居るところが居心地が良くて安全であれば、ストレスは感じません。よく、動物にとっては観られることが大きなストレスになると考えて、動物舎に隠れる所や退避場所を設けて、結果として動物と入園者の距離を遠くしたり、動物が観えな



手書き情報板

水中を遊ぶアザラシ

トピックス

かったりしている例があります。しかし、動物たちは自分の居るところが安全で、安心できる居心地のいいところであれば、観られることはほとんど苦にしません。旭山動物園においでになって、動物との距離を近く感じられるのには、こうした飼育係員たちの努力の積み重ねがあるのです。

自分たちが日頃接して感じている動物たちの素晴らしさ、すごさ、その生命の輝きを、どうしたら少しでも多く入園者に伝えてゆくことができるか、二十数年にわたる飼育係員たちの、試行錯誤しながらの積み重ねの成果として『行動展示』方式が生み出されてきたのです。

どこの動物園でも地味な存在で、注目を集めることのなかったオランウータンも、地上十七メートルを綱渡りすることで、歓声と拍手のあがるスターに変わりました。

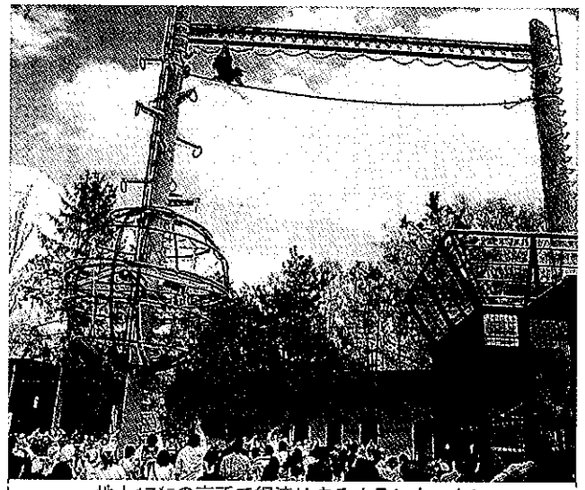
泳いでいる姿をプールの上から覗き込むことしかできなかったペンギンやアザラシも、水中トンネルやマリンウエイによって生き生きとした姿を観ることができるようになりました。まさに、水中を飛ぶペンギンや垂直に潜ったり浮上したりするアザラシの姿を、横や真下から観察できるのです。

観客めがけてプールに飛び込んでくるホッキョクグマの迫力や、餌になるアザラシの気分が体験できるカプセルなども、単なる思い付きやアイデアでできたものではありません。

動物たちのすごさ、素晴らしさをどうしたら伝えることができるか、『行動展示』は飼育係員たちの積み上げの帰結として生まれてきたのです。

どうぞ、旭山動物園に足を運んで、動物たちの生命の輝きを共感してみてください。

（昭和三十四年　獣医学部卒）



地上17㍍の高所で綱渡りするオランウータン

◇
◆
◇

寮歌物語 I

新しき陽は

新しい寮歌への意気込みはあれど

昭和40年度寮歌

作歌　金子　公良

（昭和39年入寮）

作曲者の西雪氏よりの突然の電話で寮歌作歌の経緯を認めるよう依頼を受けたのが三週間程前。そして参考にと「恵迪」第五号を送付いただいた。不覚にもこんな立派な同窓会誌が発行されていたことを初めて知り驚きであった。直後スペイン、マドリッドへの出張があり、ピカソの「ゲルニカ」の実物を目の当りにした。その余りの迫力に衝撃を受け興奮冷めやらぬ中、約四十年の昔にタイムスリップすることとなった。馬齢六十にならんとして、青春の熱き思いが燃え尽きかけている我が身と、ピカソ五十六にしてあの惨劇に対する怒りの凄まじさとの余りの乖離を恥じ入りながら往時を偲ぶこととする。

昭和四十年、終戦後二十年を経過し、高度経済成長へ大きく踏み出した節目の年であった。前年に東海道新幹線が開通、東京オリンピックが華々しく開催され、女子バレーボールの活躍が印象に残っている。反面、ヴェトナム戦争が五年程経過泥沼化する中で反米、反戦平和の運動の高揚期でもあった。恵迪寮の中でも、現状に飽き足らぬ若者がいくつかのセクトに分かれ己が主義の正当性を声高に主張していた。学寮は学生運動の巣窟とのあらぬ嫌疑も強くなり、締め付けらしき圧力も感じられた。多少身に覚えのある者はともかく、お門違いと迷惑な思いをした面々も多かったようではあるが。学生が沈黙するより、騒ぐ社会の方が健全であると今尚確信しているがいかがであろうか。対立する立場の相手に対し、お互いに何でもっと寛容になれなかったのかとの後悔の念が今も頭をよぎる。

そのような騒然たる世情の中でも、多少の経済的な不都合を除いてはの話であるが、若者は思い切り自由な寮生活を謳歌していた。

さて恒例の寮歌募集である。盲蛇に怖じずの譬えではないが、何かの弾みで締め切り直前に勇躍挑戦することとした。それまでの寮歌の重厚な構成、難解な文句は敬遠して時代を意識した新しいタイプの寮歌を目指そうとの意気込みであった。当時は現在ほどの閉塞感は無く、発展期を迎えた経済情勢のもと、良きにつけ悪しきにつけ新しい時代の到来の予兆があったような

気がする。

そんな背景のもと「新しき陽は今昇り　空の果て黎明を告ぐ」の書き出しはすんなりと決まった。日ではなく陽としたのは、昨日までとは異なる太陽が燃えるように昇りだした情景を意識してのことであった。平和と言う寮歌には余り馴染まない文句を敢えて加えたのも時代の反映であった。

しかし思いに追いつく素養の無さは如何ともし難く、苦し紛れに緒先輩の苦吟のエキスをいくつか拝借した内容になったことは今もって汗顔の至りである。

確か恵迪寮の教育問題研究会なる部屋であった。教育学部へ進まれた西田大兄、作曲者の西雪氏、後に髭の似合う石渡氏、温顔の中島氏でわいわいがやがや、徹夜でご協力いただいたことを覚えている。同室であることも幸いし、西雪氏のセンスにより溌剌とした曲に仕上げていただいたことが、歌詞の未熟を補って恵迪寮歌の末席に連なる栄誉を得た次第と感謝である。

大部屋で寝起きを共にし、青臭いながら一所懸命議論し、それなりに人生そして大学、社会を考えていたあの時代。北大に入学したことより恵迪で生活出来ることに意義を感じていた。十年程前懐かしさにかられて訪ねてみると、寮は別の場所に移り、すっかり近代的な造りに変わっていた。今も昔のような濃密な時が流れているのか余計な心配をしつつ、「時」の歩みは三重であるとの先人の嘆きを思い出した。曰く、「未来はためらいつつ近づき、現在は矢のように早く飛び去り、過去は永久に静かに立っている」けだし時間ほど情け容赦なく、そして公平なものは無い。いかなる権力者も大金持ちも時間の経過だけは如何とも出来ず、全ては茫漠たる闇の中へ流れ去る。

あの古色蒼然とした木造の建屋の至る所に刻まれていた落書きの数々、思いつくままに記してみると私の心の中では世界遺産である。

君に似し姿を街に見る時の心踊りを哀れと思え
我が胸の燃ゆる想いに比ぶれば煙はうすし桜島山

そして、水産学部生の送迎の宴で定番であったあの哀愁を帯びた水産放浪歌が耳をよぎる。

しばしの交誼でしかなかったが、函館へ旅立ったあの熱血の好漢のことも頭に浮かぶ。

また便哲なる珍妙な言葉も懐かしい。古来人間が思考を凝らすのに最適なのが三上と言われているようで即ち、厠（し）上、馬上、枕上。まさに便哲は厠上の思考そのもの。余人はともかく、高尚な中身とはならず、もっぱら妄念ばかりであったが。

紙数尽きて、ビ・アンビシャス。この雑文を機縁に孤軍奮闘ながら、今一度熱き心と大志を取り戻す決意で筆を置くこととする。

高らかに寮歌をうたう

初公演の日、気楽に、いい気分で

作曲　西雪　弘光
（昭和40年入寮）

昭和四十年度寮歌、金子公良君作歌、西雪弘光君作曲、「新しき陽は」ァーー、アインスツバイドライ、と叫んでも誰も歌ってくれない。当然のことで、歌えるのは作曲者たる我輩ひとりであろうか。いや、もしかして作詞者の金子氏は歌えるかもしれない。いや、歌えるはず。それでも、たったの二人であります。

ましてや、人様の前で歌われたことなぞ無い。それが四十年程たってから、大観衆ならぬ少観衆の前で歌われたのである。歌うことができたのである。まさしく雌伏四十年、この日を待ちわびて、ではなく、偶然にも本邦初公開、初公演の日が遂に訪れたのでありました。

昨年（平成十六年十一月）小樽朝里川温泉で初めて開催された「三十九・四十会」（三十九、四十年入寮組）において、この名歌（？）を歌う栄に浴したのであります。

三十人程の寮の仲間とモツラの母さん（特別ゲスト）の前で、淀むことなく朗々と歌い上げることができました。

伝統ある寮歌の火を消すことの無い様にとの思いで、時々思い出しては歌っていた日頃の練習の成果であります。それも、元応援団の千川君の尺八の伴奏付きであります。寮歌と尺八とはミスマッチの部類ですが、ここに及んではそんなことはどうでもいいんであります。初めて歌うという気恥ずかしさよりも、誰も知らない歌のせいもあって、酒の力も借りて気楽にとってもいい気分で歌えた、というのが正直な心であります。

これも偏に、「三十九・四十会」の幹事の白浜君が小生を誘ってくれたお陰であります。本誌上を借りまして、心からお礼を申し上げたいと思います。

明治四十年から延々と続く北海道大学恵迪寮歌の作曲者であるという事実は、小生にとりましては、自己満足以外の何物でもありませんが、大変な誇りと名誉なこととして、大袈裟に言えば、我が人生の大きな糧となっているのであります。

数年前、野幌の開拓記念館内の恵迪寮を訪れた時、一つの部屋が寮歌の展示室になっており、毛筆で書かれた昭和四十年度寮歌が壁面に燦然と輝いているのを発見。己の名前を見つけ、同行していた女房と娘の前で胸を張った次第であります。小生作曲なる寮歌は、寮歌集のほかここにもしっかりと残されていることに大満足をしたのであります。言い方を換えれば、CDもテープも何もなく、ただその二つだけということでありますが。世界遺産ならぬ紛れもない恵迪遺産であることは間違いありません。

新しき陽は

（昭和四十年寮歌）

金子公良君 作歌

一

新しき陽は　今昇り
空のはて　黎明を告ぐ
黒き雲　西に流れん
吹きすさぶ　嵐をつきて
平和をと　声は轟く

二

遥ましき　友の怒りに
雄々しくも　我等誓いし
幸の世　永遠に築かん
広き地に　鍬ふりかざし
緑萌え　水流るまで

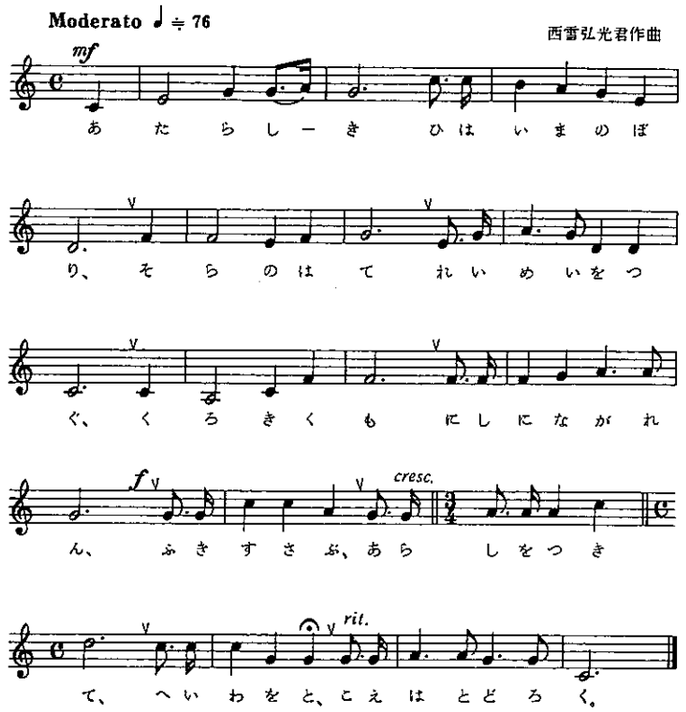
三

輝やける　祖国の山河に
こだまする　我等が雄叫び
一すじの　光求めて
ひたすらに　ただひたすらに
腕組みて　歩み進まん

四

真実の鐘　鳴り響き
森影に　どよめきのわく
自治の旗　風にゆらめき
名を留む　伝え守りて
恵迪は　今よみがえる

新しき陽は



寮歌物語 Ⅱ

生命萌え出で

冬の原生林散策中に浮かんだ詩

平成10年度寮歌

作歌　小日山輝泉（平成8年入寮）

皆さん、こんにちは。私は今、カタールという中東の国で天然ガスを掘っています。この地ではほぼ毎日が快晴です。国土には見渡す限りに砂漠（土漠）が広がり、地平線から毎日飽きもせずに太陽が昇ります。その風景はどこか北海道の原野に似ています。現場には二十一カ国から約九、〇〇〇人の人間が集まっています。同じ部署の同僚には日本人とインド人とフィリピン人とルーマニア人がおります。みな屈強です。そんな中で、日本語交じりの英語を駆使してどうにかこうにか毎日を生きています。

平成十年度寮歌「生命萌え出で」を作歌したのは、恵迪寮の三年目の冬でした。当時私はB棟二階の「ドッキリカメハメ波」という部屋に所属し、カメハメ波（掌から気を放出し、触れずして相手を倒す技）の修行に明け暮れていました。厳しい三日間の修行の末にロウソクの炎が消えたときの喜びと虚脱感は今も忘れません。貴重な青春の時間をそのような一見無駄なことに費やす仲間が恵迪寮には大勢いました。今になって思い返せば、非常に贅沢なことだと思いますし、ともに修行した寮生と今でも顔を合わせて酒を飲むことができるのは大変嬉しいことだと思っています。

作歌をするにあたっては、はじめは春夏秋冬の四季を題材にすることを考えていました。しかし実際に作詞に取り掛かってみると、これまでの寮歌にあった表現の繰り返しが多く出てきてしまいました。何とかしてオリジナリティを出したいと、冬の原生林を三時間散歩した結果、髪が雪で真っ白に凍りつき、出来たのが三番の歌詞です。それからはできるだけ等身大の寮生活を思い浮かべて、一年の中で印象深かった風景を詩に表し

ました。四番が卒寮の時期をテーマとしていることもあってか、誰かの追いコンになるとところどころであの曲をかけてくれる寮生がいたことを思い出します。静かな詩と曲ですが、我ながらいい寮歌になったと思っていますので、これからも歌い継がれていくことをささやかながら願っています。

歌詞のすばらしさにほれ込む

作曲　長谷川　健
（平成7年入寮）

自分で言うのもなんだが、「生命萌え出で」は私の大好きな寮歌のひとつである。このほかに、大正六年度寮歌「魔人の呪い」、昭和八年度寮歌「タンネの氷柱」、昭和六十年度寮歌「沈黙の杜に」が大好きだ。ここで寮歌集に目を向けてみる。曲を作った者を“作曲者”としているのに対し、歌詞を作った者を“作歌者”と称している。北大に入って間もないころ、応援団の先輩が「北大寮歌の魅力はメロディーなんかじゃなくて、その歌詞の中にあるんだ」と言って教えてくれた。まったくその通りだと思う。だからこの寮歌は文字通り小日山君の作った歌だと思っているし、寮歌に込めた想いもたぶん私より小日山君の方が強いだろう。実際私は、平成十年度寮歌候補作として公示された「生命萌え出で」の歌詞をみて「これいいなあ！この歌詞に合うような曲をつけてみたい！」という発想だけで作曲を手がけたのである。たしか当時は、公示の段階では作歌者の名前を伏せてあったと思うのだが、何だか分からないうちに、これは小日山君の作ったものだと知った。「ゴリラを倍にして二で割ったようなあの男に、こんな繊細な歌が作れたのか！」と、体中に激痛が走ったのを覚えている。そんなこんなで、作曲にあたっては小日山君本人の部屋を度々おとずれては「♪小日山よ、この部分はこれでいいのか～？」などと、曲づくりの相談を繰り返したものである。一番の歌詞の「風行く先に心は駆ける」の部分を見て、なぜかBob Dylan のBlowin' in the windを思い浮かべ、たった三つのコードで構成されるこの名曲を参考にしたりもした。四番まである歌詞の中で、特に私の心に響いたのは三番の歌詞であった。作曲では、五・六小節目の「大地清める白銀の露」で一気に自然の壮麗さ・力強さを表現し、つづく七・八小節目の「眠る若芽は何をか夢む」では自然のひたむきさを表現しようと思った。二小節ごとに、起承転結を意識して作曲したつもりである。

「生命萌え出で」は、現役寮生に聞くところに拠ると、今でも行事のたびによく歌われているらしい。本当にうれしく思う。二〇〇五年十一月に行われた現役寮生・OB交流会のときにも、みんなでこの寮歌を歌った。寮歌を歌うときはいつも、先人（先輩）たちの見てきた自然や想いを共有できるよろこびを感じていたが、このときは、自分の込めた想いを先輩や後輩と共有できるよろこびを新たに実感することができた。これからも現役寮生たちには、もっと多くの寮歌を歌い、さまざまな時代を生きた諸先輩方の想いに触れてほしいと思う。そして、三年後に行われる第一〇〇回恵迪寮祭では盛大に第一〇〇回記念祭歌を披露してほしい。

私も社会人としての生活が始まったばかりで、これからどうなっていくか自分でも分かりませんが、この文章を読んで下さった皆さんと何処かでお会いできるのを楽しみにしております。最後になりましたが、恵迪寮在寮生、卒寮生の皆さんのより一層のご発展をお祈りしております。

恵迪寮近くの原生林

恵迪100年史上初、女子が作曲

平成17年度寮歌「遥かなる迪」

今年度も恵迪寮に新しい寮歌が誕生した。平成17年度寮歌「遥かなる迪」である。詩は工学部四年生の加藤信泰君、曲は工学部二年の福岡萌君によって作られた。恵迪一〇〇年の歴史で女子寮生による作曲は初。このことは平成17年12月13日付の北海道新聞朝刊に大きく報道された。

恵迪寮の大事な文化の一つであり、明治40年度寮歌「一帯ゆるき」からほぼ毎年作られている寮歌。恵迪寮に女子が入寮するようになって十年以上がたった今年、初めて女子寮生作曲による寮歌が作成された。

現在寮歌は先に詩を募集し、全寮で投票。決定した詩に曲を募集するという方法で決められている。この時作詞者の名は伏せて投票される。今回は、五つの詩の中から加藤信泰君の「遥かなる迪」が選ばれた。その後、「遥かなる迪」につける曲の募集時に七曲が応募された。最初の投票では、僅差だったため、二曲での決選投票の結果、福岡萌君の曲に決まった。

曲を作る上でどんなことを意識したか、という質問には「歌いやすいことを重視しました。ずっと歌い継がれるような曲になればいいなと思います。寮歌はどちらかというとテンポがいい曲と、荘厳な感じの曲とに分かれているように感じていて、その中間をイメージしました。詞の感じもフォーク調の曲にするのにあっていたのが良かったと思います。」と答えた。

「寮歌には、恵迪寮のよいところが詰まっていると感じます。一つ目は、自分たちの手で新しいものを創っていくということ。二つ目は、その創ったものを楽しみながらみんなで共有するということ。そして三つ目は、それを受け継いでいくということ。それらが凝縮されていると思います。」と福岡君は語ってくれた。

福岡君（左）と加藤君

遥かなる迪

（平成十七年度寮歌）

加藤信泰君　作歌
福岡　萌君　作曲

一

繁茂なる思いを秘して　寮（まなびや）の
門をくぐりし　若人は
意気（こころ）試され　育まれ
熱き契りの　友を得ん
極の若葉　曙（あけぼの）くごとく
遥かなる迪に　根を張らん

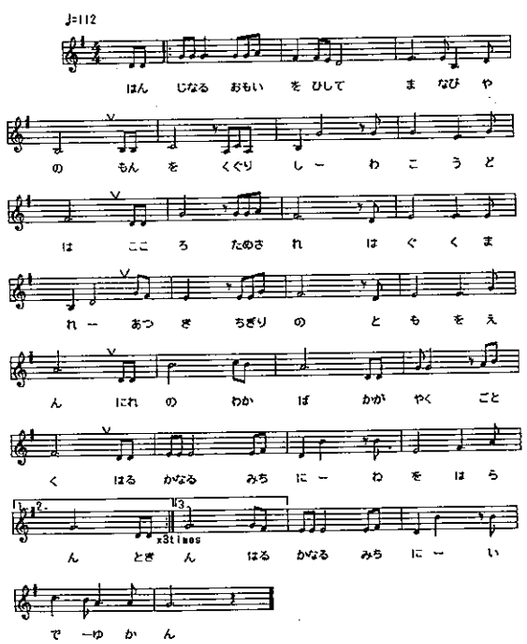
二

時は過ぎ　大地（つちい）に根を張る若芽らは
思い託され　懊悩しつつ
切磋琢磨し　歩む毎
寮支える　大樹とならん
祭の殿火　燿（かがや）くごとく
遥かなる迪を　継ぎ行かん

三

何時の日か　此処で学びしひとことが
かけがえのない　糧とならん
別るる友に　思いを託し
旅立つ未来（さき）は　暗くとも
雪野に朝日　銀（しろがね）くごとく
遥かなる迪に　出で行かん

福岡　萌君　作曲



生命萌え出で

（平成一〇年度寮歌）

小日山輝泉君　作歌
長谷川　健君　作曲

一

生命萌え出で　輝く楡陵に
真白の翼　蒼空高く舞う
仮寝の宿に　我が身はあれど
風行く先に　心は駆ける

二

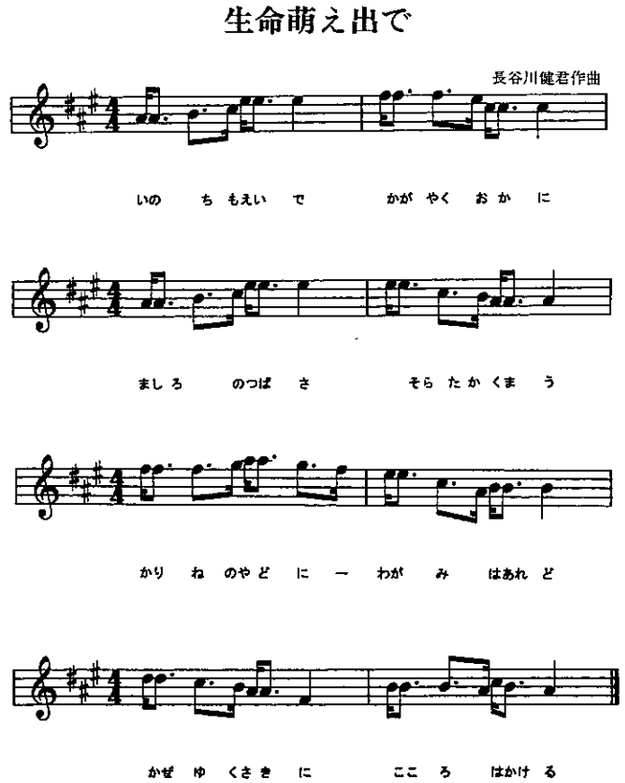
謳歌いて暮れる　晩秋の夜
篝火染める　紅の頬
今燃え上がる　一瞬の夢
我達の涙　夜空を焦がす

三

凍てつきし原始林　髪凍る小路
聞こゆるはただ　白雪の声
大地清める　白銀の露
眠る若芽は　何をか夢む

四

雪残る春　寮友の門出に
共に歩むは　月光の路
果て無く続く　指標無き旅
野心を胸に　進みて行かん



自由投稿

橋本左五郎と夏目漱石

村山　正
（昭和23年入寮）

序

寮歌集成る、委員来りて序を求む、豈一言なくして可ならんや。夫れ詩歌は発動せる意志及び心情の結晶にして人生の小記録なり。其の価値は詩歌の内容に存し而して之が吟唱弾奏によりて完し、自ら本学七百学徒の中堅となり、学風の擁護者を以て任ずる我恵迪寮健児の詩歌は須らく意気豪宕にして雄大、純潔にして崇高、且其呂律音調非凡にして超越的なるを要す。

俗謡俚歌固より非なり。虫鳴鳥声巧妙にして聞くに足るものなきに非らず、然れども元是れ異性に対する本能的淫声なり。

吾人の重厚なる鼓膜には何等の反響なし。獅虎猥りに啼かず。然れども一度吼ゆれば百鳥声を潜め、万獣慴伏す。風雷濫りに鳴動せず。然れども暗雲西に馳せ紫電一閃すれば静穏なる水鏡は忽ち怒濤となりて天に漲り迅雷驟雨忽ち降り天柱挫け、地軸折る。是れ自然の詩歌の吟唱に非るか。学べ獅吼虎嘯、然らざれば風雷、是れ男性的音声にして自然の歌楽也。

以て序となす。

橋　本　左五郎

夏目　漱石

橋本左五郎

寮歌集の序文の一番初めには、橋本左五郎の格調の高い短文が掲載されているが、橋本左五郎については、知らない人も多いのではなかろうか。現に小生も予科、教養を通してお世話になり、地質学を教わった橋本誠二先生が、左五郎のご子息であるなどのことはごく最近、山元先生にお聞きするまで気が付かなかったのである。

橋本左五郎は、夏目漱石の幼友達であって両者の交友の一端は漱石全集　第十三巻、小品〝満韓ところどころ〟に記されている。

両人は明治十七年頃七人ほどの仲間と一諸に下宿して、文字通り一つ釜の飯を食べながら大学予備門へ向けての受験勉強をしていた。入試の際には、漱石は代数が分からなくて隣席の左五郎から教わって、やっと入学したが、教えたほうの左五郎は見事に落第した。（平成の御世ならばいわば東大入試にカンニングをしたなどということを、朝日の大記者が紙上に書いて、しかもその相手が北大教授なのであるから、タダで済む話ではないが、これは古きよき時代の話であるのはいうまでもない。）

落第した左五郎は、追試験で合格するにはしたものの、その後も落第を重ねて、札幌農学校に移ったと書かれている。

爾来、幾星霜を経て、両人の旧友でもある中村是公が満鉄総裁の折にその招待を受けて渡満した漱石が、東北帝国大学農科大学教授として満州の畜産事情を視察していた左五郎と再会して、往年を回顧するのが文章の主旨である。

漱石はその中で、〝左五郎はドイツに留学して何時までたっても帰らない。とうとう五年か六年居た。つまり留学期間の倍か倍以上も向こうで暮らしたことになる。その費用はどうしてこしらえたものか分からない。〟と書いているが漱石はロンドンに二年留学して、ノイローゼのようになって帰国したのであるから、落第、落第と書きながら、実は漱石は左五郎に対して、ある種のコンプレックスを抱いていたのでは　というような事が行間から伺われる。

大学予備門時代には、十人近くで下宿生活をしているが、その間の事情を、漱石の文章から現代かな遣いで引用してみると、〝みんな揃いもそろった馬鹿の腕白で、勉強を軽蔑するのが自己の天職であるかの如くに心得ていた。下読みなどは殆どやらずに、一学期から一学期へかろうじて綱渡りをしていた。英語は教場で当てられたときに、分からない訳をいい加減につけるだけであった。

数学は出来るまで黒板の前に立つて居るのを常としていた。余のごときは、毎々一時間ぶつ通しに立ち往生したものだ。みんなが、代数書を抱えて、今日も脚気になるかなど言っては出かけた。こういう連中だから、大概はクラスの尻のほうに固まって、いつでも雑然と陳列されていた。…　それでも、みんな得意であった。…

ややもすると、我々はポテンシャル・エナージーを養うんだといって、むやみに牛肉を喰らってボートを漕いだ。試験が済むと、その晩から机を重ね縁側の隅に積み上げて、誰も勉強の出来ないような工夫をして、比較的広くなった座敷へ集まって腕押しをやった。…

試験の成績が出ると、一人では怖いから皆を狩りだして揃って見に行った。すると悉く六十点台できわどく引っかかって居る。…

是公だの、余だの、今の旅順の警視総長だのが落ちながら、ぶら下がっている間に、左五郎だけは決然として北海道に落ち延びたのである。その落第の張本人とも言うべき彼が、いくら年を取ったって是ほどに慇懃になろうとは思いも寄らぬことであった。〟

長々と引用してしまいましたが、読者の皆さん、古きよき時代の恵迪寮を思い出しませんか。ちなみに漱石は、悪友達と縁を切ってからは憤然と勉強して東大を首席で卒業しています。実は筆者も一年六ヶ月の寮生活のあとで、勉強の調子を取り戻すにはいささか苦労した覚えがあります。

なお、左五郎はこのとき満州がすっかり気に入ってしまわれて、大学から何回も電報が来てもそれを無視して帰ろうとされなかったようで、誠に学生孝行な教授であられたようである。また、満州では周囲から、博士、博士といわれていたが、実は学位は持っていなかったようで…などのことが記されていて、そのような先生であったので、当時の寮生達に慕われて　寮歌集の序文をお書きになったのではなかろうか。

然し友よ！　どうか左五郎先生の序文を読み直して見て下さい。

出来たばかりで、まだ数編の寮歌しか載っていなかった薄っぺらい寮歌集に対して、先生は全力投球で序文をお書きになったのではないでしょうか。

自由投稿

『恵迪精神』ということ

木暮成一
（昭和28年入寮）

『恵迪』第三号と第四号を、札幌の友人から送って貰ったので、よく読みました。青春は一度だけ。だから、恵迪寮での生活は、誰にとっても忘れられないのでしょう。私も、『恵迪』を読み、今を生きる人間として勉強にもなりましたし、当時の自分の生活を整理することにもなりました。なつかしい方々の名前を見れば、何十年も昔の、その方の姿が浮かんできます。私、前から、当時のことで、気になっていることがありますので、この誌上に投稿してみようかと思いました。この機会に改めて考えてみますと、それは、それほどの事でもないので、最後に少し書くことにして、あのころのことで、少し考えたことを書いてみようと思います。

『恵迪』を拝見すると、『恵迪精神』という御発言がありました。そういったことについて考えました。当時をふり返ると、寮生は互いに仲が良かった、とまず思います。そして、恵迪寮という社会は、そういうことで、今でも、それぞれの人を支えているのでしょう。同窓会に集い、寮史を作り、雑誌を作るのは、そういうことなしには出来ることではないと思うのです。私も、恵迪寮での生活を、いつもいつも思い出します。なぜなのか心に問うと、答えは、やはり同じです。沢山の人を知り、親しくなり、親切にして貰い、そのことが、今の私を支えてくれているのです。

『恵迪精神』について、次には、昭和二十六年入寮の佐久間哲郎さんが、『恵迪』第四号に書いていたことです。恵迪寮での生活は、強烈な個性がぶつかり合い、それぞれの個性が輝きを増していくといったもの、という主旨でした。私も同感いたします。私は、つねづね、人間は、社会観を確立することが、なによりも大事なことと思っております。それぞれの社会観を確立し、社会や未来に「希望」を抱くことが出来た時、人間は生きられるのではないかと思います。そういうことでは、恵迪寮は、全国から、いろいろな考えの人が集うのですから、互いに、たいへん勉強になったのではないでしょうか。私についても、そうでした。ただ、少し残念なのは、自分の社会観を確立する入門にとどまってしまったということです。一年早く入寮した方から、何冊かの本を与えられ、自分の社会観を確立する一歩を踏み出すことはできたのですが。さて、青年が、社会を生き抜くためには、まず彼の社会観を確立しなくてはならないとして、それを助けるのは、恵迪寮のような社会もありますが、それは、もっと広く求められましょう。それは、社会全体の役割であり、教育の役割であり、大学の役割であろうと思います。私は、このことでは、社会も、大学も、はなはだ、その役割を果たしていないと思うのですが。当時もそうであったし、今もそうであろうと思うのですが。

最後に、ずっと気になっていたことです。或る時、私達の部屋で、寮生でないK氏が、「これは誰のだ。」と言うのが聞こえたので、隅の方を見ました。古い旅行カバンが開いていて、中に、『唯物論研究』という古い雑誌が、二十冊ほどでしたか、入っていました。今、辞典でみると、この雑誌は、唯物論を学問として研究するために、一九三二年から三十八年にかけて出版されたものです。当時にあっては、大っぴらには読めなかったものと思います。学問の上で、今となって、どの程度貴重なものか、私にはわかりません。所有者が寮生だったとすれば、これも寮の歴史の一頁だと思います。当時、私は、そういうことに全く無知で……

自由投稿

北大協同組合員登録予科生第一号は誰？

和氣和民
（昭和20年入寮）

昭和二十二（一九四七）年春頃の話です。

北大協同組合（北大生活協同組合の前身）の発足に先立ち、組合員登録の受付が始まると聞いて受付のある大学本部へ急ぎました。同行したのは恵廸寮同室の羽田順君（当時、北大予科農類）です。あわよくば登録一番乗りをしようというつもりでした。当時の大学本部は現本部の西側にありました。本部の玄関をすこし入ったところに衝立でかこった登録受付が用意されていました。

「あっ、きた、きた、」という設立委員安井さんの大声が受付から聞こえました。受付にはほかに委員の竹山さんもいたように思います。しかし置かれていた登録名簿にはすでに二名の名前がありました。

登録名簿の筆頭は予科同期の吉田夏彦君（当時、理類）です。彼の名は学生大会での少数派に強力な論客として記憶にありました。登録第一号とは意外でした。彼はやがて文系に移って哲学を専攻し、すこし前まで東京工大で教えていました。蛇足ながら名著『零の発見』（岩波新書）の著者吉田洋一氏は彼の父君です。

次いで登録第二号には中居昭定君（当時、予科農類）の名がありました。彼も抜け駆けを狙ったらしいのですが果たせなかったようです。受付の近くにちょっぴり残念そうな彼の顔がありました。中居君は学友会厚生部や協同組合のアルバイトもしていたようですがやがて法経学部を卒業しNHKに入ったと聞いています。

私たちは羽田、和氣の順に登録を済ませてから寮に戻りました。何となく拍子抜けをしたような気分と、同時に、新しい組織への参加という満足感もあったように思います。羽田君は法学部を出てから東京に戻り、杉並区久我山で生協運動に取り組んでいました。残念なことに十五年ほど前に亡くなりました。なお登録のころ、私は予科農類（三年）に在籍していました。

私たちの登録のあと、どんな人たちの名が連なったのかはわかりません。（No.4）の組合員番号の入った組合員証はながらく大事に持っていたのですが、あるとき組合員証の切り替えがあってそのとき没収されてしまいました。今ならカードにパンチでも入れて元の所有者に戻してもらえるのでしょうが残念なことをしました。

自由投稿

波瀾の八十年の人生を顧みて

高木　冨士男
（昭和22年入寮）

曾つては、人生五十年と言われたもので、私が少年の頃、「五十代」の人を見て、「随分老人だな！」と思ったものです。今は八十歳に近い自分ですが、まだ若いつもりでおります。

五十才を意味する「知命」と云う言葉があります（孔子・五十才にして天命を知る）。七十才は「古来稀なり」と云う事で「古稀」を祝います。

今や、百才以上も珍しくなくなりました。平成十七年の敬老の日に先立って厚生労働省が、発表した「長寿番付」では、百才以上の人は国内で二万五千六百人、道内で千百三十人います。因みに日本一は百十二才、道内一は百九才です。二十年前に百二十才で亡くなった徳之島の泉重千代さんの例もあります。

それで、最近は従前の賀寿（長寿の祝い）の還暦（六十）、古稀（七十）、喜寿（七十七）、傘寿（八十）、米寿（八十八）、卒寿（九十）、白寿（九十九）に加えて百才以上の茶寿（百八）、皇寿（百十一）、珍寿（百十二才以上、大変珍しいから毎年祝う）の三賀寿が加えられている様です。茶寿及び皇寿（百十一）の茶（百八）、皇（百十一）は漢字を分解してみると納得出来ます。

若くして病死した人、不慮の事故で他界する人の多い此の世の中で、喜寿を過ぎても達者で過していられる事に感謝しています。

昨今は若者の不登校、フリーター、ニート等が社会問題になっていますが、昭和の初期の頃に較べると、贅沢な話だと思います。

戦前は義務教育を終えて更に上級学校に進学する事は、家庭の経済的事情もあって可成り困難でした。

私の育ちは片田舎の農家で、新聞も一日遅れの翌日の郵便で届けられていました。部落は電灯の恩恵に浴する事もなく、夜間の照明は専ら石油ランプに頼るのみでした。

小学校二年の昭和十二年七月に支那事変が起り、小学校六年の昭和十六年十二月に太平洋戦争が勃発し、初期の攻勢から次第に敗色が濃くなり、昭和二十年八月に終戦になりました。

戦時中は物資の統制が厳しく、特に食糧不足は年々深刻になりました。

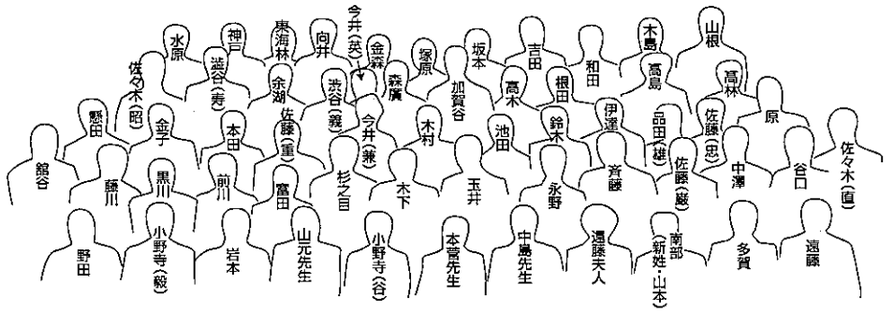
野球の様な米英生まれのスポーツは敵国性のものとして規制され、英語の用語も御法度で、「ワンストライク・ツーボール」は「ヨシ一本・ダメ二本」と云った調子でした。

私は中学進学を諦めて小学校高等科に進みました。平日の放課後は明るいうちは、農作業の手伝いで、勉強の時間は夜しかありませんでした。戦争が激しくなって、「石油の一滴は血の一滴」と云われ、石油（灯油と呼ばれる様になったのは後日の事です）の配給も途絶え、止む無く夏期には油煙の発生の甚だしい「カーバイド・ランプ」の明りで、本の上に溜まる油煙を口からの息で吹払い乍ら勉強しました。冬期には石炭ストーブの窓口から洩れる明りで勉強しました。ストーブからの明りは煤が溜まらず良かったのですが、明りの「チラツキ」が大きくて、それが原因で眼震症に罹り今も続いています。

中学に進学した学友と夏休みに逢った時、彼は得意気に英文字の「アルファベット」の名前の呼び方を説明するのですが、英語を知らない身の悲しさ、cm（糎）、kg（瓩）等の単位名位しか解らず、大変悔しい思いをしました。それで発奮して、英語の講義録を取り寄せて、独学で勉強を始めました。

昭和十八年に小学校高等科を終える頃、偶々地元に工業学校が開校して、私はそちらに進みました。

桜星68期会　於　札幌グランドホテル　平成11年９月21日



その頃は戦争が激化していて、学業は二の次で、食糧、石炭、軍需物資の増産の為に農家、炭鉱、工場に学徒動員されました。

終戦後は学徒動員から解放され、学業も正常化され、昭和二十三年にはGHQの方針で学制改革が実施され、所謂六、三、三、四制が導入されました。

その前年、工業学校四年生であった私達は翌年には五年生に進級してから卒業するか、新設の工業高校へ進学するかの二者択一に迫られていました。

その時、兄が私の北大予科受験を母に奨めて呉れたので（父は他界）私は北大予科を受験して合格する事が出来ました。その時以来ずーと今迄兄に感謝をしています。

その頃は戦争が終って二年経過しておりましたので、中学校での授業は正常化していました。私の場合は工業学校と云う事もあって英語の授業は、中学校に較べると迚もお粗末でしたので、英語の独学を続けました。

通学していた工業学校へは、往復十五粁以上の峠道を徒歩通学して、帰宅後は、明るいうちは農事の手伝いをして、夕食後に疲れた体に鞭打って勉強しました。その頃は、石油の統制も撤廃され、石油ランプも自由に使用出来ましたが、電灯の比ではありません。又その頃、町の方でも電力不足と云う事で、家庭への送電も電球のフィラメントが赤く見える低電圧の「ローソク送電」が実施されていましたが、それでも石油ランプよりは、ずっとましでした。そう云う訳で勉強の能率も遅々として捗りませんでした。

北大予科の入試は昭和二十二年三月三、四日の両日の実施で、発表は三月三十一日でした。前年の北大予科の合格発表はGHQの指令で軍関係の合格者のチェックの為、発表が七月半ば頃に延期されました。二十二年の私達の発表の時はチェックが無かったので、良かったと思いました。

私の北大予科合格は岩見沢女学校に汽車通学していた妹が、その友人から聞いたのを又聞きして知りました。

恵迪寮への入寮許可証を貰って昭和二十二年四月十八日（金）に恵迪寮を訪ね、南寮三号室に決まりました。当時三号室はラグビー部の部室で、三号室の先輩、栗原さんからラグビー部への勧誘がありましたが、勉強の遅れを懸念して入部を断ったら、三号室にはおられず他の部屋に移ったのを覚えています。

鄉關錄

昭和二十三年十一月中旬現在

恵迪寮

郷関録（部分）

室號	學年組	氏名	歸省地	下車驛	出身中	所屬部	電話
南一號	三S二	中村毅	東京都杉並區大宮前三ノ一二三	西荻窪	小松中	軟式庭球	
	二ノ四	森脇至武	余市郡赤井川村字常盤	南小樽	札幌一中	同	
	二ノ四	皿木正夫	京都府加佐郡由良村	（宮津線）丹後由良	宮津中	同	
	一ノ五	長谷川莞二	大阪府豊能郡豊南町平尾	（阪急）箕面	池田中	同	
	一ノ五	小島雄	旭川市六條七丁目右一號	旭川	旭川中	同	
二號	三A一	四十物昭三	函館市松陰町七〇番地	函館	函館中	同	二二六九
	二ノ八	松井晋	夕張市鹿ノ谷三丁目三六	鹿ノ谷	夕張中	同	
	一ノ一	渡邊卓	長野縣下高井郡平野村新野	延德	須坂中	同	
	一ノ六	根本一司	山越郡八雲町字アシノ里	八雲	八雲中	同	
	一ノ二	下山利雄	函館市恵比須町六番地	函館	函館中	同	九二
三號	三A一	榊原敬	函館市曙町八番地ノ二	函館	函市中	同	
	二ノ八	佐藤博之	空知郡歌志內町本町	歌志內	瀧川中	同	
	一ノ四	大石達司	夕張市末廣二丁目十五	新夕張	小樽中	同	
	一ノ二	赤城一郁	夕張市本町一丁目十	新夕張	夕張中	同	
	一ノ六	清水滋	留萌郡小平村字達布營林署官舍	達布	旭川中	同	
四號	二ノ六	村山利郎	東京都港區芝浦二ノ二	田町	函中	同	
	一ノ七	小林光二	函館市杉並町三二	函館	函館中	同	一六二八
	一ノ五	和田一明	旭川市東八條六丁目左八號	新旭川	旭川中	同	
	一ノ二	竹田良一	旭川市九條通十二丁目	旭川	同	同	旭川四五七五
	一ノ八	原田龍弼	空知郡歌志內町東光三區	歌志內	砂川中	同	

四月二十一日（月）の入学式で、宇野予科長先生が、「今年から女子学生も予科を受験出来る様になって、合格した三人の女子学生は素晴らしい成績で合格したのに引き替え男子学生の成績は全く振わなかった。定員四百名の所、追加を含めて四百十一名を合格とした。男子学生はもっと一生懸命勉強に励んで貰い度い。」旨の訓辞がありました。

四月末から本格的授業が始まったと思います。田舎育ちの私には、当惑する事も多かった様に思います。

札幌市内の地図を見て、「北大通」を（ほくだいどおり）と思ったり、ドイツ語の予習でＫａｎｔ（Ｉｍｍａｎｕｅｌ　ｋａｎｔ）を態々独和辞典を引いて、ｄｅｒ　Ｋａｎｔ（パンの皮）と解釈して意味が通ぜず、苦労した事などが思い出されます。

予科では、多くの先生方の感化を受けましたが、特に印象の深いものを述べます。

一年目の時、水谷先生の物理の授業が、確か百十三番階段教室で幾組かの合併で行われていました。授業の合間の雑談で、「学生が自宅に遊びにきて、家内の事を（奥さんでなく）おばさんと呼ぶので参ったな！」と話された事がありましたが、卒業後教職に就いて同じ経験をしてみて、水谷先生の気持ちが良く判りました。

英語の安保先生は私達一年理類七、八組の担任で、英語の授業は七、八組の合併で行われました。七組の二人の女子学生は迚も優秀でした。私は八組で安保先生の推薦で奨学金を頂きました。安保先生は予科閉校後の昭和二十六年頃、教育大学（当時は学芸大学）札幌分校に転出されたと伺っていましたが、教育大学旭川分校創立四十周年記念祝賀会（昭和三十八年九月十一日）に来賓として出席されて、親しくお話をして下さったのが、卒業後にお会いした最初で最後の機会になって仕舞いました。

皮肉なもので、私が北大予科に入学した直後の昭和二十二年六月に私の育った部落にも電灯が点る様になりました。

昭和二十二年は戦後間も無い頃で、諸物資が不足していて、世情が大変深刻でした。食糧不足、冬季の暖房用石炭の不足は特に著しいものがありました。

秋冷の頃には暖房の利いていない、寮の部屋の冷気は耐え難く、唯一の「温もり」は入浴でした。浴槽の湯が適温になるのも待ち切れず、浴槽にスチームが通り始めるのを待ち兼ねて、大勢の寮生が「ワンサ」と押し掛けて、冷水の浴槽に身を沈めて、温まるのを「ジーッと」待ったものです。この現象は冬休みを挟んで十月から翌年の三月迄の半年間を二十二年から二十四年迄の二冬続きました。

昭和二十三年四月になって新学期早々に新丸（新入生）を迎えて、恵迪寮の部屋替えが実施されました。部屋替えは年に二度、春と秋に実施され、新丸が入寮の春には、大々的に、秋の部屋替えは小規模に行われました。

昭和二十三年の秋の「郷関録」を文末に添えておきましたので、御覧下さい。春と秋の二部の「郷関録」の五十五号室に私を含めた五人がその侭、何の変更も無く載っていましたが、部屋替えをせずに居座った事を示しています。他の部屋を見ると小規模乍ら移動している事が判ります。五十五号室の住人の写真を添えておきました。

新寮55号室にて（昭和23年７月３日撮影）
南部　伏見　高木
小菅　小泉

又、別冊の「北大予科閉校三十周年記念誌（昭和五十五年）発行は五十七年」をお手許にお持ちなら、その巻末に記載の昭和二十四年十二月の「郷関録」と比較すれば、部屋替えの様子が更に良く判ります。

私達より一年後輩の諸君が、最後の予科入学生で昭和二十四年には新角（学部学生・新制大学）になりました。

同時に私達は最後の予科三年目（一学年のみ）になりました。然し物資の不足は依然として続き食糧事情も改善されず、ひもじい思いをしました。秋になっても越冬用の暖房石炭の目当ても付かず、予科三年目の授業は、昭和二十四年十一月で打切りになり、翌年昭和二十五年三月迄臨時休校になりました。

昭和二十五年三月末に予科新館（当時は新設の法文学部に接収）の続きの木造校舎の廊下に予科修了生の氏名が貼り出され、長期休学者以外は全員合格の様でした。そして四月には最後の旧制大学学部学生になりました。

昭和二十五年で北大予科は閉校になり、その同窓会として「櫻星六十八期会」が結成され、以来毎年秋頃、札幌か東京で同期会が開催されています。平成十一年と平成十四年に札幌で開催された同期会の写真を添えておきます。

序で乍ら、昨今、夏季に実施されて話題を呼んでいる「サマー・タイム」に就いて触れてみたいと思います。最初の「サマー・タイム」は昭和二十五年四月某日から一斉（多分全国的）に実施されました。

私は工学部に進みましたが、「サマー・タイム」実施後の最初の材料力学の時間に、定刻になっても担当教授が現れず、一時間過ぎてから、やっと当該教授が来ましたが、その時の授業はお流れになりました。多分、当該教授が「サマー・タイム」の事をうっかり忘れていたのだと思います。

「サマー・タイム」は昭和二十五年一年限りで立ち消えになった様ですが、続いて実施されていれば、「サマー・タイム」の実施も五十五年を経過して、今頃はすっかり定着していただろうにと、残念に思います。

北大予科68期会　於北大ファカルティハウス　エンレイソウ　平成14年９月27日

昨今の「サマー・タイム」の実施は部分的に留まっているので、色々と不都合がある様です。「サマー・タイム」は矢張り全国一斉に実施して定着して欲しいものです。

入学時には四百十一人いた櫻星六十八期生も寄る年波には勝てず、他界した人も多く、平成十七年十月四日に今年度の同期会が、北大の食堂「えんれいそう」で開催されましたが、出席者は四十人でした。記念撮影が無かったので、写真は添えられません。平成十一年の写真では六十名の出席者がいたのに、今回は四十名で、二十名も減少しているのは、寂しい限りです。

シリーズ六

青春興亡の百年・応援団概史（前編）

谷口哲也（昭和48年入寮）

北海道大学における応援団の沿革をまとめたものは、昭和五十三年七月発行「應援團史」（発行者・北海道大学応援団、編纂者・谷口哲也）のみである。これは、札幌農学校の遊戯会における応援団を前史とする北海道帝国大学豫科応援団の発祥から終焉までを前編、昭和五十一年までの新制北海道大学応援団活動を後編として編纂されている。

この度の執筆にあたっては、この沿革史を要約し、さらに昭和五十二年以降の変遷については取材が不充分ではあるが、筆者なりの概観を述べさせていただきたい。

北海道帝国大学豫科応援団史

第一章　前史　遊戯会豫科応援団

遊戯会

明治十一年に、学生の体格を強壮にし活発の気風を発達させる目的で遊戯会が創立された。遊戯会とは「アスレチックミーティング」の訳語であり、スポーツ競技のほかに芋拾いや豚追い、綱引き仮装行列等の愉快な種目も含まれる所謂運動会であった。

娯楽の少ない当時の札幌では、多くの観客を集める一大祭典でもあった。遊戯会は、既に北海道帝国大学となっていた大正十一年に廃止されるまでの四十五年間、学生の体育向上に寄与するとともに、学内に活気を与える年中行事として重きをなした。

遊戯会は、各科対抗で行なわれた。各科とは、農学校時代と大学時代では多少名称が異なるが、現在の学部に相当する本科、旧教養部に相当する豫科（豫修科）そして付属学校に相当する農学実科、林学実科、土木工科、水産科である。

各科応援団

各科は、代表選手に対して激烈な応援を繰り広げた。ここに、各科ごとの応援団が誕生することとなったが、それは自然発生的なものに過ぎず、有志が応援リーダーを自称して応援指揮を行なったようである。

これらの応援団の正確な結成時期は特定できないが、文献で確認できる最古のものとしては、明治四十一年に行なわれた第二十六回遊戯会における各科の応援振りである。

各科選手競争、本日随一の呼物、楽隊付きの豫修科の應援隊、場を巡りて示威運動頗る勉む、銅鑼打ち叩く水産の野次隊、喧嘩腰なる實科の応援、眼の及ぶ所白旗躍り紅旗翻る…「フレ豫科フレ豫科」の歓声遠く暮霞に高し・・・・・・

（文武会々報第五十五号より）

遊戯会における応援の様子を、豫科を中心として次に紹介する。

各科の彌次振り―豫科は白旗に白鉢巻、別にこれといふ設備はなかったが、金原楽長の率ゐる楽隊、赤木、庄司両君の率ゐる彌次隊、応援歌を歌って盛んに野次った、翌日碌に声も出なかったのを見ても、如何に獰猛に彌次ったかが知れる・・・白が一着で決勝戦に入るや、白軍健児は狂せん計りに喜んだ、喫茶亭の珍時計は乱打され、聲援歌は彼等の聲を最早出ぬ計りにさせた。藻岩山も或は震動したろう、優勝旗の歌に曰く、

勝利は續く豫科の軍
中堅男子と仰がれて

楡梢上輝く星に
光は増せり優勝旗

（明治四十二年・第二十七回遊戯会・文武会々報第五十七号より）

戦機は愈々熟した各科のスタンドは此處を先途と野次る、もう斯うなると皆夢中だ、また夢中にならない方がどうかして居るのだ、全く修羅の巷の様な騒ぎである、午後五時四十分各科の選手は十人宛の團體に送られて各應援團の声を背後に受け流して悠々と場内に入り来る、野次の野次は益々猛烈になる、十人宛の團體が選手を囲んで夫れ夫れ三度應援歌を歌ひ涙の出る程熱心に應援してスタンドに帰る。選手はスタートに並ぶ・・・

（明治四十五年・第三十回遊戯会・文武会々報第六十六号より）

当時の応援は野次中心であったため、応援団が「野次隊」、「彌次團」と呼ばれているのは仲々面白い。

なお前掲の文武会々報にあるように、明治四十五年に至って初めて「應援團」という名称が初見される。

「都ぞ弥生」が生まれ、後述する小樽高商戦が開始された明治四十五年を北大応援団の発祥の年とする近年の考え方も、蓋し根拠無きものとは言えないであろう。

遊戯会の各科対抗綱引

高商戦開始と応援

明治四十五年五月二十五日、農科大学グラウンド（現在の総合博物館の位置）において、前年に開校したばかりの小樽高等商業学校との野球戦が行なわれた。これが、その後連綿として行なわれた高商戦・商大戦の始まりである。

この第一回の対高商野球戦で、農科大学と小樽高商の学生による応援が行なわれたことは、「野球部史」の次の一文からも分かる。

斯くの如くして零對廿一Aの大勝利となりき。高商の應援歌と我等のフレフレにて此の大活動は終結となりぬ。

当時は各運動部の豫科チームが独立しておらず、豫科生徒と本科学生合同の全学チームによって野球戦は行なわれたが、応援の方は、遊戯会の場合にもそうであったように、断然ファイト溢れる豫科生徒が中心であったと思われる。野球戦の応援は回を重ねる毎に盛大になっていったようであり、その様子を野球部史から拾ってみよう。

朝来暗雲低迷するも絶好の日和なり。吉井博士の廿五年式を終へて白旗を手にせる應援團は一塁側に陣取りエールを称へり。

（第四回・大正二年十月十七日）

赤い應援旗を持った高商の應援隊は「フレーフレー農大」を叫んでくれた後、エールを唱って味方を励ます。

（第五回・大正三年十月十七日）

五日は照らず風なく絶好の野球日和、此の日小樽高商全校三百の應援隊を提げ、赤旗を翻し太鼓石油罐を打叩き聲も嗄れよと應援歌を絶唱すれば、北大應援團三百白旗を翻して相應じて之に當り光景真に凄惨、観衆約五千、北大教授並に高商教授数人両側に對峙して戦況を気遣ふ。

（第十三回・大正八年十月五日）

豫科運動部の独立と気質の変化

大正七年三月、多年の宿願成って農科大学は北海道帝国大学に昇格し、同時に従来の農学部に加えて医学部、工学部が新設されることとなった。

それに伴い豫科生徒数も激増し、大正十年には全豫科生は六百人となる。この頃から豫科自立の気風が著しくなり、大正十一年には、それまで本科生も入寮していた恵迪寮は豫科生のみの寮となった。

各運動部においては、続々と豫科生チームが独立し、豫科の校友会である桜星会のもとに北大豫科桜星会運動部を結成した。その頃桜星会に属した運動部は、野球部、庭球部、陸上運動部、水泳部、柔道部、剣道部、弓道部、角力部の諸部であり、これらの桜星会運動部が高商戦にあたることになった。

帝大昇格、豫科自立の気風等に伴い、この頃から豫科生の気質にも変化が生じてきた。農科大学時代は、札幌農学校時代の気風を色濃く継承した「惇朴質素」の気質であったが、この頃から豫科の気質は徐々に他の旧制

高等学校に近いものになってきた。
すなわち、大自然との対話による思索と労働を重視するピューリタニズム的なものから、寮歌とストームに象徴される青春の疾風怒濤を重視する気質へと移っていった。そして、大正末年頃には、長髪長髯、弊衣破帽を誇る豪傑風の人物が少なくなかった。

遊戯会の廃止

札幌農学校開校間もない明治十一年以来、学生生活に活気を与え、更には札幌の一大行事として親しまれてきた遊戯会は、大正十一年の第三十九回を以って廃止された。その理由は、わが国における運動競技の隆興に伴い、遊戯会も、よりスポーツ的にすべきだということと、遊戯会自体が札幌の春の行事として年々盛大になるに従って贅沢華美に流れるようになったことである。

ともあれ、遊戯会の廃止により、各科応援団は消滅することとなった。遊戯会豫科応援団もこの年を以って解散するが、高商戦の応援を行うなど、引き続いて高商戦応援を目的として結成される北海道帝国大学豫科応援団の先駆的役割を果したのであった。

第二章　第一期　大正十一年から大正十五年まで

概観

遊戯会が廃止され遊戯会豫科応援団も自然消滅した大正十一年、早くも同年中に高商戦応援を目的とする北海道帝国大学豫科応援団が創設された。これは遊戯会豫科応援団と同様に有志幹部役員によるものであったが、活動面・精神面・財政面等において年々拡充し、昭和二年の団則設置による公式機関化を迎えることになる。

豫科応援団の創設

大正十二年三月十五日発行の桜星会雑誌第五号に「應援團報告」が掲載されている。創設当時の様子を知ることが出来る貴重な一文であるので、その全文を引用掲載する。

呱々の聲を挙げて未だ一年しかたたない我團は未だ凡てが完全になって居ない。然し此の年もこれで終ったかと思ふとなんとなく重荷を下した感じがすると同時に何處ともなく責任を全うし得たかといふ不安におそはれる。

実に我團の活動期は短く泡ただしいもので突然来て突然消えて行く感じがした。然しこの忙しい期間にもその充分なる働をなし得我團の意気を示すことが出来たのもこれ皆團員諸兄の努力の結晶に外ならなかったと思ひ感謝し居る次第である。

今年中に於ける我團は團員も百名以上増し旗も三百本整へ太鼓も多く借り入れて大いに優勢となった。春の高商との應援は雨で一週間も延びてあらゆる方面に随分手数がかかったが青春の血に燃ゆる團員は大いに應援されて敵の勢を挫くことを得て手稲山に夕日の隠れるとき市中に凱歌を歌ふことが出来たのは誠に愉快であった。然し秋は庭球は小樽、野球は札幌であった為勢力を二分しなければならなくなってその意気も春程度にはないだらうと思って居た所野球の方の應援は充分敵を苦しますことが出来、庭球の方に於いては太鼓を打たないのと敵地に行った為、どうも気抜けがした感があったがそれでも我戦士を後援して大勝を得しめ小樽のごたごたした狭苦しい町を壓倒したのは気持がよかった。ただ軍隊との角力の時は應援團の役員の手廻しの遅かった為充分應援することが出来なかったのは如何にも残念であった。

これで我團はすべきことは充分なしたのだ。唯太鼓が借りものばかりであることが實に不便で又面倒なことでどうしても團所有の太鼓がなくてはならない来年は是非買入れたいと希望している。

秋には團員諸兄より無理に二十銭づつ寄附していただいて遠征費に当てたことは種々の事情及び費用の関係上止むなきに至った次第故御了承を乞ふ。

次に本年の収入費用を決算致します。

収入ノ部

一金百六圓六十銭也　桜星会ヨリ

昭和十一年度応援団幹部

一金十九圓五十銭也　特別費トシテ寄附
一金八十四圓二十銭也團員ヨリノ総収入
計二百拾圓三十銭也

支出ノ部

一金八十七圓二十三銭也　小旗、大旗、竿代其他
一金十九圓五十銭也　太鼓修繕費
一金四十六圓也　太鼓謝礼
一金五十八圓八十八銭也　七十五人分小樽往復汽車賃
計二百九圓六十一銭也
差引残金六十九銭也

以上の内容から次のことが推測される。

一、応援団が結成されたのは大正十一年春であること。
二、結成された応援団の幹部役員並びにリーダーが有志であることは勿論のこと、団員も豫科生の内の有志であったこと。
　団員から二十銭ずつ寄附してもらった収入額から推定すると四百二十名程度となるが、当時の全豫科生数が七百名であるので、六割が応援団員ということになる。
　当時は全てがのんびりとしていたらしく、団員・非団員の区別も判然としておらず、団員といっても精々「応援団費（寄附）を納入している者」という程度ではなかったのか。
三、軍隊との角力試合の応援など、高商戦以外の試合の応援も行っていたこと。
四、有志の団体ながら、校友会である桜星会から多額の援助金を受けていること。この援助金額は全収入額の約五割を占めている。

以上のように、創設時の豫科応援団は精神面においても組織面においても非常にラフなものであったが、その後数年の間に急速な拡充を遂げるのである。

精神面・組織面の拡充

創設当時の応援団は、それ程権威を振るうこともなく組織として統制を強いることもなかった。また、豫科生の方でも敢えて応援団として一定の固定した組織集団の結束行動等は考えていなかったようである。試合の毎に豫科生の中の熱血漢が自発的に個々に集まってきて応援に血道をあげるというような、豫科生各自の情熱による所が大であったが、序々に応援団における豫科生の一致団結を目指す理念が現れてきていたようである。

創設から二年後の大正十三年三月十五日発行の桜星会雑誌第七号に「応援団の事報」と題する一文が掲載されている。その要旨は、豫科スピリットの高揚の為に「我が團の一人として全校一致の行動をとる権利と義務とを有する」豫科生は、北大豫科応援団の名の下に団結し、母校の名誉を賭して競う選手と一心同体となって応援しなければならないということである。ここに現れてきている理念は、後の「団則」制定による豫科全学応援団の結成の素地ともいえよう。

創設当時の応援団の組織は明確なものではなく、大抵の場合は前団長が後継の団長を推し、新団長の下に有志がブレーンとして幹部役員となったようである。新幹部役員が豫科全学に公表されることもなかったらしい。

団員も又その範疇が明確ではないが、資料から推測できる団員数は、大正十一年の四百二十名（全豫科生七百名の約六割）から、大正十三年には七百七名（全豫科生九百四名の約八割）と人数でも割合でも拡大している。

財政面においても毎年拡充しており、団員数及び徴収額は不明であるが、記録に残っている毎年度の会計報告における団員から徴収した団費の合計額が、大正十一年度・八十四円二十銭、大正十二年度・百十二円九十銭、大正十三年度・四百二十八円四十銭と増加している。

さて、豫科応援団は年々拡充を遂げ、大正末年頃には、かなりまとまった形になっていたようである。大正十四年度の幹部役員、並びにリーダーの構成は次の通りである。

団　長　泉　由松（英農）
副団長　鳥羽信次（工）
　　田島多門（独農）
　　河合九洲男（独農）
　　竹内義雄（工）
太鼓係長　北島正元（工）
副係長　桜庭五郎（独農）
　　宮下利三（英農）
警備係長　松岡幸七（医）
副係長　松本迪之（独農）
総　務　安保常次（英農）
庶務係長　井上　實（英農）
副係長　上野衛一（英農）
　　常松　栄（英農）

会　計　牧野克己（英農）
　　野間口英喜（工）

以上十六名の幹部、各クラスよりリーダー一名、太鼓係一名づつを撰出せしめたのでその合計四十八名を加ふれば総計六十四名の人数を揃へて居た。

豫科の気質とエピソード

大正の中頃より主流となってきたバンカラ気質はますます強くなり、この頃になると弊衣破帽、奇行蛮行を誇る豪傑肌の猛者が多数輩出した。

大正十四年応援団長泉由松氏は泉脅（きょう）と自称する暴れん坊であった。また、当時の応援団の幹部役員は柔道部員などの熱血漢が多く、様々なエピソードを有する人物が多いが、何といっても一代の傑物である鳥羽信次氏の右に出る者はいないと思われる。

鳥羽氏は強い正義感を持つ人物であるが、その喧嘩振りは仲々凄まじいものであったらしい。昔の札幌には街の辻々に手押しポンプがあり、冬の寒さで鋳物のポンプの柄が折れやすくなっている時は、それをへし折って喧嘩に使ったそうである。また当時の札幌には客をいかがわしい場所へ連れて行く人力車夫がいたそうで、どういう訳か鳥羽氏は車夫達から親分として崇められ、地廻りのヤクザといざこざが起こると腕力にものをいわせて仲裁に入ったという伝説的エピソードも残っている。鳥羽氏の正義感と腕力は大いに札幌の遊侠の徒の心胆を寒からしめたらしく、鳥羽氏が卒業され北海道から離れられた際、氏が青函連絡船に乗り込んだことを確かめた函館の親分から札幌の親分へ「トバ、ツガルヲワタル」という電報が打たれ、親分子分一同は安堵の胸を撫で下ろしたとのことである。

また、鳥羽氏が昭和四年度の応援団長に選出された際には、北海道帝国大学新聞（昭和四年三月四日付け・第三十八号）に「返り咲いた豫科の花形、鳥羽信次君豫科応援団長となる」という見出しの次の記事が掲載された。

　嘗て豫科に在って應援團副團長を務め、驍名を学園の内外に馳せて居た鳥羽信次君が兵役等の為め暫く離れてゐた学園へ舞ひもどって来て、今度は豫科の花形應援團長として全豫科の信望を一身に集めて選挙された。鳥羽君の熱と意気とは彼が学園を離れてゐた時でも学内にある者に許されて居た程であった。先團長前田登君の後を承けて彼の新たに得た沈勇と過去の経験とを以て、應援團長の職責を遺憾なく務め、半ば廃頽せんとして居る豫科の意気を充分恢復し発揮して行くものと期待されている。

以上のように、鳥羽信次氏は名団長としてもその名を止めている。尚、鳥羽氏は昭和八年に工学部鉱山学科を卒業後満州に渡り、満州奥地で多数の部下を擁して金鉱脈等の地下資源の探索にたずさわり、あたかも馬賊の大頭目のような格好で活躍していたが、残念ながら病を得、広野の果てに骨を埋めたということである。

さて大正末期はバンカラ気風の最盛期ともいえる時期であり、幾多の快男児を輩出したが、一方バンカラ気風の強盛は放縦に偏する悪弊をも生じ、豫科生の風紀も乱れがちであり、また恵迪寮においては自治制の混迷を招くに至った時期でもあった。

第三章　第二期　昭和二年から昭和十一年まで

概観

昭和二年に「団則」が制定され、ここに全豫科生を団員とする公式機関たる北海道帝国大学豫科応援団が結成された。豫科応援団は桜星会の院外団として目覚しい発展を遂げることとなる。すなわち、応援団が豫科のバックボーンとして或いは豫科スピリットの揺籃として重要性を獲得していく時期である。

しかし、それに伴い校友会である桜星会との関係が問題化し、遂に昭和十二年一月、それまでの独立した院外団から桜星会の外局的機関として一元化されるに至るのである。

「団則」の設置

当時団則の制定にご尽力なさった稲垣是成氏（昭和二年医類副団長）から、昭和五十一年に直接お話を伺う機会があり、その要旨は以下の通りである。

「それまでの応援団幹部役員は、単なる同好の士であった。団長は前団長の指名によって決定され、新団長のもとに幹部が組閣される形であった。豫科全体に対して新団長・幹部を披露することもしなかった。そこで、私（稲垣氏）や中村光慶氏（医類）が中心となり、応援団を全豫科を基盤としたものにするべく、団則を定めることとした。このとき桜星会主事の伊藤俊夫氏（昭和六年農経卒・北大名誉教授）も協力してくれた。全国の旧制高校から応援団に関するアンケートをとって調査し、それを参考にして団則を決定した。しかしながら、団則が決定した時には新年度（昭和二年度）が始まっていたので、伊藤俊夫氏の発案により暫定措置として全豫科からの団長選出は取り止め、各類から三名ずつ選出された計九名の幹部内の互選によって団長を決定することとした。その結果、医類の中村光慶氏が団長に選ばれた。その後、団則通りの運営を確立するべく、昭和三年一月に次期団長の選挙を行った。我々幹部九名が選挙管理委員のような形で行った。二三人の候補者が立った。」

さて、以上のような経緯で制定された団則とは如何なる内容のものであったのか。残念ながら、今日では明文化された団則を見ることは出来ないが、その内容は応援団幹部の選出規定が主な内容であったと思われる。

すなわち、全豫科生を応援団員となし、応援団長は全豫科生の選挙により立候補者中より選出する。各類（農類・工類・医類）から、それぞれ副団長・庶務・会計の三名を選出し、これら九名と団長の計十名が応援団の執行部である「幹部」である。この選挙は一月に行われ、幹部は全員四月に最上級生の三年生になるものでなければならなかった。従って、幹部に選出されても学年末試験で落第すれば、幹部を辞退しなければならなかったようである。

また、各クラスから応援リーダーを一名ずつ選出する。農類と工類は一学年三クラス、医類は二クラスであったので、クラスリーダーは計二十四名である。このクラスリーダーは、高商戦応援の時に幹部と共に応援の指揮にあたった。以上が団則の概要である。

桜星会との関係

団則の制定により応援団は全豫科生を基盤とする自治的機関となったが、豫科の校友会である桜星会とは明文化された規約上の関係は一切無かった。しかしながら、応援団は桜星会の院外団とでもいう立場で、桜星会と不即不離の関係を保ち、以って豫科校風の発揚に邁進したのである。

さて、ここで桜星会の沿革について触れてみる。桜星会が創立されたのは明治四十四年であるが、大正七年頃までは独自の予算も無く、農科大学全学学友会である文武会へ従属していた時期である。大正八年頃から独自に会費を徴収するようになり、桜星会各運動部が次々に結成されるのも、この時期である。

大正九年九月一日より桜星会会則が施行されるに至ったが、第一条に曰く「目的　本會ハ大学豫科生徒並ニ大学豫科職員ノ懇親團結ヲ圖リ會員ノ意気及ヒ校風ヲ維持発揚スルヲ以テ目的トス。」

会運営は各クラスより選出された委員によって事務処理が行われたが、最も重要な予算配分は各部の部長（教官）によって決定されていた。そこで昭和二年に、前述の伊藤俊夫氏と稲垣是成氏とが中心となり、予算決定に関する学生自治の確立を要求したが、豫科当局と鋭く対立することとなった。

結局昭和三年に、総務制が採用され、予算決定に関する学生自治権が認められた。総務制とは「各科ヨリ二名ヅツ、第二第三学年生徒ノ中ヨリ選挙シ、内一名ヲ総務委員長トス」という会則規定により選出された六名の総務委員が執行部として会務を処理決定する制度である。

すなわち、桜星会が校友会として自治的性格を獲得したのと時機を同じくして、豫科応援団も全豫科生を基盤とする自治機関としての体制を確立したのである。前述したように両者は不即不離の関係を以って校風の維持発揚に務めた。

尚この頃より、それまで応援団が独自に徴収していた応援団費を桜星会費に含めて一括徴収することとした。また、昭和三年度より従来桜星会雑誌部で発行している桜星会雑誌に掲載されていた桜星会各部々報を独立させ、「桜星会部報」と題する冊子として応援団が編集・発行することとなった。

ちなみに、この頃より、北大豫科応援団を北大豫科桜星会応援団と呼び習わすようになったらしい。

しかしながら、両雄並び立たずの諺通り、桜星会院外団たる応援団が運動部を基盤として権威を高めていく一方、桜星会総務は会の財政を掌握して実権を拡大していくこととなり、両者の関係の悪化・対立を招くのである。

桜星会総務との対立

応援団活動の中枢たる応援団幹部の権威は非常に高いものになり、単なる競技応援のリーダーではなく豫科スピリットの権化であり豫科生活の旗手であると自他共に認める存在であった。特に、当時は全豫科生の選挙によって推戴されるのは応援団長のみであり、応援団長は全豫科生を代表する唯一の存在としての信頼と権威を得ていたのである。

高商戦応援風景（現在の理学部の場所）

以上のように、全豫科生の代表者そして桜星会各運動部の擁護者・代弁者として桜星会に対する発言力を増していった応援団も、組織的にはあくまでも院外団であり、規約上からは桜星会における会運営の最高機関であるべき総務としても、応援団の権威並びに発言力を規制・制約出来なかったわけである。

ここに桜星会は二元化の様相を呈し、応援団と総務との関係は悪化し対立するに至ったのである。

豫科の気質

この時期は日本社会の転機であった。大正デモクラシーの風潮は日本資本主義体制の行き詰まりによって漸次衰退し、替わってファシズムが台頭してくる時期である。一方、社会矛盾を鋭く指摘する社会主義思想やマルキシズムが勃興し、プロレタリア文学運動、労働運動が盛んになる時期でもある。

この時代風潮の下で、全国の大学や高等学校でストライキ事件が起こったが、北大における大部分の学生は、かかる社会風潮とは隔絶したような牧歌的雰囲気の中で青春を謳歌していた。

豫科生気質の主流は所謂バンカラであり、旧制高校的弊衣破帽が豫科生の象徴的スタイルとして定着していた。当時のバンカラ気質を評して「デカダン」とする意見もあるようだが、当時の豫科生の多くは学徒としての矜持と誇りを持ち、そのバンカラ気質も決して虚無的でも退廃的でもなかった。

当時の高等学校ではスポーツ熱全盛期であり、北大豫科も例にもれず、運動部での活動と生活は豫科生活の精華であったと言っても過言ではない。当時の恵迪寮は各運動部の合宿所の如き状態になっており、昭和八年三月の調査によると全寮生百八十七名中百四十五名が運動部員であったことが、当時のスポーツ熱全盛を如実に物語っている。

第四章　第三期　昭和十二年から昭和十五年まで

概観

前述したように応援団の権威と発言力が増大した結果、桜星会運営において執行部である総務と対抗的関係を生むに至った。そして、執行部の下に桜星会運営を一元化しようとする総務の提案により、遂に豫科応援団は従来の院外団から桜星会の外局的機関として接収されることとなった。

しかしながら、桜星会総務は応援団活動を実際規制出来ず、応援団活動はそれまでと同じように発展の一途を辿った。だが、この時期は日中戦争の勃発など日本が軍国主義へと暴走する時代であり、学生生活に対しても断髪令など種々の圧力が加えられたのであった。

そして、遂に昭和十六年には文武会並びに桜星会の報国会への改編により、伝統ある豫科応援団は解散廃止されるに至った。

桜星会への編入

応援団と総務の拮抗による桜星会二元化の解決策として、応援団を桜星会に規約上編入し、以って応援団活動を制限しようとする桜星会総務は、応援団幹部に対して応援団の桜星会への編入を提案した。これに対して応援団幹部が強く反対したのは当然であった。

しかし、如何なる交渉過程が展開されたかは明らかではないが、結局昭和十二年一月の桜星会々則の改正により応援団は桜星会の外局的機関として編入されることとなった。

改正された会則の中から応援団に関する条項を挙げてみると、まず第三条に「本會ハ第一條ノ目的ヲ達センガ為メ應援團並ビニ左ノ諸部ヲ置ク（以下略）」とある。

次に第五条の役員の条項に、会長、副会長、参事、理事、部長、会計主任（以上教官）、総務委員、会務委員、各部委員（以上生徒）の諸役員と並んで、応援団顧問、応援団団長が役員として列挙されている。具体的には、

一、應援團顧問　一名　特別會員ヨリ會長之ヲ嘱託ス
一、應援團團長　一名　各部委員ノ推薦シタル候補者中ヨリ全會員ノ選挙ニヨリ決定ス

としてある。

剣道野試合

そして「第六條　本會役員ノ任務左ノ如シ」として「應援團顧問ハ應援團ノ機務ニ参與ス」「應援團團長ハ團務ヲ處理ス」と定められている。さらに附則として「本會應援團々則ハ別ニ之ヲ定メ会長ノ認可ヲ受クルモノトス」と定められている。

また桜星会運営に関しては、応援団顧問並びに応援団長は役員の一員として「役員会」に出席して「規約ノ改正」「其他重要ナリト認ムル事項」についての協議を行うことと、各部の予算請求書を各部委員が説明する「予算説明会」に総務委員、会務委員と共に応援団長が出席することが定められている。

なお桜星会運営に関する主要な事柄は、参事、理事、総務委員、会務委員によって構成される「協議会」で決定され、「役員会」は会長並びに総務委員が必要と認めた時のみ召集されるにすぎなかった。

以上の会則を見てみるならば、桜星会総務の提案した応援団編入が何を意図していたかは明白であろう。すなわち、桜星会院外団として治外法権的立場から桜星会運営に対して隠然たる影響力を有していた応援団を会運営の中枢から遠ざけ、応援団長を恰も一運動部の主将であるが如き扱いにして、その権威と声望を否定せんとしたのである。

この制限は予算面においても明白であり、昭和十一年の応援団予算が八百三十二円九十六銭であるのに対し、昭和十二年には五百七円八十六銭となり、これ以降、応援団予算は四百円～五百円程度となるのである。

以上の桜星会編入の結果については、当事者である桜星会総務委員長自らが文中に述べているので、次に引用する。

斯くして昭和十二年一月遂に應援團は櫻星會に編入されることになり、會の一元化は完了し総務は名實共に會務の運用が出来るといふ様になったのである。会則の合理化の實現である。今年度総務はこの基礎の上に出発した。即ち櫻星會の内部的矛盾の大きな部分が除去されたといふ假定の上に立ったものである。然るに私達総務が仕事を始めた當初に起った頭髪整理の問題は全然除外して考へても、私達の計畫した重要な事項が次々と難関に打突からねばならなかったのである。是に於いて斯る不幸な現象が何故連続的に生起ねばならぬのであるかの疑問が提出される。Bの解決（註・Bとは応援団と総務との対立関係のこと）は會の特種性を無視して純然たる政治機構と假定した場合にのみその合理性、進歩性が主張されるのであって、結局現實の會機構の矛盾の除去に對しては本質的な作用を為し得ないといふことが明かになったのである。

（昭和十二年度「桜星会会報二」所収、総務委員長「桜星会の歩み」より抜粋）

応援団活動と豫科の気質

以上のように、規則上、組織上で応援団は桜星会に編入されたが、実際には桜星会総務が目指した「矛盾の除去」は何の解決もされなかったし、応援団の活動は微動だにしなかった。

事実応援団活動は、それ以前の時期から引き続いて年々発展し、この時期にはまさしく全盛期の観を呈するに至っている。

詳細な叙述は割愛するが、三月の受験生の運動部勧誘から始まり、六月の高商戦、七月のインターハイ遠征応援、九月の高商戦、そして冬のインターハイ遠征応援という年間の活動は毎年盛大に行われた。

特に高商戦は興隆の一途を辿っており、特に野球戦は全道の人気を集めていた。その人気の理由は、当時の高等学校スポーツ独特の熱のこもった力一杯のプレーにあると同時に、対校戦特有の熱気とその発露である華やかな応援合戦にあった。

ところで、この時期は概して北大豫科は弱かったそうである。従って高商戦全勝優勝の機会には恵まれなかった。昭和十五年に久しぶりに全勝優勝を成し遂げた時は、中央講堂で全勝優勝祝賀会を開催して大いに祝ったとのことである。

さて、昭和十一年に二・二六事件が起き、翌十二年七月には日中戦争の始まりとなる日華事変が勃発した。これを機に日本はファシズム・軍国主義の道を破滅へ向かって一気に転落していくのである。

魔手は教育にも及び、事変勃発と同時に開催された全国高等学校長会議は「国体観念の明徴を期す」ことを教育方針に定めた。また、「断髪令」なるものが出され、長髪は自由主義的であるとされて半強制的に断髪を迫られた。同年十二月秋には豫科に報国会なるものが結成され、学内でも国防献金が行われ、北大皇軍慰問連盟が誕生した。

昭和十三年には国家総動員法が制定され、戦時色が一層濃くなったのである。更に十四年に入ると戦時体制は本格的となり、本科の軍事教練も必須科目となった。

元来北大は中央から遠く離れ、また理科系大学であった為に、良しにつけ悪しきにつけ社会の動きに対して疎かったとされているが次々と押し寄せる時局の波には如何ともし難く、思想・行動面で種々の制約が加えられ

た。

しかし豫科の気質を見てみると、この当時は未だ楽天的な要素が強いようである。つまり、拡大していく戦争に対しても、それを観念的に試練の時であると考えるが、自己と直接関係ある事実として把握することは稀薄であったようである。ともあれ、重苦しい空気が確実に濃くなっていったのは事実である。

解散廃止

昭和十五年には、既に米英との戦争は必然的な状勢となってきた。新体制運動の下に、進歩的なものは勿論のこと、自主的・自治的なものまでが否定され、全てが国家の統制下に組み入れられていった。北大においても学園新体制の名の下に全ての自主的・自治的なものは解散廃止され、戦争遂行の為の統制機関である全学学徒報国会が結成されることになった。すなわち、輝かしい伝統を誇る文武会そして豫科の校友会たる桜星会は解散し、桜星会は全学学徒報国会の下部組織に過ぎない桜星報国会に改編されることになった。

昭和十五年秋から、翌十六年春の結成を目指して桜星報国会の組織が検討された。応援団長であった星野力氏や、次期幹部候補として応援団幹部と行動を共にしてきた二年生の崎浦誠治氏等は、何とかして応援団を存続させたいとして、豫科当局との対立も辞さない努力をした。しかし時局下において、保守的ではあったが豫科生の自主と自治と自由を標榜する豫科応援団の容れられる余地は最早なかったのである。

遂に伝統ある北海道帝国大学豫科応援団は昭和十五年を最後として解散廃止されることとなった。解散に際し、星野団長は「解散に就いて」と題して次のように述べている。

去る四月光輝と傳統に輝く北大豫科應援團長の重責をうけてより早くも半年を過しました。不肖浅学にして果して先輩諸兄の残されし業蹟を守り得るや否やを危んだ次第であります。而し幸にも先輩諸賢の情熱溢ふるる御教示御支援を辱くし、大過なく一学期高商戦及びインターハイを終へることを得ました。高商戦には各種目に豫科全勝の栄誉を担ふを得ました。吾等幹部たりし者、終生忘れ得ぬ感激でありませう。

秋季高商戦（野球）　昭和55年9月28日

扨て事変第四年目、その影響は吾等の学園、自治の理想郷にも濤々として迫り自治崩壊の時機は正に目前に迫りました。吾等現在の国家指導者の経て来りし道を踏襲する最後の者として深い感慨に襲はれるのであります。新体制なる語が一つの流行語となり、過去にロマンチシズムを基とせる自由主義を説き感激に酔へる者が一朝にして自己の過去の説を信ずる被指導者に現世を説くこともなく冷笑をあびせつつ無責任なる態度にて自己の現状保持に汲々たるも、純なる青年の心には時世とは云へ、決して将来の希望を強め又進取の気風を増す所以たらずと憂ふ者であります。而れども理由の如何を問はず自治体解消令は吾々をして最後の段階に立たしめたのであります。

吾々は自分の意思を殺し、目をつぶり、従はざるを得ないのであります。先輩諸兄よ、吾等の苦衷を明察せられんことを。吾々は過去に餘りにも大なる足跡を残せし、質實剛健の気風を持つ豫科生のスピリットの源泉たりし團の精神は何等かの形態により残さんといふ念願をもって居ります。国家的新体制定るも當豫科にては組織内容未だ何等の決定を見ざる今日確信なき小生の言を御許し下さらんことを切望して居ります。川口先輩に度々御催促頂き乍ら遅延の旨深く御詫び致します。

（十月十四日記）

（昭和十五年十二月発行「応援団々報・第二号」より）

高商戦の中止

昭和十六年二月六日、開学二十三回記念日式典並びに文武会解散式、続いて全学学徒報国会発会式が行われた。同時に、豫科においては桜星報国会が発会した。桜星会各運動部は修練を目的とする桜星報国会運動班として辛うじて存続が許された。

昭和十六年十月には東条内閣が発足し、対米英開戦は時間の問題であった。同月の兵役改正に伴い教育臨時体制の一環として卒業の半年繰り上げが行われることとなった。そして昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃と米英に対する宣戦布告が行われ、破滅へと連なる悲惨な四年間の戦争が開始されたのである。

応援団が解散廃止され、桜星会各部が桜星報国会各班に改編された後も、高商戦は続行された。もちろん戦時体制下においては昔日の如き華やかさは望むべくもなかったが、高商戦が若人の熱と意気の祭典であることには変わりがなかった。暗く重苦しい時代だからこそ、高商戦は豫科生にとって一筋の光明であったのかもしれない。野球戦には、それまでと同じように両校の生徒が応援を行ったが、応援リーダーには桜星報国会の委員やクラス代表が臨時に当たった。

昭和十八年二月にはガダルカナル島の玉砕、五月にはアッツ島の玉砕と、戦局の悪化に伴い、遂に高商戦の続行すら許されなくなった。明治四十五年以来の伝統を誇る高商戦は昭和十七年を最後に中止されることとなった。

第五章　第四期　昭和二十一年から昭和二十四年まで

概観

敗戦の翌年昭和二十一年秋、北海道帝国大学豫科応援団は復活した。物資も乏しく混乱した時代において、復活した豫科応援団は全てを旧に復することは出来なかったようであるが、着実に再建の道を歩んだのである。

しかしながら、再建四年目にして学制改革により豫科は廃止されることとなり、昭和二十四年を最後に北大豫科応援団は、その歴史を永遠に閉じたのであった。

豫科応援団復活

昭和二十年八月十五日の敗戦に続いて、かつて日本人が経験したことのない不安と混乱と虚脱感が怒涛のように押し寄せ、教官も学生、生徒も呆然と気抜けしたような月日を過ごしていた。食糧と燃料の欠乏から講義は開店休業といった有様であった。「学ぶ」ことよりも「生きる」ことが先決問題であったのだ。

かかる混乱の中においても、大学復興の動きは徐々に高まりを見せていた。昭和二十一年七月には、文武会の流れをくむ全学を一丸とした親睦団体である北大全学学友会が生まれた。同年九月には、豫科において桜星会発会に続いて豫科応援団結成が行われた。なお、この年は種々の理由により新学期が秋九月になった為、これら一連の復活再建が秋になったのである。この当時の流れは次のようであった。

八月三十日　新入生入学
九月　二日　始業式
九月十三日　桜星会発会式
同　応援団結成式
九月二十九日　応援団仙台へ先発
十月　一日　野球、蹴球、庭球、仙台へ出発
十月五・六日　インターハイ挙行（於仙台）
十月十七・十八日　対小樽高商戦復活

（昭和二十一年十二月二十日刊「恵迪寮々報」より）

ここに北海道帝国大学豫科応援団は、昭和十五年以来、六年ぶりに復活されたのである。そして選挙の結果、山口哲雄氏が昭和二十一年度応援団長に就任した。

復活した応援団は、インターハイへの遠征応援そして高商戦応援と、短期間のうちに精力的な活動を展開したのである。

高商戦の復活

桜星会各部、応援団の復活に続いて、昭和二十一年十月十七・十八日には対小樽高商戦が復活挙行された。なお小樽高等商業学校は、戦争中に小樽経済専門学校と改称されていた為、正式には対小樽経専戦（経専戦）であるが、一般的には旧来通り高商戦と呼ばれていたようである。

さて、復活した高商戦は、戦前と同じく若人の熱と感激の祭典であった。大挙して押し寄せた両校応援団は熱烈な応援を行い、選手も応えて力一杯のプレーを繰り広げた。

ところで、高商戦復活に伴い、戦前では行われていなかった所謂「対面式」が行われるようになった。戦前は、野球戦の開始前にグラウンドで両校の応援団長が握手を交わす程度の交歓はあったようであるが、試合に先立つセレモニーとして行われるようになったのは、この時期である。

この当時の対面式は、近年まで行われていた小樽商大定期戦対面式とは趣をやや異にしているが、やはりその原型ともいうべきものである。大挙遠征して来る敵応援団を駅頭に出迎え、両校対峙する中で、双方の応援団長が各々「歓迎の辞」「歓迎の辞に応う」を読み上げる。そして応援歌交換、ストーム等を行った後、試合場目指して市中行進に移る。以上が当時の対面式であった。次に昭和二十三年秋の高商戦における高商団長の「歓迎の辞に応う」を掲載する。

春秋流れて何処えか去り　吾等貴團を新緑滴る樽都に迎えて半歳　今や凋落の秋深まり　山野こぞりて紅葉に燃ゆる時

吾等また赤き情熱持ちて幌都に赴き貴團に迎えられる　感又一人深からずや「萬物は流転す」とはヘラクレートスの言なれどその濫觴は遠く大正の古きに溯り三十有余年の歴史と伝統を誇る北大豫科対小樽高商戦も学制改革なる時代の流れに消え去らんとする秋

若き吾等が情熱を本日此処に貴團と共に謳歌し新しき時代えの喜びと希望を抱きつつ本戦いに永劫の決別を交し得る歓喜又何に喩えんや
学生スポーツは学問と共に吾々を育成し社會の有能な行為的主体を形成するをその目的となすものなり
本決戦に臨み　吾等が闘魂燃えて既に貴團を呑むの概あり　意気正に軒昂されば鎧袖一触　吾等が雄叫びと感激の歌を聲高らかにエルムの杜に轟かせ　石狩原頭に勝利の大ストームを敢行す　以上戦に臨み歓迎の辞に應う
昭和二十三年十月九日　緑丘應援團
團長　原　美雄
（以上は二メートル余の巻紙に書かれている）

さて、この時期の応援団の応援振りは戦前よりも大仰なものであったようだ。例えば、市中行進では、都ぞ弥生を一息一音で長々と歌い、それに合わせて一歩一歩進むので大変な時間を要することもあったようだ。また、団長の出で立ちも、白の柔道着に白袴、黒紋付を着用し、手には戦前から伝来する桜星三条線を配した皮采配を持すという仰々しいものであり、応援中は終始壇上にて不動の姿勢で試合を凝視していたそうである。少々尾篭な話であるが、団長は尿意を催しても壇上から降りる訳にはいかず、已む無く袴の裾から一升瓶を忍び込ませ何とか欲求を満たし得たというエピソードも残っている。

以上の大仰さや仰々しさも、再び来た平和の時代に精一杯青春を謳歌せんとする豫科生の愛すべき稚気の発露であったろう。

桜星会との関係

桜星会も応援団と機を同じくして昭和二十一年秋に復活したのであるが、桜星会における応援団の発言力は戦前と同じく強いものであったらしい。特に予算決定に関しては応援団の独壇場の観があった。従って、運動部予算を一銭でも多く獲得しようとする応援団に対して、福利厚生面に力を入れようとする桜星会総務が反発し、時には鋭く対立した。

さて、全学学友会は徐々に衰退する傾向にあった。それと同時に学部別の学生自治会が結成され、桜星会も学生自治会的色彩を濃くしていった。昭和二十三年頃からは桜星自治会とも称するようになり、このような風潮が強まるにつれ桜星会運動部との繋がりは弱いものになった。

昭和二十三年には運動部の連合体である「体育会」が非公式に結成されていた様子があるが、昭和二十四年には豫科運動部は桜星会より離れ、この年四月に公式発足した「北海道大学体育会」に所属し新制運動部として新たに出発したのである。

豫科応援団の終焉

学制改革により、豫科は廃止されることとなった。昭和二十四年春には新制大学一期生が入学し、その前年の昭和二十三年に入学した豫科一年生は豫科二年には進級せず新制大学一年へと編入され、豫科生は昭和二十二年に入学した三年生の一学年三百名のみとなってしまった。この豫科三年生が昭和二十五年三月に豫科を修了すると同時に、北海道大学豫科は消滅することとなったのである。

豫科最後の応援団長に和田輝義氏が選出された。また、応援リーダーは豫科三年生の他に、新制大学一年に編入された前豫科一年生の中からも選ばれたようである。この二つの学年は最後の豫科生として結束が固かったらしく、また不本意に新制大学に編入された前豫科生達の中には、それを不満として白線帽を被り続けた者もいたそうである。

さて、昭和二十四年の応援団の活躍も前年と同じく高商戦にインターハイ遠征にと盛大に展開されたのである。そして秋の高商戦を終え、いよいよ豫科応援団解散の時が来たのである。解散を惜しむ声もあったが、豫科と共に歩み、豫科スピリットの旗手であった北大豫科応援団は、母体である北大豫科の消滅により、その使命を終えたのである。解散に当たって、当時の応援団幹部には「新しい時代の新しい応援団が出現する事を期する発展的解消として豫科応援団解散を捉えていこう」という考え方があったようである。しかしながら、母校たる北大豫科と北大豫科応援団の葬送を自らの手で行わなければならない人々の心中は察して猶余りあるものがあった。

秋の一日、豫科応援団最後の幹部・リーダー達は恵迪寮の一室に集い、ささやかながら万感の想いを込めて解散の式を行った。ここに、熱と意気の揺籃として北大豫科生活に不可欠の存在であった豫科生九百の自治体たる北大豫科応援団は、その伝統と栄光に輝く血涙史を永遠に閉じたのである。

（後編に続く）

高商戦の一つの思い出

北大応援団OB会延齢会会長　板谷　實
（昭和21年入寮）

戦争によって解散させられていた北海道帝国大学予科応援団は、終戦の翌年昭和二十一年九月に復活再建の応援団結成をみたのである。実に昭和十五年以来六年ぶりの復活であった。そして団長選挙が行われ山口哲雄さんが昭和二十一年度団長に就任した。昭和二十二年が多田邦雄さん、二十三年が不肖板谷實、二十四年が和田輝義君と続くのであるが、学制改革によって予科は廃止されることになり北海道大学予科応援団の最後の団長が和田輝義君となるわけで戦後復活の予科応援の歴史はわずか四代の短い歴史でしかない。戦後の混乱と物資の不足する昭和二十二年秋から二十三年頃までの間の一年間団長を務めさせていただいたわけであり、わずか一年間とはいいながら未だに心に残る思い出が幾つかある。その思い出の中でも最大の出来事であり、応援団史にも載っていない出来事、高商戦中止という出来事を述べてみたい。この事件に関する書状などが手許に残っているのでこれを披露しながら回顧することにした。

昭和二十二年九月二十日に当番校である小樽経専応援団長より挑戦状が手交された。

挑戦状

謹啓　秋気颯々之候貴団益々御清祥之段奉賀候
陳者　恒例定期戦漸ク熱シ候間来ル十月十一日ヲ以テ決戦ノ日ト致度此段御諄知相成度候
緑滴ルエルムノ杜ニ相交ヘ早半歳今ヤ濃藍ノ海静カナル吾小樽ニ貴校ノ遠征軍ヲ迎ヘ肉弾相搏ツ闘ニ若人ノ熱血ヲ燃ヤシ盡サム日ヲ吾等静カニ待期致居候
尚今回ハ本校當番校に候ヘバ諸事當方ニテ万端準備可致候ニ付貴校ニ於テモ堂々ノ陣ヲ以テ相臨マレ度
右挑戦仕候也
昭和二十二年九月二十日
緑丘団長
桜井　純一
北大桜星会団長殿

この挑戦状を受けての私からの応戦状を不思議な御縁で当時小樽経専の応援団副団長をしていたS・Yが持っていることがわかったことからその全文を見せられたことがある。

応戦状

烈々ノ士気萬端ノ仕儀相整エラレタル挑戦状正ニ拝受
豫テ貴意ヲ得候通来ル十月六日ヲ以テ恒例定期決戦ノ日ト致シ猛然タル闘志ト堂々ノ布陣ヲ以テ緑丘戦場ニ殺到可仕候　我等衷心ノ期待ハ貴校鐵壁の備ニ有之候
切ニ望ムラクハ龍攘虎搏ノ熱戦ヲ展開シ苟モ我等ラシテ鎧袖一触ノ嘆ヲ味ハシメザルコトヲ祈

上候

右応戦仕候也

昭和二十二年九月二十五日

北大豫科団長

板谷　實

緑丘団長殿

ここまでは無難に推移してきていたのであったが九月二十八日の応援団会議が両校応援団長以下幹部が出席して恵迪寮で開かれたのであるが、この数日間に両校応援団同志の間に意志の疎通に欠くることが何点かありこれが会議の冒頭当方より先方に対し責任追求という形で火を吹いた。

北大予科桜星会第二十五期応援団長ハ小樽経専緑ケ丘団長ニ対シ左記五項目の責任アル處置ヲ要求ス

記

一、二十日挑戦状持参者ハ当日予科側ノ希望セル試合期日「十月六日」ヲ聞キシニモ不拘、二十五日主将会議ノ席上ニ至ル迄交渉セザリシ怠慢

二、二十六日「六日」ト一応決定シタルニ、カヽル重大ナル際ニモ不拘、幹部病気（風邪）ト称シ来ラザリシ不信

三、六日ト許可サレタル日程ノ変更ニ関シテ相手方北海道配電会社ト直接交渉セザリシコトノ責任

四、配電会社ノ「野球場」使用ニ関スル申請ガ高商ヨリ先ナルニ不拘、其ノ事実ヲ予科側ニ伝エザルノミナラズ二十六日来リシ代表者ハソノ事実ヲ歪曲シ故ニ一層混乱ヲ惹起セシコトノ責任

五、高商側ハ最善ヲ盡サヾルニモ不拘本定期戦ノ成立ノ諾否ハ一方的ニ当予科側ノ意志ニアリト放言セシコトノ責任

以上

昭和二十二年九月二十八日

北大予科応援団長

緑ヶ丘団長殿

このような文書を突き付けられては高商側もだまっている訳はない。

拝啓

昨日参上の節御鄭重なる御送迎謝し仕候　就而今次定期戦に関し九月二十日挑戦状持参以来種々接渉を重ね我等挙りて秋気颯々の港都に桜星の軍を迎ふべく萬端準備致しつつ有之候処不慮の意見の乗離にて決裂仕候事遺憾の極に存じ候

昨日応援団会議冒頭に於いて当方に対する責任追求状なるもの貴団より提示有之候　当席に於いて言明せし如くかかる不遜なる書状全く非儀礼的にて我等其の意解し難く断乎として其の書状認め難きものに有之候へば当方の期日決定の事務上の手違に関しては種々理由ありたるも当番校としての当方の責任に候へば敢へて黙して謝し併して貴団書状撤回せられ然る後具体的会談に移らんと慾せしも貴団に於いては毫も枉ぐる事なく因持せられ候　此処に於いてか我等當然の理を盡せし結果として敢へて会談を続行する必要なきを認め決裂の止むなくに至り候

依って我等貴団の責任追求状なるものを撤回せざる限り我が応援団としては今次定期戦を打切る所存に御座候

茲に挑戦取消しに及び候

右御通告致し候也

猶九月二十五日御持参の貴団応戦状相添へ御返却仕り候

敬具

昭和二十二年九月二十九日

緑丘団長

桜井　純一

北大予科団長殿

これでは完全な国交断絶である。新聞も大々的に書き騒ぎはどんどん大きくなった。学校関係者も先輩達も心配しはじめた。一時はどうなることかと思ったが、両校団長の二人っきりの腹を割った話は急転直下問題解決に至り、秋の定期戦は何も無かったようにして開かれた。高商戦に纏る知られざる裏話である。

「恵迪開識社」講演会　旧演武場で一世紀ぶりに開催

和　孝雄（昭和32年入寮）

恵迪寮同窓会主催の二〇〇五年度「開識社」講演会は、同年十月一日午後六時から札幌市時計台ホール（札幌農学校旧演武場）で開催された。演題は〝知床世界自然遺産のこれから―知床は道民の誇り、その保全は道民の責務―〟、講師は石城謙吉氏（北大名誉教授、知床世界自然遺産地域科学委員会委員長）で、旧演武場での開識社講演会はほぼ一世紀ぶりのことであった。また参加者は一般市民を含め九十名以上の多きにのぼった。

開識社は、明治九年（一八七六）、クラーク博士の提唱により、札幌農学校第一期生によって組織された。その目的としたところは、習得した知識の開陳、英語での発表能力の鍛錬などであり、また相互の意見交換を通じて知力の向上と親睦を図るというもので、当初は農学校寄宿舎で行われたが、明治二十年頃になると学外者にも公開し、寄宿舎近くの演武場でも行われるようになった。講演会の演題は、学術的なものから政治的なもの、宗教的なもの等々、幅広く、また演者も寮生だけでなく教官も含め多様であったが、戦争などの社会情勢や寮内外の事情変化があるなかで、幾度かの中断や盛衰を経ながら昭和二十五年（一九五〇）まで続けられた。

その後、途絶えていた開識社が復活したのは、昭和五十八年（一九八三）に恵迪寮同窓会が結成され、その活動が軌道にのってきた平成四年の総会で、「〝恵迪精神〟の具体的活動と生きている現在の社会の接点を求めて」（会報〝恵迪〟九号）決議された「恵迪開識社」の創設によっている。同窓会はその後、恵迪寮OBや北大関係者を講師として文化や学術をテーマに、市民公開による講演会を北大内外を会場として開催してきた。

そして今回、市民参加の便とともに、農学校以来の伝統の復活、「恵迪精神＝自治の精神」の再確認と啓発、伝承等の一層の推進を図ることを趣旨として、かねてから懸案であった時計台での開催を実現することとなった。旧演武場での開識社講演会は、札幌農学校が明治三十六年に現在の北大キャンパスに移転して以来のことで、およそ一世紀ぶりのことであった。

今回の講演会テーマは、屋久島、白神山地に次いでわが国三番目の世界自然遺産に登録され、道民をはじめ全国的に強い関心が寄せられている「知床」をとりあげ、講師に恵迪寮OBの石城謙吉氏をお願いした。同氏は、知床が世界自然遺産に選ばれた理由、知床の保全上の問題、今後の課題等について、およそ一〇〇分にわたって、多角的視点から解りやすく説明され、一般市民を含む九十名をこえる聴衆に深い感銘を与えるとともに、世界自然遺産としての知床の重要性、これからの私達の考え方、かかわり方について多くのことを教示してくれた。

講師の石城謙吉氏は、長野県出身で、昭和三十二年北大入学と同時に入寮、農学部卒業後一時期高校教諭を務めたが、その後大学院に進学、農学博士取得後、北大演習林に採用され、昭和四十八年から二十三年間にわたって苫小牧地方演習林長、平成八年からは北大演習林長を務め、平成十年定年退職、現在北大名誉教授で、著書に岩波新書「イワナの謎を追う」、講談社「森に生きる」などがある。また知床世界自然遺産地域科学委員会委員長として、環境保全や自然保護の問題点について関係機関に提言するなど幅広い活動をされている。

終戦前後の寮

（一九四三～一九四六）

安井　勉（昭和18年入寮）

恵迪遺産とは……

次の世代に残したい物質的・精神的なものを各世代の寮ＯＢに書いていただいた。①「終戦前後の寮（一九四三年～一九四六年）」を昭和十八年入寮の安井勉さん②「若き日のエピソード」を昭和三十三年入寮の宝住与一さん③「紀州発・故郷回帰塾」を昭和四十年入寮の千川浩治さん④「わが青春の三年半」を昭和四十四年入寮の俵正好さん⑤「憧れの恵迪寮」を昭和五十年入寮の千原治さんが寄せてくださいました。

一九四五年八月十五日の敗戦の日から六十年以上になる。太平洋戦争（一九四一―一九四五）に突入した狂気の時代、日本の高等教育政策は「勤労動員」、「学徒の徴兵」、「修業年限の短縮」の三点に集約され、これらの三位一体的進行によって高等教育は崩壊の道を歩んでいた。

一九四三年度から大学予科、高等学校の修業年数は一年短縮された（三年→二年）。この年から一九四五年の敗戦をへて戦後の混迷期にいたる世の移り変りは激しいものであり、わが恵迪寮もその埒外ではなかった。この激動のなかにあって、寮の自治の精神がどのような経過をたどったかを回顧してみるのも、あながち無意味ではないであろう。

戦争も半ばを過ぎると、戦局は不利に傾き、第一次学徒出陣（一九四三年十月）によって、文系学徒は兵役の免除が解かれて戦地に赴いていった。当時北大は理系の学部だけで構成されていたので、これら出陣学徒の数は少数にとどまっていた。しかし、戦争の影響は寮を含むキャンパス全体にひしひしと押し寄せていたのである。

この頃の入寮当時の状況から振り返ってみよう。寮のいわゆる入銓は、学校側、予科当局が行なっていた。まず、入試当日に口答試問があり、そこで入寮希望の有無が訊かれた。それと同時に、入寮にあたってはいずれかの部に所属することが義務づけられているとして、所属を希望する部も聴取された。部とは運動部のことであって、柔道、剣道などの大きな部のほか、軍事色の強い銃剣道部とか戦場運動部などがあった。いわゆる球技に属するものはラグビーとサッカーのみで、野球、庭球、卓球などは部活動が禁止されていた。

希望もなく、先輩とのつながりのない大部分の学生は、いずれかの部に割り当てられたのであった。

選挙による寮の委員会制度は廃止されて幹事会となっており、幹事長は予科当局の指名によって決定された。朝晩には点呼があり、消燈の時間も決っていた。このように当時の寮には、軍隊の兵舎なみの生活が要求されていたのである。なお、寮内は禁酒、禁煙、ストームは厳禁となっていた。

このように当時の寮には種々の制約があったのであるが、新入寮生には寮の自治が侵害されているという印象はなかった。抑圧された旧制中学校生活を強いられてきた彼等の目には、寮生活は伝統とロマンティシズムに溢れたものとすら映じていた。すなわち、寮の意志決定は寮生大会の決議であり、その議決事項は学校側も認めざるを得なかったのである。そして、日夜高唱される寮歌には、自由と自治の文言が鏤められていた。さらに、自治すなわち自炊する寮自治の伝統は、一日二合五勺（三三〇グラム）の米の配給制度下にあっても伝えられ、守られていたのである。食費を含めての寮費一切の管理は寮幹事会（生活部）の仕事であった。

一九四三年から一九四五年にかけて、戦況の悪化にともなって勤労動員の量は増加の一途をたどった。予科生たちは飛行場建設［樺太（上敷香）、帯広］、航空機生産工場（群馬県大田市）、道内農村地帯への援農などに休む間もなく狩り出されていった。このような状況下で、理系学部の徴兵猶余適用学科範囲の縮少によって、一九四三年入寮生の一部は一九四五年三月の学部進学前後に続々兵役に赴き、一九四四年組は長期援農に動員され、寮運はかなり変則的なものにならざるを得なかった。それにも拘らず、一九四五年の新入生受け入れや、それにともなう伝統的諸行事（宣誓式、鈍才会など）は粛々と実行されていたのである。かくして、八月十五日、寮で、農村で、工場で寮生達は思い思いの感慨を抱いて敗戦を迎えた。

勤労動員の解除、軍事関係法規の撤廃、授業再開準備、戦時教育の一掃など、文教政策の大転換が図られ、これにともなって寮生活にも転機が訪れた。短縮された予科修業年限二年はもとの三年に戻り、一九四四年入寮者は予科の最高学年を二年目、三年目の二回続けることになったのであった。その結果、寮執行部の役割も二年間の前後期合せて四期にわたり、寮自治再出発の重責を担うことになったのである。

委員会が直面した問題は文部省や予科当局からの圧力との抗争などというものではなく、食糧難や燃料難であった。全北大は燃料不足のため一九四五年十二月十八日から一九四六年三月三十一日まで冬眠を余儀なくされた。寮は一九四六年四月二十二日からの授業再開を控えて四月一日から開寮したが、食糧難のため再び閉寮の危機にさらされた。主食（米）の配給は戦時統制経済制度下では辛うじて維持されていたが、戦後の無政府状態に近い混乱のなかでは、遅配、欠配が日常化し、寮の米倉が空になる事態が頻発した。生活部の努力にも限りがあり、一日二食、うち一食は海宝麺（統制外の海藻からつくられた麺）という情況に立ち至るに及んで、五月十三日に緊急舎生大会が招集された。ここで、食料事情悪化による六月一日から九月一日までの閉寮が提案され、可決決定されたのである。

寮生活維持のための長期的展望にたって、寮委員会（生活部）は、予科が六月一日から九月一日までの夏休みに入ることを予科当局に提案した。休みを利用した食糧確保計画を立てたからであったが、燃料不足による長期の冬休みのみが念頭にある当局側には受入れられず交渉は決裂、一方的な寮の閉寮宣言が決定に基づいて実行の運びとなった。

この間寮生はそれまでに援農に出向いた農村に対し、自主的な援農を申し入れていたのである。復員兵士の未帰還もあって労働力不足に悩んでいた農村は寮生の申し出を歓迎し、米作地帯の農村では寮生一人あたり米一俵（六〇kg）の割でアルバイトを受入れてくれたのである。お蔭で九月二日の開講時には寮の米倉には天井まで届く米が確保されたのであった。

新入生の受入れ（九月一日）やそれにともなう諸行事は恙無く行われ、九月二日は予科三学年揃っての授業開始となった。六月閉寮交渉のなかで、寮は九月の開講を予科当局に保証していたのである。この年、全国の国立高等学校、大学予科のなかで、九月の開講ができたのは北大予科のみであったという［故宇野親美予科長（当時）談］。

疾風怒涛の時代を共に生きた若者達の再出発を、莊重・流麗なメロディーにのせてうたいあげた寮歌★時潮の波の★が谺するなかで戦後の恵迪寮自治再建の歩みは着実に前進していった。

若き日のエピソード

宝住与一（昭和33年入寮）

先日、机の整理をしていたら、現在、K大学の教授をしているO君の〝若き日の罪〟なる文があった。前に〝囲碁クラブ〟に応募した小説で、佳作に入ったのでどんな文か見せろと云った時、ついでに送って来たものらしい。今回読んでみて、全く以前に読んだ記憶がなく、「なんだ、あいつ、こんな風に考えていたのか。それでは、俺はどう考えていたか、思い出すまま書いてみるから読んで見ろ」と電話をしてしまったので、これを書いた次第です。

恥ずかしいやら、懐かしいやら又、この件に関する事を、以前に「恵迪寮の青春」なる本に書いたら、反響があり、その裏話を書くぞと云われた事もあったので、その件についても触れておきたいと思っている。

我々が恵迪寮に入寮したのは、昭和三十三年です。長島が立教大学を卒業し、巨人に入団した年であります。

北大恵迪寮の予備知識は全く無く、入寮銓衡を受けた訳です。入寮してみると恵迪寮は、私にとって天国以上であった。毎日が楽しくて、楽しくて。後で機会があったら書いてみたいと思います。

十月に、寮最大のイベントの寮祭があります。昨年の寮祭は、寮に赤痢が発生して中止になり、今年こそ盛大にと、皆考えていたものでした。

寮祭の企画は、各部屋毎に考え、その主役は部屋デコ（デコレーション）と仮装行列であった。

寮の中は、映画の看板・喫茶店や国鉄列車の看板、急行とか札幌行き、その他諸々の看板や、公園のベンチ、どうやって持って来たのか、と首を傾げるような物で溢れていた。

しかし、幾らかでも冒険を？捕まる恐れのあるようなものは無かった。

ある時、一度札幌北警察署の看板を、とってきたのを見たのは〝感服〟した、との話を聞いた事があったので、そんなの簡単だと、まず手始めに札幌北署の看板をとろうと思い、次の日、出かけてとってきた。

寮祭の日も間近になり、我々のサークルでも、部屋デコについての相談が始まり、札幌北署だけでは話にならない、北署の看板は非常に簡単にとれたので、北海道警察本部の看板を狙う事で衆議一決した。

そして直ぐ、夜十時頃、皆で勇んで出発、総勢八～九人居ただろうか。道警本部のある道庁に着いた、ところがなかなか、誰もしりごみして入らないので〝俺がとってくる〟と、鉄格子で出来た塀を乗り越え、道警本部の方へ行くと、後方から足音がした。振り向くと、大学帽をかぶり、分厚いジャンバーを着た、O君であった。その当時、彼は北海道の田舎の優等生で、一番分別がありそうと言うより、我々から見ると生意気で、世間から見ると良い子と見られたい部類の人間と見ていて、寮の雰囲気に合っていないように見えたので、又、事情さえ許せばその頃は、何時も寮を出たいと云っていたので、私は大変以外に思った。

道警本部の前に来て、道警本部の看板を私がとると、O君が公安委員会の看板をとった。そして、しゃがみ込んだ時、僕が、看板を落とし大きな音をたてたら、O君が大変怒り、おかしくて笑ったら、すごい形相で余計に怒ったものである。

そこで一息し、気づかれていない事を確認して、道警本部前から離れ道庁を出、一件落着の筈であった。ところが、余り上手く簡単に行きすぎて図に乗ったのか、O君が、四丁目交差点（札幌一の繁華街、宇都宮の二荒山前みたいな所）の〝一の中央薬局〟の前に掲げてあった〝コンドーム〟なる看板をとると云い出し、どうしても譲らない。仕方なしに、道警本部と公安委員会本部の看板を、大学構内のその頃の第五講堂の前の草むらに隠し、

再出発。

四丁目交差点の〝コンドーム〟なる看板をとった後は、誰かが〝ついでだから〟と女性求むのキャバレーの看板を、と云う事になり、又部屋デコに使う映画の看板もと、何枚かとり、八・九人で大きな看板を持てるだけ持って、担いで歩きだした。

宝住委員会（第167期）

その道筋について、私は、明るくても狭い道路を行く事を主張した訳ですが、他の人達は暗くて広い道路を行く事を主張し、結局暗くて広い道路を行く事になり、途中パトカーに〝何をやっている〟と云う事で、捕まってしまった。

その時の我々の格好は、なんともひどく滑稽で、惨めに見えたに違いない。

一寸、説教された後、警官の一人が先導し、その後を我々が看板を持って歩き、その後からパトカーのヘッドライトに照らされながら、歩いて行った訳である。

皆、先程迄の元気はどこへやらで、余りの変化に、私はおかしくて、おかしくて笑いを堪えるのに、必死であった。すると、隣のO君が大変怒り、益々おかしくて笑ってしまった次第です。又、その時の我々の服装も奇妙なもので、N君等は黄色の寝巻きにボロズボンを穿いたものであった。警察署の警官に、その格好ならそのまま仮装行列に出ても大丈夫だ、と云われた程であった。

その頃、北大は学生運動の盛んな時で、警察は大変、対策に手を焼いていた時である。次の年に、羽田デモで岸首相の訪米阻止（この時に私が寮の委員長だったので、大変で、大量に寮生が捕まった。その抗議に夜中に札幌中央署迄出かけたものである。）その次の年、唐牛健太郎君が全学連委員長になり、国会請願デモ、そして樺　美智子さんが、亡くなった時であったと思います。この時の、唐牛君が真っ先に警察の車に突入し、その車の上に飛び乗った時、足をすべらせて転んだと云う話である。（間違っているかも知れません）

と云う訳で、学生運動が燃え盛る揺籃期？だったと思われ、寮も変化しつつある過度期だったと思います。

その頃、唐牛君は、北大教養部の学生自治会の委員長？（もっと上部団体の委員長だったかも知れません）、毎日のように我々のクラ

恵迪寮従業員

スに〝オルグ〟と称して、授業の前に来たものである。私は、結構邪魔したり、困らせた方であったと思う。今考えると、誰が行っても駄目なので、唐牛君が来たのかも知れない。又、その頃、共産党も昭和二十九年だったと思いますが、血のメーデー事件以後、極左冒険主義と自己批判し、火炎ビン闘争を止め、穏健路線に変更し定着しつ、あった時でした。

そこで、唐牛君等は、その路線に軟弱だと不満を持ち、共産党北海道本部に殴り込みをかけ、除名されたと新聞に報道されていたのを、聞き知っていたので、妙に私は感心していたところでした。

だから、こんな時に警察に捕まっては大変だと思い、顔が青くなった者が居ても、不思議ではない。(恵迪寮は学生運動の根城と思われていた)しかし、警察もバンカラとハイカラ(学生運動をやる連中)は、両立しないと思ったらしく、幾らか手綱を緩めてくれたのかも知れない。

しかし、警察に入ってからの取調は、結構きついものであった。私が年長だった事もあり、格好良いところを見せようとしてか、見栄からか〝俺が皆を誘ってやったので、他の人は付いて来ただけだ。責任は全て俺にある。〟と言ったのですが、〝何言ってる、大学生ならそんな事分かる筈だ〟と一喝され、〝皆同罪だ〟と言われた訳です。その後、皆キッチリ調べられた。その時、中国からの留学生林(リン)君が居たが、彼は自分の名前を、林(はやし)です、と云っていたのを聞いて、大変おかしかったのを覚えている。

〝何故こんな事をした、気持ちは分かるが他人の迷惑も考えろ〟と、そこで私は〝金無し物無しで何かするのは、アタックする位しかない〟と反論していた。(暴論としか云いようがない)。ただ、警察官も話にならないと、呆れていたと思われる。しかし、かなり好意的で、コンドームの看板は、こう云うものなら盗っても、余り悪いとは云えない、寧ろ奨励したい位だ等と言っていた。それと、看板を盗った事により利益を得る事(売る等して)は無い、と言う事を認めてくれた。(此処が、窃盗といたずら?の別れ道)。その内、聞き出し方も上手かったのか、第五講堂前の草むらに隠した看板の事をN君が白状してしまい、それを取りに行ったので、総数十数枚の看板は壮観であった。

その頃、身元引き受け人を呼べと云うので、仕方無く寮に電話した訳です。その時電話に出たのは、寮務部長の石川　舜さんであった。山中義正委員長と、一応正装して道警本部に現れたのは、大部時間が経ってからであった。

入って来た時は、我々はすっかり警察の人達と打ち解けて(私だけかもしれないが)、色々な四方山話をしながら、勝手にお茶を飲んでいた。そこに、山中委員長・石川寮務部長が入って来た。目で一寸合図をするも、緊張で気が付かなかったらしく、全く神妙な顔をして、寮に居る時の威勢は何処へやら、と云う情けない風情であった。これなら、警察も文句が言い易いだろうと言う感じであった。

案の定、徹底的に委員長と寮務部長は、警官に文句を云われていた。警察は、どう我々に云っても仕方無いし、寮の執行部に云えば、効果があると思ったらしい。

我々は、その時、全く関係無い顔をしてそばで、どんな事を云っているのかは、注意して聞きながら、別の警官と雑談していた。

〝くれぐれも、警察の看板を盗るのだけはタブーにしてくれ〟〝これでも何万円もかかるのだから、とられると大変なのだ〟と云っているのが聞こえた事を覚えている。留置した事にするのか、始末書にするのかの話も聞こえたが、全く私は、気にしていなかった。どちらでも良いと思っていたので、後で聞いた若い警官と年老いた警官とのやりとり等は、聞き流していた。年老いた警官の好意は後で知ったのですが、その時の私にとっては、どうでもいい事であった。

暫くして、話がつき始末書を書く事になった。N君に〝お前、筆が立つから書け〟と私が云ったら、その警官が〝お前がリーダーならお前が書け〟と云われ、仕方無く書いた。

その内容は、思い出すまま再現すると、以下のようなものであった。

始末書

今回、我々恵迪寮生　宝住与一他八名は、恵迪寮祭の部屋デコで、警察の看板を展示し、皆をアッと言わせたく、北海道警察本部・北海道公安委員会本部の看板を盗りました。今後二度と警察本部及び公安委員会本部の看板は狙わないよう、出来るだけ努めます。

昭和三十三年十月×日

宝住　与一

と云うものでした。これでよく通ったと思

いますが、警察は寮長と寮務部長に充分に説教していたので、もう大丈夫だと思ったのかも知れない。その時、不思議に私には罪悪感はなかった。

その後、看板を全部元の場所に返し、帰寮についたのは、明るくなってからであった。大通り公園を越えて北一条通りにかかった時、時計台の鐘の音が聞こえたとの事。その時、石川　舜ちゃんが〝いいなあー〟と言った時、私が〝いいだろう、我々のお蔭でこの鐘の音が聞けるのだから、在り難いと思え〟と云ったとの事である。私には全くこの記憶はない。次の年、再度警察の看板をアタックし、中央警察の看板を加えて、警察署の看板を総ナメ?にして、寮祭で飾ったら、週刊誌・新聞に写真入りで大々的に出た。その為、委員長のG君と厚生課Mさんが、道警本部に呼ばれ始末書を取られたとの事、その間、我々は誰からも文句一つ云われなかったが、後日、Mさんに会った時、僕がやったのを知ってか知らずか〝宝住君、ああ云う事をやられると、学校側としても大変困るんだよな〟と云われたのが、唯一の注意であった。

その頃の寮は、今思えば、大変活発だったのではないかと思いますが、寮のアパート化防止、寮の自治に対し学校の干渉を排除する、と云う事を強く意識していた為、我々のやった事は、アパート化防止、寮生がおとなしくなっていたので、その沈滞の打破等の目的を標榜して成立した委員会(執行部)としての方針に合致していた?又、寮の自治と云う事では、我々の為に警察に呼ばれて迎えに来た事は、大変迷惑をかけた事であるが、何となく、委員長・寮務部長が我々に文句を云うような雰囲気は全く無かったし、その気も無かったように思う。寧ろ、良い事をやってくれた、と迄はいかないにしても、この頃の寮の事を考えると、たまには、こんな事をしても良い?の気持ちだったのではないかと思う。

ただ、今回O君の文章を読むと、全く自分の事しか考えていなかった事が、恥ずかしいし、又私は、若気の至りで等とは絶対云わない。いつもその時の行動がベストと思ってやっている。後で取り消す事等はしない等と、何時も云っていたので、思い出すと全く恥ずかしい次第です。

これは、私の若き日のエピソードです。

紀州発・故郷回帰塾

千川　浩治(昭和40年入寮)

遺産とは、一、食いつぶすもの　二、それを活用・発展・維持すべきものとに分けられる。それを恵迪に当てはめると、前者は存在しない。そのような余分な遺産は存在しない。四十年入寮者の遺産ということになると、講堂の二階から飛び降りる「ジャンプ大会」であろうか。剣道部の長野章君らの発案であったように記憶する。当時札幌オリンピック開催間近で、いかに遠くまで飛べるかといったもので、後日の奇抜さを競うようなものではなかった。雪が珍しい国からの者の発想であった。この後も、雪を楽しもうとするこの種の発想は消えるものではなかろう。「都ぞ弥生」の一節「荒ぶる吹雪の逆巻くを見よ」に一致するものである。

このほかの遺産となると、時代を超えて共通のものとなり、皆がイメージするところのエッセンやコンパ等で、敢えて記載するまで

もない。残るは、私個人に関することとなる。私の出自を述べる時、「恵迪です」の一言はひょっとすると、書き出しにある「食いつぶしている」遺産かも知れない。恵迪の名を騙ったことはないつもりだが、時には「恵迪」の大きな傘の下に寄ろうとした事があったかも知れない。尺八をやっているが、その職格竹号に「迪山」と迪の字を使用している。子供に迪の字を使い親子二代の寮生もおられた事を記憶する。同じような思いである。

言わずもがなの共通項ですが、つい最近の事例を挿入させてください。昨年十一月の三九四〇会結成については、第一八六・一八七期の寮長白浜憲一君の前号の報告で詳しく述べられています。その会合の後、ラグビーをやっていた栃木の飯塚健三君をたまたま千歳までお送りした。その折、北海道ではあまりうまいお米は食べられないだろうから、「うまい栃木の米でも送るよ」といって帰られた。それが、本年九月末の連休に思いがけなくも栃木の新米が届いた。ちょうどその折、大阪の高校時代の友人二名が我が家に逗留しており、恵迪寮を核とする「友」の形を友人たちに示す結果となった。もちろん送っていただいた米も美味しかったが嬉しかった。今、白浜憲一君から雑誌「恵迪」の「恵迪遺産」という演題の原稿依頼があり、それを満たすべく作成中であるが、こういう事も遺産のひとつに違いない。来年は関東で三九四〇会の集まりがあるでしょうが、その折にまた旧交を温める事が出来る。

これらの恵迪遺産継承のためといえば大袈裟であるが、「故郷回帰塾」開設を計画し、二〇〇六年開塾する予定である。一九六五年十九歳の春恵迪寮に入り、爾来北海道で厄介になり四十年が経過した。秋味の稚魚は放流したものの三%が回帰するという。故郷紀州を十二歳に出て四十八年が経過する。「故郷は遠きにありて想うもの」と犀星の詩のごとく青春期を思い、童謡「ふるさと」のごとく志を果たした訳でもなく、野口英世のごとく柱に刻んだ如くでもない。しかし、最近釈迦が死に臨んで北帰したごとく、帰巣本能と言おうか、孔子が「帰らんか、帰らんか」と魯に向かった如く、本能の意のままに南帰しようと考えている。もちろん、お釈迦様や孔子ほどの才も学も備わっていないし、項羽が関中を省みないで楚に向かったような、飾るものは何もない。しかし、志だけは今もあり、「高潔に生きるBe Gentleman!」という事である。

故郷回帰塾予定地

五年に限り、冬期間の半年を紀州有田で塾を開設し子供を集め、紀州と北海道を繋ぐ事をやってみようと考えている。子供と遊んでもらおうというものである。妻は、無責任じゃないの」と危惧するが、クラークさんだって札幌に八ケ月しか滞在しなかった。無責任

筆者（右端）の実家にて

という謂れはないと考えている。講師は子供にインパクトを与えて頂ける方なら誰でも良いと考えている。南の方に足が向くことがあれば、是非立ち寄られん事を希望する。

塾　名　故郷回帰塾（代表　千川　浩治）
理　念　「格調高く生きよう」「どこでも生きていこう」「縁を大切に、北海道にも縁を持ってってみよう」
学習内容　（略、ただし学力向上を目指すものではない）
塾の表札　延齢草と三宝柑
開設予定場所　和歌山県有田郡湯浅町大字栖原一三六八番地
開設予定　二〇〇六年秋

「ふるさと回帰塾の歌」
永久の倖　有島武郎君より借詩
永久の幸　朽ちざる誉れ　つねに我らがうえにあれ
よるひる育て　あけくれ教え　人となししわが庭に
イザイザイザ　つれもうて　進は今ぞ
有田の川の　尽きせぬながれ　友たれ永く友たれ

（第五十三代応援団長）

わが青春の「三年半」

俵　正好（昭和44年入寮）

私が恵迪寮に入寮したのは一九六九年四月だった。入寮銓衡の面接のときは、かなり緊張しながらも、どうしても寮に入らなければならないという必死の思いだったことを思い出す。

そして三年半の恵迪寮での生活が始まった。集団生活にあこがれていた私は、同室の寮生と話し合い、できるだけスチール本棚やベニヤ板などで囲わないようにした。

生来の「勉強嫌い」と、そんな「時代」だったからだろうか（まったくの言い訳にしかすぎないが）、教養部四年目の秋に北大を中退した。

だから、寮の行事は三回か四回は経験した。春には市内の看護学生寮の寮生などと藻岩山の「山びらき」登山、秋には寮祭、冬は二階の講堂から飛び降りるジャンプ大会などど。ジンギスカン専用の部屋はしょっちゅう利用させてもらったし、ストームで何度も寮の全室を回った。そして「追コン」には三回出たが、追い出されずに自ら寮を去った。

入寮した年の六月から、一九六期寮委員会の総務になった。委員会に入ると食費（当時で一カ月四千円位だったと思う）が免除された。親からの仕送りがなく、奨学金だけで大学生活を送らなければならない私にはこの上ない魅力だった。後日談になるが、そんな私がドッペリを重ねて奨学金を打ち切られ、たかる後輩もいないときに、チーズ1個と水だけで一週間を過ごしたこともある。

私が入寮したのは「七十年安保」の前年であり、大学民主化闘争の前進を抑えつけようとする「大学管理法」に反対するたたかいで、

世の中も学内も騒然とした状況だった。私たちの入学式は「五派連合」による体育館封鎖で中止となった。入学早々の四月二十八日は「沖縄全面返還」を求めて教養部学生自治会がストライキに入り、五月から「大管法」反対で波状ストから無期限スト、そして教養部校舎の封鎖（バリスト）へとエスカレートした。混乱の中で教養部学生自治会執行部がリコールされた。

講義はなく、デモと集会に明け暮れていた。私たち寮委員会は「部屋まわり」で行った先に「沈没」して話しこんだり、麻雀・囲碁・トランプなどで（中には勉強する寮生もいたが）夜明けを迎えた。郭公の声を聞いてから眠りにつく日々だった。

ところで、このころ「不法入居者」問題の解決が迫られていた。大学側が押しつけようとした「寮規」に反対して、自主入銓を続けていたが、大学側が認める寮生は、寮生活四年目の古強者（のちに私がそんな立場になるとは思ってもいなかったが）数人だけだった。七十年二月に、北大寮連と学生部長との「大衆団交」が恵迪寮の食堂で行われ、大学側が自主入銓を認めたことで解決した。この団交の議長役の一人を務めたことは、私の誇らしい思い出のひとつである。

七十年六月から、一九九期の寮委員長になった。五月に恵迪寮の講堂からボヤを出し、「新寮建設」がいよいよ切実な課題となった。多くの寮生は、そして私も、木造のボロい恵迪寮に愛着があったが、ことは「命にかかわる」ことだからだ。もうひとつは、炊夫さんなど寮の従業員「公務員化」実現も切実だった。

寮委員会は「雇用主」として従業員組合との団体交渉に応じなければならないのだが、貧乏な寮生が、賃上げや退職金などの要求に対応できるはずもなく、学生部との交渉を繰り返したことを思い出す。

ところで、当時の恵迪寮は、いたるところに落書があった。丹念にそれを書きとめて「恵迪落書集成」をまとめた寮生がいた。私と同期入寮で早世した阿部君は「長万部の星」と天井に大書した。

私の現在につながる落書は「明日から禁煙」だ。ベッドに寝ると、真上に書いてあった。「明日から禁煙」だから眠る前に名残のタバコを喫う。朝、目が覚めると、「明日から禁煙」だから今日はまだ喫える。私は、近頃これだけタバコ喫みが迫害される時代になっても、タバコをやめられないでいる。

デモに明け暮れる毎日だった

恵迪寮前の筆者

昭和五十年春、憧れの恵迪寮に

千原　治（昭和50年入寮）

一　自己紹介

まずは自己紹介から始めます。「剣聖宮本武蔵を生みし里山陽道は美作の国宮本村生まれ岡山県立津山高等学校出身北海道大学教養学部文類一年目千原治」この言葉をいったい何度口にしたことでしょう。入寮したての頃、先輩諸兄の音吐朗々たる自己紹介に感激し、自分自身もかっこよくやりたいと思っているうちに、出身高校だけではなく出身地まで加えた自己紹介をやるようになっていました。ちなみに、私の母校讃甘（さのも）小学校の校歌には、郷土の偉人宮本武蔵の名前が歌詞の中に登場します。在寮中もよく歌ったので、覚えておられる同輩の方々もいらっしゃるのではないでしょうか。大学では応援団に所属し、第六十七代の副団長を務めさせていただきました。卒業後は道立高等学校の教員として道内各地の高校に勤め、現在は小樽潮陵高校に勤務しております。

さて、「雑誌『恵迪』に何か書きなさい」という先輩からの至上命令に、反射的に「承知しました」と返事をして以来、何を書こうかとの思案の日々でした。昔の段ボールの箱をひっくり返して資料を漁っていたところ、大学入学前後に手にした物をしまっておいたのが出てきました。恵迪に入ってから現在まで大小あわせて約十回の引越しをした私ですが、そのドサクサの中でも捨てられないで生き延びてきたモノ達への思いを籠めて一文もものしたいと存じます。

二　合格通知書在中

昭和五十年三月十八日付で「合格通知書在中」の朱書きが入った北海道大学の封筒がわが家に配達されました。宛名書きは今ならタックシールでしょうが、当時は当然手書きです。この封筒をどれだけ待ちわびたことでしょう。私の場合一年間待ちました。

封入物のメインはなんといってもB4版の「合格通知書」です。左頁に大学の印の入った合格を通知する文、右頁に「入学の手続」に関しての注意書きが書かれています。入学式に関する記述がありません。聞くところによりますと、北大では大学紛争の影響で、昭和四十四年から入学式が行われていなかったそうです。私たちが入学した昭和五十年がその最後の年となり、翌年から厚生年金会館で行われたのを記憶しております。ということで、私たちは教養部前に並んで手続をしました。「入学の手続」の注意書きとして、「四月十日（木）午前九時三十分から十時三十分までの間に戸籍抄本・学籍カード・誓約書・学生調書……を持参の上、北海道大学教養部に出頭し入学の手続をすること。と書かれています。「出頭」という大時代的な言葉が使われていますが、本人がその場に行くという意味においては妥当な言葉かと思います。しかし、現在では決して使わない言葉でしょう。なんだかお上から見下されているようで嫌悪感を覚える人も多いのだと思います。私などは、自分がたいした人間だとは思っていないので何とも思わないのですが、感じ方は人によって様々です。

いつもらったのか覚えていないのですが、入学料と前期分授業料の領収書を保存していました。入学料は五万円です。募集要項には一万二千円とあったのですが、受験票とともに送られてきた改訂文書により五万円となりました。非常に驚いたので今でも覚えています。授業料は年間三万六千円です。翌年の入学者からは大幅にアップされたはずです。ちなみに、平成十八年入学者の入学金は二十八万二千円、授業料は五十三万五千八百円ですので正に隔世の感がします。今ちょうど私たちは大学生の親の世代です。子女を国立大学に行かせてもこれだけの学費がかかるということは、私たちの収入からしてみると大変なことです。家計における教育費の比率はますます大きくなっていると思います。かつては、

「家が貧乏だから国立大学に行ってくれると助かる」という親達の言葉をよく聞きました。でもよく考えてみると、それも比較の問題で、私立大学に比べていくらか少ないというほどのものであり、貧乏だった私の親にとってみれば大金だったと思います。それでも旧制実業学校や高等小学校を出ただけの両親は、息子が大学生ということで苦しい毎日の生活の中から切り詰めて毎月の仕送りをしてくれました。両親に感謝です。自分が親になって初めて親のありがたみがわかりました。同時に、自分が親であることに誇らしさも感じます。親は子どものために苦労するものです。最近は、勝手な理由を付けて親になりたがらない若者が増えています。由々しきことです。少子化という問題は日本という国家の根底を揺るがす大問題です。ということは私たち日本人の生活に関わる問題です。親になるということ、子どもを育てるということの素晴らしさを、日本人の共通の価値観としてもう一度根付かせたいものです。妻や恋人の「妊娠」に「やべっ」と思うようではだめです。幸い私は教育の場に身をおいておりますので、学校でできることから手を付けていきたいと思っています。

次に、学医や学生部厚生課からの、「心身の健康」や住居に関する文書がいくつか入っていました。親元を離れて生活する者が多いということは、大学としては学生の生活や健康に気を配る必要があるのでしょう。新入生の住居希望についてのアンケートの提出を求めるとともに、下宿紹介を行うことや学寮（恵迪寮・女子寮）希望者の手続の仕方について触れられています。恵迪寮の概況として次のように説明しています。木造二階建、収容定員三一八名、寄宿料（国庫納入）百円、食費（三食付）一万円程度。参考までに、入学手続の日にもらった学生部の新聞「えるむ」にも、学寮掛の仕事として学生寮のことをあれこれ説明しています。その中に次のような一文がありました。「なお、学寮掛といっても、事務職員の他、炊事のおばさんや暖房のおじさん達もいて、寮生のため働いています」

次に、授業料免除や奨学金についてのお知らせが入っていました。これらは高校においても合格者に送るものの中に入れています。当然のものだと思います。

最後に、学長名で「学生後援会」「学生保健組合」「クラーク記念会」への寄付や加入を求める文書が入っていました。私の手元に送金用の振替用紙が全部残っているということはそれらをすべて黙殺したのでしょう。結果的には、学生時代にはほとんど関係なかったものと思います。ただ、応援団で活動していたので「学生後援会」からはいくらかの援助があったのかもしれません。私自身は物事を損得だけで判断するという考え方にはあまり関与したくないので、送金しなくて良かったなどとは思っていません。ただ、合格の喜びのなかでいくつもの送金を求められたことは愉快ではありませんでした。今、私は高校の教員として同じようなことをやっているのではありますが……

三　その他の送付物

大学当局以外からは、「教養部学生自治会執行委員会」「新入生歓迎全学実行委員会」「北海道大学体育会」からの送付物がありました。今なら、個人情報の保護の観点から合格者の住所氏名はそれらの団体には知らせていないのではないかと思われます。当時もまったくフリーだったわけではなく、一部の許されたところにだけ提供していたのではないでしょうか。体育会については、入学後に入会し二年目からは本部役員を務めることになりました。また、自治会関係は今となっては懐かしい学生運動のチラシも入っていて、その勧誘資料やチラシに書かれた内容を詳細に検討すると面白い発見があるかもしれません。

さて、肝心の恵迪寮からの送付物が見当たりません。今こうやって雑誌「恵迪」の原稿を書いているということは、間違いなく届けられているのですが、手元に残さなかったのでしょう。恵迪寮関係で印象深いことがありましたので、それを書いておきます。それは、「入寮銓衡委員会」という漢字です。「銓」「衡」は、はかりの分銅とさおで、人物・才能などをはかって適任者を選ぶという意味です。「選考」などよりずっと由緒正しい言葉です。てゆうか（なんでここに若者言葉が出てくるの？）、そもそも選考は銓衡の代用字なのです。戦後こういうことがいくつも行われました。輿論→世論、障碍（障礙）→障害、濫読→乱読などがそうです。余談ですが、札幌市は障害の「害」の字のイメージが良くないということで、広報などには「障がい」と

表記しています。私はこれにはなじめません。それならいっそのこと元に戻して「障碍」とすべきです。そうすると常用漢字の問題が生じます。常用漢字はひとつの指標として、その存在価値は認めますが、あまりこれに拘泥しないほうがいいと思います。豊饒な日本語や漢字の世界を制限すること自体に無理があります。漢字については、そもそも字体そのものが一つに限ったものではないので、細かいことにとやかく言わないほうがいいのですが、難しいからという理由で書き換えるという作業はやらないほうがいいと思います。子どもにも難しいという理由で教えないよりも、どんどん難しいことをやらせたほうがいいのです。江戸時代の武士の子どもたちは幼少の頃から漢文の素読を徹底的に叩き込まれ、漢文を白文で読み書きできるようになりました。内村鑑三や新渡戸稲造は明治の人ですが、漢文の素養を基礎にして英文で己の思想を表現しました。このようなことを当時の私が考えていた訳ではありません。でも、恵迪寮が「銓衡」という漢字を使っていたことに寮生のプライドを感じ、今もなお強く印象に残っているのではないかと思います。

四　学長式辞

前にも書いたとおり、入学手続日は四月十日でした。この日に、丹羽貴知蔵学長による「北海道大学に入学された新入生諸君へ」と題する小冊子をいただいております。学長はこの後すぐに今村成和学長に代わられ、私の在学中はずっと今村学長でした。本来ならば、入学式に「学長式辞」として述べられるべきものを印刷して配布したものだろうと推測します。新入生に対して、大学の目的から説き起こし、現代社会と大学の役割、国際的視野の拡大への努力の必要性等を格調高く述べた後、最後に北大の伝統に筆が及んでいます。内村鑑三の「クラーク博士の言葉とエマーソンの『汝の車を星につなげ』が同精神であり、高い目的を持つことが人生を最も有意義に用ゐる所以である」という言葉を引用し、「諸君は、本学建学の精神と伝統を現代に即して創造的に継承し、よりよき伝統の創造に参加されんことを希望するものであります。」と結ばれています。

このことは、今こそますます求められていることです。若者が夢を失いかけています。老成してしまった若者が多くなっています。若者は「夢・希望・理想・目標・志」を熱く語る特権を持っています。その特権を放棄してしまった若者がなんと多いことでしょう。でも、そんな者ばかりではありません。志を高く持った若者も確実にいます。私たちには彼らを勇気づける役割があります。夢を失った者には再び夢見ることの幸せを伝えることもできます。失望してはいけません。人類の歴史は次世代の者を育ててきた歴史です。その営みは今後も営々と続けられていくべきものでしょう。私たちは恵迪寮という何にも替えがたい場を過した者として、自分たちの幸せを次の世代につなげていくことができます。私たちの目の前に恵迪寮という場がなくても、何らかの形で若者に伝えていくことができます。そういう意味では、教員である私は最高の場を与えられていると思います。教職という職業を選んだものとして、己の使命を全うすることを改めて決意する次第です。

五　恵迪遺産

この寄稿のテーマは「恵迪遺産」です。今まで書いていたことはこのテーマから明らかに外れています。そこで、今まで書いてきたことを長い長い前置きにして、最後に少しだけ無理やりにそのことに触れて、「お後がよろしいようで」といきたいと思います。

私の来し方をつらつら考えてみますと、やはりターニングポイントは昭和五十年春でした。憧れの北海道大学に合格し恵迪寮に入寮したことが私の人生を変えたと言っても過言ではありません。今まで書いてきた前置きのようなことを経て恵迪寮生活に入ります。その二年間で、私の中に確実に「恵迪」が蓄積されました。友・寮歌・北海道・発想・感性・思考・思い出・遊び・酒・勉強・旅などなど、数え上げたらきりがありません。それらが現在の私の中で大きな部分を占めております。それらがすべて良かったことだとは思いません。過ちはたくさんありました。私はそれらの中から良いものを抽出して、或いは良くないものも良くないと意識して、仕事や家庭生活を通して、望ましい形で発揮できたらいいなあと思っています。自分の経験を無反省に出発点にしたり、偏った価値観として人に押し付けたりすることは極力避けなければなりません。その覚悟を持って生活していくことが、「恵迪遺産」を世の中に生かしていくことだろうと考えます。

高井宗宏副代表幹事が道新に登場

恵迪寮同窓会の高井宗宏副代表幹事（昭和三十一年入寮）が十七年十月七日の北海道新聞夕刊札幌圏版の「懐かしアルバム」に写真付きで紹介された。

この記事は十月の第一金曜日から始まり、毎週金曜日夕刊に掲載される続き物で、高井さんはその第一号として登場した。思い出の集合写真に、当時のエピソードを添えて投稿してもらう欄。

高井さんは「北大恵迪寮の観桜会」（一九五七年五月）というタイトルで、円山公園で花見を楽しむ恵迪寮の伝統行事「観桜会」の一こまを紹介している。「酒で温まり天下国家語る」という横見出しがつけられ、花見の席で記念撮影する寮生たちの集合写真が載っている。その前列中央奥に高井さんが写っており、現在の高井さんのポーズ写真も別に入っている。

高井さんは寄せた文の中で「寮生だった私も、はかまや学ラン姿でげたを打ち鳴らし、大声で寮歌をがなりたてながら、寮から北海道神宮まで歩いたものです」と記している。そして、当時は寮のおばさんが作ってくれたカレーライスと、大量の酒をリヤカーで運んだこと、当時は清酒は高級品で、もっぱら合成酒だったこと、さらに酒で体を温めながら夜まで天下国家を語りあったことなどを書いている。

高井さんはこの記事について「始まりは連載物の企画案作りに協力したに過ぎないが、これの記者も恵迪ＯＢのためか図らずも掲載第一号になった。これを電子メールで仲間に送ったところ、カメラマンは栗田信君（東京在住）だと分り、以降同期生の交流が増加して、今秋九月に入寮五十周年祝賀会を開催する迄に発展した」と語っている。

北大恵迪寮の観桜会
酒で温まり天下国家語る
懐かしアルバム
高井　宗宏さん(68)
—北区在住

17年10月7日付の道新夕刊

北大総合博物館がリニューアルオープン

北大構内の旧理学部本館に開館していた北海道大学総合博物館が平成十七年十一月三日から展示室を増やし、リニューアルオープンした。展示内容も充実され、連日観光客や道民が見学に訪れ、興味深そうに見入っている。

この博物館は北大がこれまでの研究、開発の成果を学内に閉じ込めておくだけでなく、広く一般に展示・公開し、地域に根ざした大学とすることなどを目的にオープンした。

これまでは一階と三階だけを使い、学術資料などを展示してきたが、二階は主に資料の収蔵庫として利用。一般外来者は入室できなかった。今回はこの二階部分も開放。ミュージアムショップも設けられた。

正門から入り、まず一階へ。ここには一八七六年から二〇〇一年までの「北大百二十五年の歩み」と題した展示がある。前期札幌農学校時代から始まり、一八七七年の「クラーク離札」という大きな写真があり、馬にまたがったクラーク博士や外人教師の姿がセピア色ながらはっきりと写っている。また、一九一二年の「予科桜星会の定山渓雪中行軍」という珍しい写真もあり、北大の歴史や研究成果が一目でわかる展示となっている。

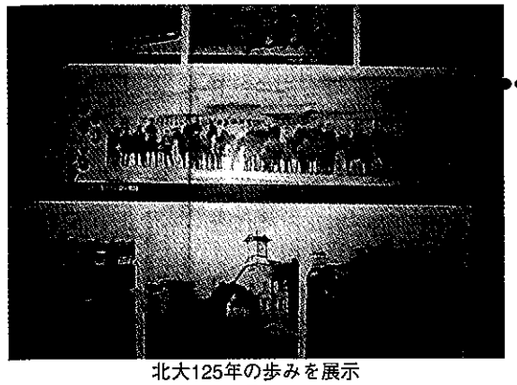
二階が今回新設された展示室。「オホーツク人について」という研究や「魚類の新発見エピソード」というタイトルの面白い話や古い土器、人骨など学術的に貴重な一級の資料がズラリ。

また、ミュージアムショップが新設され、北大マーク入りのバッグやネクタイなどが並び、観光客らが記念にと買い求める姿も見られた。

三階に上がると、まず目につくのが「デスモスティルス・ヘスペルス」や「ニッポノサウルス・サハリネンシス」などの恐竜の大型化石標本。あまりの大きさに見学者もびっくり。また、先カンブリア代から古生代、中世代、新生代に至るまでの貝類などの大小さまざまな化石も並べられているほか、大きな鉛、亜鉛鉱石なども展示されており、説明してくれた係りの女性によると、三階だけで六百点を超す貴重な学術資料が並んでいる。

これらはすべて無料で見られ、展示・公開時間は午前十時から午後四時まで。ただし、月曜日は原則閉館となっているほか、大学行事などで臨時休館の場合もあるため、見学前に同博物館Ⓣ〇一一・七〇六・二六五八で確かめて行ったほうがよさそう。

北大総合博物館


北大125年の歩みを展示

2階に新設されたミュージアムショップ

デスモスチルスの大型化石標本

整然とした陳列室

自治の意義

学生自らの存在を問い直そう

山本　圭介
（平成14年入寮）
（法学部4年）

〈はじめに〉

私は二〇〇二年に入寮して以来四年間、寮自治活動の一端を担う中で、寮自治とは何か、大学とは何か、といったことについて拙いながら考えてきました。

現在の恵迪寮内での議論では、寮自治の意義について考えるとき、「教育的意義」と「厚生的意義」の二つの側面の分析を通して組み立てていくやり方が主流です。

私個人の理解でいえば「教育的意義」とは共同生活の中で培われる自主自律の精神。「厚生的意義」は憲法や教育基本法の理念、「教育の機会均等」を具現化するためのもの。どちらも学寮になくてはならないものである！と考えています。

さらに、これらのことは大学全体について広げても言えるんじゃないか。大学はただの教育サービス機関ではなく、学生が主体的に考え、さまざまな人と交流することを通じて民主的、人間的な成長を獲得できる場であり、そしてそれはすべての人に開かれた場であるべきだ、などと私なりの理想論をぶち上げてみたりしていました。

しかし現実は厳しい。（私にとっては）悪化する一方、大学はどんどん息苦しくなっているように思います。

今の大学の姿は戦後数十年の積み重ねの結果であるにしても、二〇〇四年の国立大学法人化が大きな転換点となったことは間違いないと思います。

確かに、今までの国立大学のありようが正しかったとは思いません。しかし、大学自治の理想も放り投げ、さも「法人化すれば万事問題解決」とばかりに十分な議論なしに推し進められた「大学改革」のやり方には、賛成することはできません。

〈大学の現状〜学生の視点から〉

前置きが長くなりましたが、それでは実際どのような変化があったのでしょうか。

まず、大学祭、サークル、新歓といった学生の自主的活動に対する規制が強化され始めました。たとえば学生のサークル情宣・意思表明の手段として活用されてきたビラ配布、立看設置に対する締め付け。主に美観・清掃の問題や学内改修問題が発端なのですが、なかにはレッドパージ当時に作られた「内規」を根拠に全面許可制を主張しているような大学もあるくらいです。

北大においても二〇〇五年、飲酒問題を口実に当局が北大祭に介入、開催中止をもちらつかせ、まともな学内議論もないまま飲酒の全面禁止要求を押し通しました。サークルのビラ配布についても自粛を要請するなど、態度の硬化が目立ちます。

この規制強化の動きは個々の大学独自の動

きというよりは全国の大学を貫いての大きな流れとして捉えるべきだと思います。

それでは、学寮政策についてはどうなったのでしょうか。

旧寮・新寮・新々寮と学寮政策の変遷をたどると、根底に寮生の個人分断化―共同性剥奪、つまり共同生活の中で培われる「教育的意義」の否定がありました。

そして今、各大学で検討が始まっている寮の形態は、「PFI型新寮」といわれるものです。

PFI（Private Finance Initiative）は公共施設の民間委託であり、すなわち学寮を企業に「経営」させるということです。なんと、私物は持ち込まないことが原則で、布団・シーツから家電製品、ありとあらゆるものがレンタル制になります。そして企業の独立採算の事業として運営するのだそうです。寮生活の二十四時間すべてが企業の食い物になっていくことになります。これは、「厚生的意義」の否定にほかなりません。

ただし、まだすべての大学で採用されたわけではなく、ほかにも新寮規格から新々寮規格への「改修」（複数部屋から個室への改造）などのパターンなどもあります。

これから建築から三十年以上経過した新寮規格寮の建て替えラッシュの時期になります。恵迪寮についてはまだ十年程度後の話だとしても各大学の動向は注意深く観察する必要があると思います。

〈終わりに〉

学生は大学を創っていく構成員ではなく、授業料を払うかわりに教育サービスを受けるだけの存在に貶められているように感じます。加えて学内のさまざまな議論に参加していく回路もないから、学生側の意識もますます低下する一方です。

恵迪だよ！全員集合！

このような環境で「北海道大学の基本理念と長期目標」で謳う「自由・自主独立の精神の涵養と自律的個の確立」が図れるとでも言うのでしょうか、とぼやいてみたくもなります。

もちろん文句を言うだけではなく、学生自身が自らの存在を問い直し、大学をよりよいものとして再生させる努力が何より大切なことであることは明らかです。

私自身も、恵迪寮の生活から学んだものを引っさげて、北大生としてやるべきことをやっていきたい、と思います。

現在の恵迪寮

恵迪は今　現寮生の目から

寮行事の現状

よく知られる雪中ジャンプ大会

藤本　泰裕
（平成15年入寮
獣医学部4年）

このたびは雑誌「恵迪」の発行おめでとうございます。

僕は現在入寮三年目で、第二八五期文化活動常任委員会（以下文常）という委員会で委員長をやらせてもらっている。この文常という委員会は簡単に言うと寮におけるイベント屋さんみたいなものだ。たぶんそれだけが理由であろうが、いきなり「寮行事について何か文章を書いとくれ」と頼まれた。「はて何を書いたらよいのやら？」と困ったものの、NOと言えない日本人だからなのか、優しいからなのか、かわいい一年目からの頼みだったからなのかついつい快く引き受けてしまったのだ。そして今日締切日当日、慌てて原稿を書き始めているのだ。とほほ。

さて本題の寮行事についてであるが、この雑誌は寮OB向けに出されるものということらしいので、伝統行事のことを中心に書いていきたい。伝統行事を思いつくままにあげてみると観桜会、観楓会、仮装パレード、ジャンプ大会などがある。それぞれについて近頃の行事の様子などを述べていきたいと思う。

まずは観桜会。この行事は四～五月の新入寮生歓迎期に行われる新歓行事の中のひとつとなっている。内容はというと、寮生の正装（学ラン＋赤フン）で応援団を先頭として札幌市内を寮歌を歌いながら練り歩くといったものである。途中で大通り公園の噴水の中でストームがあったり、応援団による檄文なんかもあったりする。そして最終的に円山公園でジンギスカンパーティーを行う。僕は実際にこの観桜会には参加したことがない。一年目の頃は天気もよく絶好の観桜会日和だったが用事で参加できず、二年目、三年目のときは応援団に本物の雨男がいたため雨天中止となってしまった。残念。多くの一年目にとっては赤フンで街に出る初めての企画となり、ある意味一線を越えるきっかけになったりならなかったり…うーんわけわからん。とにかく来年こそは僕もぜひとも参加してみたいものだ。

それでは次に観楓会について述べていきたい。この行事は最近では寮祭前の十月中旬ごろに行われる。夜十二時に寮を出発して、高下駄を履きながら定山渓温泉まで歩いていくのだ。この行事は数ある寮行事の中でももっとも参加者にお金を使わせるものであると思われる。まず、出発前に共用棟に集まった参加者のうち一年目はほとんどの者が高下駄を持っていないのだ。寮務部の人間はここぞとばかりに不良債権気味の高下駄を売りつけようとする。ここで素直に高下駄を買わないのが寮生である。高下駄を賭けてじゃんけんをするのである。このじゃんけんのことを通称「高下駄ジャン」と呼び、観楓会では恒例となっている。高下駄ジャンが起こると共用棟はにわかに活気づく。ところが何人かはショボ

ーンとしている。こいつらは負け犬だ。中には一つ六千円の高下駄を十個近く買うハメになり、夏休みに稼いだバイト代の大半が消えてしまった者もいた。ごしゅーしょーさまです。高下駄を手に入れたら気を取り直して出発である。何人かで一グループとなって歩くのだが、途中コンビニを見つけてはまた一品何かを賭けてじゃんけんをする「一品ジャン」をして盛り上がる。中にはコンビニの一品以外の物を賭けてじゃんけんするグループもある。例えば、米の自動販売機だったり吉野家だったりゴルフ打ちっぱなしだったり…その中でも際立って面白いのがコイン洗車である。負けた者は全裸になり、ホースで水をガンガンかけられるのである。普段臭い臭いと言われがちな寮生もこれで少しはマシになるのではないだろうか。そんなこんなで歩き続けていると、夜も明け始めてくる。この頃にはちょうど定山渓付近まで来ており、見事な紅葉が周りに広がっていることに気づかされる。まさに心が洗われるような気分になる…と言いたいところだが、疲れ、眠気、喰いすぎなどによりそれどころでない者も多いようだ。そして目的地の定山渓温泉に到着した者は温泉に入って疲れを癒すのである。このときの温泉といったら格別である。冷えきった体を温めてくれ、ついでにリウマチやら更年期障害までも治してくれる勢いである。とにかく参加者の皆さん、三十km、十時間の歩行お疲れ様でした。と思ったらこんな行事の日に限って、代議員会があったりするのだ。はぁ…

観楓会が終わると、いよいよ恵迪寮祭が始まる。寮祭期の約二週間は毎日どこかの部屋が企画を催し、一年を通して寮がもっとも盛り上がる時期である。この寮祭企画の中にも伝統行事がある。それが仮装パレードである。仮装パレードは仮装といっても基本的に学ラン＋赤フンで札幌市内を練り歩くというもので、観桜会と少し似ている。この仮装パレードは寮祭の情宣も兼ねており、それぞれがパンフやらを札幌市民に配ったりする。ストームもこれでもかというほどやる。クラーク像前、札幌駅前交差点、赤レンガ前、狸小路などなど。その中でもやはり大通り公園の噴水内でのストームがもっともストームらしい。皆が水の中で子供のようにはしゃぎまわるのである。シャンプーで頭を洗う者もいる。とにかく何でもアリだ。そして仮装パレードのラストを飾るのが応援団による檄文である。テレビ塔前には寮生だけでなく、物珍しさに多くの市民が集まる。檄文はユーモア溢れるもので、その場は笑いに満ち、大いに盛り上がる。おまわりさんもなんか怒っていた。りゅ～りゅ～。

次の伝統行事はというと、毎年冬に行われるジャンプ大会である。このジャンプ大会、昔は三、四階あたりから飛び降りるのが当たり前であったようだが、けが人が続出するため、最近では雪を二階の窓付近まで積み、その窓から１ｍほどチョコンと飛び降りるだけとなっている。要するに現在のジャンプ大会は雪の上でやる芸大会みたいなものだ。ちなみにこのジャンプ大会はもっとも世間に知られている寮行事だといっても過言ではない。実際街の人に「恵迪寮といえば？」と聞けばほとんどの人が「ジャンプ大会」と答えるのではないだろうか。何年か前にはＮＨＫが取材に来たというほどである。真冬に外で芸大会なんて物好きかと思われるかもしれないが、実際多くの寮生は物好きだから仕方ない。笑っていると寒さも忘れてしまうものなのだ。

ここまで恵迪寮の伝統行事について書いてきたが、ＯＢの方々にとっては当時とは行事の形が全然違っていると感じるかもしれない。これは決して昔の行事が今より面白くなかったというわけではなく、よい部分は後に伝えていき、よくできるところは変えてきた結果なのだと思う。このようにして伝統行事は時代の流れとともに魅力を増し、現在でも愛され続けているのではないだろうか。

寮歌に思う

作られた時代の世相をよく反映

堀江　峻太
（平成13年入寮　工学部卒業）

恵迪寮は今年度（平成十七年度）で開舎一〇〇周年を迎えた。その今もなお、明治四十年度から作られつづけている寮歌は脈々と受け継がれている。酒を飲んだ時、行事の時、別れの時等々、様々な場面で寮歌は歌われている。一〇〇年という長い歳月を経て、多少形は変われども伝わっているというのは、驚くべきことだし、誇るべきことであると思う。

四月、毎年一〇〇人程度の新入生が恵迪寮に入寮する。その時、まず始めに行われるのが、寮内でも無類の寮歌好きが集まった「寮歌普及委員会」による寮歌指導である。寮の共用棟に新入寮生が集められ、北大で一番えらいという寮歌普及委員長のリードで、一時間あまり寮歌を歌いつづける。何も知らない新入生は、新品の寮歌集をかぶりつくように見ながら、先輩に言われるがままに声を出す。最後に都ぞ弥生を歌ってその日の指導は終了。このような寮歌指導は、普段は週一回、新歓期は一週間ほど毎日行われる。始めは好きも嫌いもない。半ば強制的に歌わされ、普通だったらいやになってもおかしくないはず。ところが、歌わされていたのが、いつのまにか自ら覚え歌うようになり、半年も経つと寮歌のよさを語りだす奴まで出てくる。これは一体なんなのだろうか。

現在寮歌は一〇〇曲以上あるが、どんな年代の寮歌でも共通して北海道の美しい自然や寮生活の思いが歌いこまれている。現寮生に「一番好きな寮歌は？」とたずね、その理由を聞くと、ほとんどの人の理由が何らかの自分の体験に関連している。支笏湖に旅行に行ったときに満天の星空のもと歌った「湖に星の散るなり」だったり、朝方まで飲んでいてだんだん白んでくる空を見ながら歌った「郭公の声に」だったり、仲の良かった先輩の追いコンで歌った「別離の歌」だったり…。このように、寮歌が思い出に色をつけているのである。これは、寮歌に歌われている情景が現在の寮生の心にも十分新鮮なものであるからだろう。今は原生林で郭公は鳴かないし、津軽海峡も飛行機で一瞬である。ただ、今でも北大構内の緑は美しく心休まるし、遠く北海道の地に大志を抱いてやってくる気持ちは変わらない。その点で、寮歌というものを通してその当時の寮生と現在の寮生が通じ合い、寮歌を好きになっていくのだろう。

また、寮歌はその作られた時代の世相を多く反映している。時代時代で毛色の違う曲が何曲もあるというところが、寮歌の魅力のひとつだろう。歌っていて飽きることがない。現在寮には一〇〇曲もの寮歌を収録した「全曲寮歌ＣＤ」なるものがあり、寮歌集を見ながら一通り聞いてみて、自分なりに分析してみると、なかなか楽しいものだ。戦後は暗い曲が続いたり、安保の時代は歌詞も曲も独特のものが多かったり、フォークソングのブー

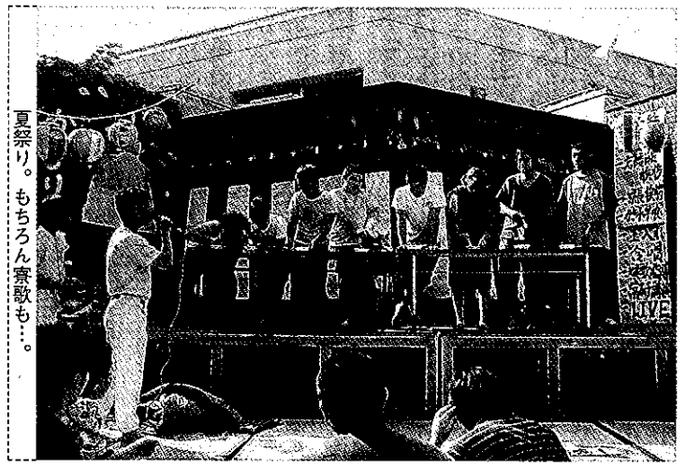
ムの時にはギターのコードつきの寮歌が生まれたり。ちなみに今はどんな曲が作られているのかというと、まさに多種多様である。一から十まで酒のことしか歌っていない曲あり、太鼓を鳴らしつづけて歌う曲あり、振り付け(?)のある曲あり…。ここ何年かの寮歌を連ねてみても、個性的な曲だらけ。没個性といわれる世の中で、これだけ個性の強い曲が生みだされる恵迪寮は、まだまだ安泰だなという気がする。

そして、寮歌は多くの人と大声で歌うというのも魅力のひとつである。日常でそんな場面はめったにない。カラオケだって所詮は一人で歌うものである。合唱はきれいさを要求される。自分たちの歌を、同じ寮で過ごす仲間とともに怒鳴るように歌う。肩を組んでもいいし、音程も(あんまり)気にする必要はない。気分爽快である。

他にも寮歌の良さは無数にあるし、しかもそれは人それぞれである。しかし、どんな理由であれ、寮歌は歌えば歌うほど好きになっていくのは事実のようである。誰かに言われたからというわけではない。自分で歌っていくうちにいつのまにかその魅力にはまっていく。なぜかといわれると難しいが、とにかく好きだ。それが寮歌だとおもうわけである。

ただ、最近寮歌が「神格化」されている気がする。寮歌を歌うのにルールなどないはずなのに、漠然と「寮歌はこうでなくてはならない」というのが頭の中にあるようで、それが寮歌から自由を奪っている気がする。今は①寮歌が始まったらそこにいる人間は立ち上がって歌わなければならない。②曲によって音頭のとり方がきっちり決まっている。③替え歌はしない。等等、暗黙のルールがある。昔は(これは想像だが)酒を飲んで、気分が高まって、誰ともなく寮歌を歌い始め、そしていつのまにかみんなで歌っているというスタイルだったはずだ。最近は、寮歌というものが特別視されるあまり、時代から取り残されていっている気がしてならない。そんな暗黙の「縛り」があるせいか、実際寮歌を歌う場面が少なくなってきた気がする。

寮歌は生き物であると思う。時代によって歌われる曲も違うし、同じ曲でも歌い方も感じ方も違うことは良くある。同じ時代であっても、人によって寮歌に対する考え方は様々だ。寮歌はその時代、そして歌う人間に合わせて変化、進化していくものだ。むしろ一〇〇年も歌われつづけている曲が何の変化もなかったらそれはそれで不自然な気がする。その生き物である寮歌を縛ってしまったら、おそらく寮歌は死んでしまうのではないかと思う。寮歌を自由に歌ってやれば、きっと寮歌はどんどん歌い継がれ、発展していくだろう。たとえそれが今の寮歌のスタイルとは全く違ったとしても、それはすばらしいことだし、誇るべきことであると思う。


夏祭り。もちろん寮歌も…。

恵迪は今　現寮生の目から

娯楽一考

最もポピュラーな『ナポレオン』

長山　一成
(平成15年入寮
理学部4年)

現在、世の中には様々な娯楽があふれている。恵迪寮も例外ではなく、娯楽で満ち溢れている。寮の中ではゲームやナポレオン、漫画や麻雀などが主流であろう。また、居部屋でギターを弾いたり共用棟でピアノを弾いたりもする。自分の部屋で好きな音楽を聞くものもいれば、部屋員と馬鹿騒ぎもする。また、外に出れば飯を食いに行くことはもちろん、カラオケやボウリング、時には日本全国各地に旅行にも行く。ごくたまにではあるが、スポーツなどもする。それは野球であったりサッカーであったり、雪国ならではのスキーやスノーボードであったりといろいろである。また、夜のすすきのを練り歩くのも好きである。このように普段の生活を見れば、他の一般社会のものと比べても、程度の差はあれそこまで時代錯誤な人生の楽しみ方はしていないのである。

ところで、先に挙げた中で「ナポレオン」であるが、現在の恵迪寮においておそらく最もポピュラーな娯楽の一つといえるものである。みなさんはこの「ナポレオン」についてはご存じであろうか。おそらく、知らないと答える人もいると思うので簡単に説明したい。「ナポレオン」とは、トランプのジョーカーを抜いた五十二枚を用意し、五人で行うゲームである。五人がナポレオン軍二人と連合軍三人に分かれて戦いポイントを取りあい、最終的に一番ポイントが少ないものが負け、みんなにごっつあんするといった感じである。結構複雑なルールではじめ覚えるのに苦労をするが、慣れてしまえば天下の北大生の頭脳の見せ所である。夜な夜な「ナポレオン」に一喜一憂する声が、寮のどこかで聞けるはずである。

話が逸れたが、つまりは日常生活における娯楽は他の大学生とそれほど変わらない。では恵迪寮ならではの娯楽とは。それは様々な伝統行事や企画などであろう。ジャンプ大会や全寮コンパ、さらには寮歌祭や寮祭などである。これらは日常生活に刺激と生きがいを与えてくれる。まさに娯楽の中の娯楽といえよう。おそらく、恵迪寮ほどこのような刺激と生きがいを求め、かつ周りにあふれている環境というのもないであろう。その環境の極みといえるのがワンダーである。ワンダーとはワンダーランドから来たとも、「さまようもの」という意味の英語から来たとも言われ、恵迪寮自治会の執行委員会の辛い任期を終えた後、考えうる限りの娯楽を行う場所または期間のことである。それこそ、朝から朝まで麻雀やゲーム、ナポレオンの音が途切れることはなく共用棟に鳴り響き、その合間を縫ってすすきのに飲みに行ったり旅行に行ったりとやりたい放題である。まさしくこの世の極楽である。

つまるところの恵迪寮の娯楽とは。それは

寮自治会の活動

執行委員会は『エンジン部分』

渕野　信也
（平成14年入寮　農学部卒業）

日常生活における非日常性である。我々恵迪寮生が求めている娯楽というのは、日常とは違うことをすることによって得られる刺激や生きがいといったものであろう。もちろん、初めに挙げたようなものが寮生にとっての娯楽ということは間違いない。しかし恵迪寮ならではの娯楽、他の世間一般のものとは一味も二味も違うこの娯楽こそが、恵迪寮として誇れるものなのであろう。

現在、恵迪寮は昔と変わらず自治を貫いています。と、いいましても自治会という組織をどのように運用しているか、という部分はきっと昔と違うだろうと考えます。従ってここでは、現在の自治会がどのような組織で運用されているのかについて述べていきます。

まず、組織の話に入る前に、現在の恵迪寮自治会の構成員について軽く触れたいと思います。現在の恵迪寮は雪の結晶の形に六つの棟から構成されており、そのうち五つの棟に学部生（専門含む、四九〇名、うち女子九〇名含む）、一つの棟に院生・留学生（一〇〇名弱）が住んでいます。そして現在、恵迪寮自治会は学部生だけで結成されており、院生の住む棟（F棟）は自治会に含まれていません。学部生の、更に教養生だけで構成されていた旧恵迪寮出身の方々にとっては、「四年生もいる」「非自治会員が寮内にいる」ということに、大きな違いを感じることと思います。

そうした構成員を前提とした上で、恵迪寮自治会の各組織について述べていきます。現在、恵迪寮には、執行委員会、文化活動常任委員会、入寮銓衡委員会、飲酒事故防止対策特別委員会、防災特別委員会、監査委員会、議長団、士幌小屋チセフレップ運営特別委員会などの各組織で運用されています。全部の組織に触れてしまっては分量が大変なものになってしまいますから、以下、昔からあったと聞きます執行委員会、文化活動常任委員会、そして入寮銓衡委員会について、現在どんな活動を行っているかを詳しく触れていこうと思います。

（執行委員会について）

執行委員会は基本的に寮内の全ての問題に対処する任を背負った委員会です。現在、執行委員会は炊務部、寮務部、会計部という三つの部局に分かれて日々の日常業務を行っています。

各部局について説明します。まず、炊務部は、パン屋さんと契約して毎朝パンを仕入れたり、アイスクリームを仕入れたり、毎週日曜に「スペシャル」と称する炊き出しを行うなど、食堂のない現恵迪寮の食生活を充実させるための各種活動を行っています。次に、寮務部は寮生活に必要な各種の雑務を引き受けています。具体的には寮に届いた荷物の把握や自治会物品（ガムテープや立て看板用のインクなど）の在庫補充、印刷機の管理などが挙げられます。最後に、会計部は全寮の寮費（八、〇〇〇円～九、〇〇〇円）と自治会費（一、〇〇〇円）を回収して、大学側に一括で支払うという業務を担っています。そして万が一滞納者が出た場合は何度もしつこく督促を行います。

以上が各部局の仕事ですが、当然その他にも「事務室番」「物品管理」「新聞対応」など、細かな日常業務があるため、それについては各執行委員が個別に任を負っています。

更に、執行委員会は毎晩夜十時に執行委員全員が集まり、「寄り合い」と称する会議を行っています。その日起こった寮内の問題や明日以降の業務の確認、そして全寮への議案の作成など、様々な議題について執行委員会内で夜な夜な議論を深めています。正に恵迪寮自治会のエンジン部分といえる存在です。

（文化活動常任委員会について）

文化活動常任委員会は全寮で行う行事を企画する「お祭り集団」です。具体的には、観楓会やジャンプ大会、新歓コンパや追いコンなどの伝統行事を、責任をもって企画します。更に、それだけにとどまらず、毎期それぞれ独自色を出した斬新な企画を打ち出すなど、クリエイティヴな活動を展開しています。

また、文化活動常任委員会の下部組織として、寮歌普及委員会、新聞会、スポーツ愛好会、メディア管理委員会、寮史編纂委員会、雑誌編集委員会、図書委員会という七つの小委員会が活動しています。寮歌普及委員会が毎週日曜日に寮歌指導を行ったり、新聞会が週に三回新聞を発行したりするなど、期によって勢いに違いこそありますが、それぞれ精力的な活動を行っています。

（入寮銓衡委員会について）

御存知の方も多いかと思われますが、現在の恵迪寮ではいわゆる完全な自主入銓という形の入寮銓衡は行っておりません。しかし、だからといって入寮銓衡に無関心でいるわけではなく、入寮銓衡委員会という組織が精力的に入寮銓衡にまつわる活動を行っています。

具体的には、「自治会作成のパンフレットを大学側作成のパンフレットに同封して受験生に送付する」「新千歳空港で受験生を出迎える」などの情宣活動を行ったり、大学受験の日に、メーンストリートに畳とコタツをおいて入寮相談所を設置したりするなど、主にソフト面から入寮銓衡に積極的に関わっています。また、入寮者を決定する際には毎回必ず大学側と自治会の間で協議の場を設けています。

更に、現在でも入寮銓衡のあり方について、大学側と自治会の間で話し合いの場が定期的にもたれています。昔のような自主入銓に戻ることは現在難しいかもしれませんが、より価値的な入寮銓衡を目指して頑張っています。

以上の他にも、現在さまざまな委員会が寮運営を各方面から支えています。旧恵迪寮にあったと聞く監査懲罰委員会といった組織は現在の恵迪寮にはありませんし、逆に、昔の恵迪寮にはなかった組織も現在数多く見受けられると思います。また、寮内の正式な委員会ではないけれど、毎年寮祭期に演劇を行っている恵迪座やカレー部、スモウ部など、色々な組織が恵迪寮の文化を継承するのに貢献しています。

昔と今では、組織の構造も違うだろうし、そしてもちろん今後も恵迪寮自治会という組織の形は段々と変わっていくのだろうと思います。けれど、「自分たちのことは自らの責任

のもとに、自分たちでおこなってゆく」という自治の精神性が失われない限り、恵迪寮はどこか変わらない部分を持ち続ける、土臭く人間味溢れる場であり続けることだろう、と僕は考えています。

恵迪は今　現寮生の目から

女子について

寮文化に新しい視点が…

甲斐　千尋
（平成14年入寮）
（法学部卒業）

恵迪寮に女子が住み始めたのは十一年前。北大内の女子比率が上がって、霜星寮だけでは北大内の女子を賄いきれなくなったのが始まりです。今では大体六十名強の女子寮生が恵迪寮には住んでいます。

よく、女子の住んでいるとことは禁断の花園的に思われますが、住み方は実は男子とあまり変わりありません。複数形態で住んだり、個室形態で住んだり、期によってその割合もまちまちです。ただ住むことのできる場所がA～C棟の三～五階内側（つまり九ブロックだけ）と限られています。この場所は、防犯的な安全を考えて、外から侵入しにくいように決められています。ブロック扉には男子と違い施錠ができるようになっています。

生活自体は、個人差があってバラバラです。積極的に寮に関わる人「例えば執行委員会をやったり」もいれば、部活にサークルにと大忙しであまり寮にいない人もいます。寮行事に関しても、男子と同じように出ます。芸もすれば食い極もします。お酒を飲んでつぶれる事だってあります。かわいい格好をするのは寮の外に出るときぐらいで、普段はつなぎやジャージを着ています。普通の女子大生と何が違うかというと、少したくましいことたくさん食べることぐらい。男子と違う点は？と聞かれると、居部屋や補食談話室等が男子の部屋より綺麗ということぐらいでしょうか。これすら、綺麗好きの男子ブロックには負けてしまうことだってあります（笑）。

生活自体は男子とあまり変わりがないということで、次は恵迪寮に女子が入ってからのことを文化的側面から書こうと思います。少しだけ女子入寮の経緯も混ぜながらお話しします。

女子入寮の話が持ち上がった当時、それはもう寮内ではものすごい反発があったようです。意見も割れに割れていたようです。昔の雑誌や部屋ノートを見ると、当時の反発の様子がよくわかります。今まで男だけで楽しく暮らしていたのに、女という異質なものが入ってくるというのですから、抵抗があるのも当然といえば当然でしょう。喧々諤々の議論の末、寮生全員で決を採る寮生大会で、女子入寮が決定しました。はじめは霜星寮から何人かが移り住むという形で、恵迪寮の男女混合寮としての歴史はスタートしました。

女子の受け入れ方について、今と昔ではやはり違いがあります。それでは、昔はどうだったのか。女子が入寮して最初の頃は、恵迪寮がこれまで作り上げてきた文化と女子をどう融合させるか、ということで非常にもめたそうです。その結果、当時は女子寮生の数も少ないということで、「女子寮生の恵迪女子寮生化」が進みました。つまり、女子寮生は単純な女ではなく、男子寮の文化をそのまま受け継ぐ「恵迪女子寮生」という位置づけをされたのです。今までの男文化はそのままというと、やはり女子にとっては卑猥なものやきついものもたくさんありました。ですが、初期の女子寮生はそういったものに全て立ち向かったのです。そんな中で女くさいことをするというのはなかなか難しいものです。例えば昔懐かし全裸ストーム。こういったものを見ても、「キャー！」なんて叫べません。だって、恵迪女子寮生ですから。男男した文化も受け入れなくちゃいけないのです。どんな極いことも、男子と同じように受け止めなくちゃいけない。そうやって、男女混合寮になったものの、恵迪寮は昔と変わらない文化を保持していくことになりました。

さて、年を経るごとに女子寮生の人数も次第に増えていきました。最初は十人程度だったのが、前述しましたが、今では六十人強になりました。時は流れ、もう男子寮時代を知る人はいません。そうなると、女子寮生の恵迪寮生化にも次第に無理が生じ始めます。数が増えればそれだけ、男文化に順応する人、そうでない人の分裂も進むし、人数が多ければ男子文化を回避する手段も出てきますので、ストレートに拒否反応を示す人もでてきます。住んでいる人も、男子寮時代を実際に体験したことのない人たちなのですから、昔のような受け入れというのも厳しくなってきます。では、恵迪寮はどうなっているのか。

最近感じるのが、文化が昔と変わってきたということです。女子はもうマイノリティではないのですから、女子的に感じたこともしっかりと主張することができます。現に今では、共用の場、もしくは女子が嫌がっているところでの全裸ストームは、ある時の女子寮生の訴え以後、暗黙の了解的に禁止になっています。企画にしたって、去年はなんとピアノコンサートというなんとも女子っぽい発想の上品系な企画もありましたし、昔は女子の部なんてなかった相撲大会でも、今は女子がバリバリ活躍しています。女的な芸や企画は年を経るごとに増えているように感じます。

恵迪寮の文化は変わりつつあります。それも悪い意味ではありません。目を伏せがちだった、女子寮生にも目が当たるようになり、本当の意味での男女混合寮が始まったと感じています。女子寮長が出てくるのも時間の問題でしょう。恵迪寮の文化に新しい女子の視点が入り、今、恵迪寮はどんどん進化しています。まだまだ発展途上ですから、これからどのような文化を作り上げていくことができるのか、皆目見当がつきません。未だにどんどん成長する恵迪寮がこれからどんな風に化けるのか、非常に楽しみなところです。

寮祭企画「鬼プライム」女子寮生もモリモリ…

寮生の食事情

自然な人間関係形成に直結

田中　泰文
（平成14年入寮　工学部4年）

僕は入寮してから十キロも太ってしまった。なぜ、ここまで大きく成長してしまったのだろうか。思い当たる節はいくつかあるのだが、その中でもやはり寮のエッセンが美味しすぎてついつい食べ過ぎてしまうのが一番大きな原因だろう。エッセン制は、部屋（十人位）の中で、当番制で回されており一週から二週に一度、自分のエッセン当番の日が回ってくる。入寮して初めて当番が回ってきた時には、シャバシャバカレーぐらいしか作れなかった僕も、今では魚料理を作ったり、グラタンを作ったり、人並みのエッセンを作れるようになってきた。最初は少々面倒であったエッセン当番も今では楽しみのひとつである。味付けがうまくいった時に「うまいうまい」と部屋員の頬張る姿を見せられると、うれしくてたまらない。「エッセンは愛情だ」と上の年目によく言われたが、まさにその通り。愛あるエッセンほど美味いものはない。

また、学校帰りに「今日のエッセン何だろうな」と気にするのもまた楽しい。学校が終わるとポーンと弾かれたように教室を飛び出し、自転車に飛び乗る。「早く暖かい居部屋のコタツにもぐりたいなあ、今日のエッセン何かなあ。」冷たい風を切りながら原生林を一気に走り抜け、一目散に寮へと帰る。「ただいま！」自分の部屋のブロック扉を開くと、そこには生活感溢れる楽園が待っている。エッセンの匂いにふわっと包まれ、引きずり込まれるように補食談話室へ入っていくと、今日のエッセン当番の部屋員が手際良く調理を進めている。ああ、なんて美味そうな匂い。美味しいエッセンは、どんなに大量に作っても次の日には、「誰がこんなに食ったんだ！」と思うほど恐ろしいスピードで消費される。エッセンは寮生活と切っても切れない大切な日常だ。

また毎週日曜日には、エッセンはなくスペシャルがある。執行委員会の炊務部が百五十人ほどの夕食を作り、共用棟で百円という格安の値段で寮生に販売するのだ。スペシャルの合言葉は安く・美味しく・ガッツリと！多くの寮生がこのスペシャルを求めてやってきて、共用棟の畳の上で食事をとっていく。おいしい食事には、人は吸い寄せられてくるのだろうか。あまり行事などにも出てこない寮生も、スペシャルの時には我先にと争うようにスペシャルを食べにくる。そういった光景を毎週見るたびに食の求心力に驚くばかりである。久しぶりに会ったり、たまたま隣り合ったというだけで、そこから至極自然に交流の輪がひろがっていく。このような状況を作り出すことの出来るスペシャルの力は大きい。現寮移行時は、寮生の乱れた食生活を改善するためにスペシャルが始まったという話を耳にしたことがある。しかし、現在ではスペシャルの意義も厚生的なものから、寮生間の交流を図るためのひとつの手段としての性格が強いように感じる。また炊務部の活動は、スペシャルの他にもパン屋さんから直接パンを購入して事務室で販売したり、アイスや米、酒などを安く販売したりして、寮生の食生活の充実に一役をかっている。

仮装パレード。大通公園の噴水の中でストーム

エッセンがない日や深夜に小腹がすいた時には、よく部屋員で飯を食べに行く。定食屋、中華料理店、カレー屋、お好み焼き屋。挙げればきりがない。色々な店に飯を食べに行く度に、実は寮生はすごいグルメなんじゃなかろうかと思わずにはいられない。多くの寮生の舌によっておいしいかどうか判定されるため、自然と行く店も淘汰されていく。美味しく、安く、ガッツリと食べられるお店はもう最高だ。また、その店のマスターの人柄もポイントに大きく影響してくる。僕が好きな店のマスターはやはり六宝飯店のマスター。深夜に営業している小さな店であんかけ焼きそばの大盛りが人気メニューとなっている。そこのお歳をめしたマスターは、調理の合間に突然寝だしたり、かと思えば常連の酔っ払い親父の相手をして歌いだしたり。とにかくマイペースな感じのマスターに心を奪われる者も多い。

海企画。「我泣きぬれてスナとたわむる」

新歓期は普段にも増して外食する。すごい量の飯を食べに行ったり、とてつもなく辛いカレーを食べに行ったり、所謂食い極というものをするのだ。大抵の新入寮生は、今まで見たこともない状況に唖然とし、そして乗り越えていく。食べきった彼ら彼女らの顔はどこかたくましい。僕の時もそうだったが、そんな印象に残るような食事をした仲間とは知らないうちに仲間意識が芽生えているものだ。

僕にとっての食事は、美味しく空腹を満たすという意味もあるが、さらにはその食によって得られる至極自然な人間関係の形成に魅力を感じる。同じ釜の飯を食う仲とはよく言うが、一緒に飯を食うことで自分では気付かないうちに、相手との距離が縮まっている。そういった食を通して共有する日常生活があるからこそ、深い信頼関係が築けるのだと思う。食は恵迪寮の誇れる文化だ。

人物点描

帝大百年・恵迪百年

佐藤昌介（農学校１期生）

（一）

佐藤昌介は、一八五六年（安政三年）、岩手県花巻に於て南部藩士の長男として生れた。十三才のときに戊辰戦争への出陣を意図したが若年のため出陣できず留守隊の太鼓打方となった。十五才で南部藩の作人館に学ぶが同窓に、後の我が国最初の平民宰相となった原敬がおり、ときに重要な課題で後援をうる事になる。明治に入り上京し、大学南校に入るが家事の都合でいったん花巻に帰り一八七四年に再び上京し東京英語学校（のちの東京大学）に転じた。一八七六年七月、クラークは農学校教頭として農学校入学志願者の募集のため東京英語学校を訪れた。佐藤昌介は、英語学校卒業を直前にし二十一才で、クラークの語る理想に感動し札幌農学校への転校を決意した。一八七六年昌介は、東京英語学校退学の同窓九名と共に北海道に雄渡することとなった。

（二）

佐藤昌介は卒業と共に、自費をもって渡米しニューヨークに近いポートン農場に入り農牧畜業を学びバター製造所長を勤めるに至った。このあと昌介は、ボルチモアのジョン・ポプキンス大学に入学し「アメリカ土地問題の歴史」に関する論文をもって博士号を取得し帰国した。昌介は帰国と共に農学校出身最初の教授として三十二才で母校に迎えられた。昌介は米麦中心の内地農業技術に対し、気候・土地に合った農牧畜混成の農業かつ一定の規模をもった機械農法の確立を目ざし、母校の教壇に立つと共に札幌郊外苗穂に二百町歩の払下げを受け農業経営の模範をつくるべく奮斗した。昌介は生涯にわたり母校に止まり、〝北海道大学の父〟として活躍をすることになるが、かたわらこのような北方寒冷農業の確立に努め、また系統農業団体がない中で、勧農会を組織し逝去にいたるまで北海道農会長として活動したように、〝学究と実践〟を共に大切にする学風を北海道に残す礎となったのである。

北大理学部

（三）

さて札幌農学校は今日創立一三〇年を数えるに至っているが、今日に至るに再三再四の危機を体験してきた。北海道の行政機構の目まぐるしい変化のためであり、北海道開拓使の廃止。三県併立を経て一八八六年北海道庁設置によってやっと安定した。しかし札幌農学校はそのたびに閉校の危機や縮少再編を経て文部省の所管となり落ちつくことになった。佐藤昌介は農学校の中枢として中心になりこの危機を乗り切ってきた。ときに東京・京都に次ぐ帝国大学設置の気風が起り、昌介はこれをチャンスとして農学校の帝大昇格へ動く、かつての竹馬の友で最高の実力者である原敬の助力を得て、ついに一九〇七年東北帝国大学農科大学として昇格を実現するのである。

札幌農学校校長の任にあった昌介は引き続き学長に就任し一九一八年北海道帝国大学の独立と共に初代総長に就任し今日の北海道大学の礎をつくることになった。東北帝大理科大学は一九一〇年に開校するが、農科大学はその三年前に開校し一九〇八年には東北帝大第一回の卒業生を農科大学から出すことになった。今まさに二〇〇六年東北帝国大学農科大学は開校百年を迎え、また札幌農学校寄宿舎から名称を新たにした恵迪寮も百年を迎えるに至る。札幌農学校の父として生涯を捧げ、偉大な足跡をのこした巨星一九三八年に逝去。

人物点描

北海道開拓の魁

内田　瀞（農学校１期生）

（一）

内田瀞は、一八五八年（安政五年）、土佐国高知築屋敷に於て土佐藩士の次男として生れた。一八七四年に上京し東京英語学校に入学するが、佐藤昌介と同じようにクラークの熱血あふれる勧誘によって、札幌農学校一期生として、大島正健・佐藤昌介・柳本通義などと共に北海道に渡った。

内田瀞は、北海道開拓の指導者となるべく熱心に学ぶと共に、クラーク自筆の「イエスを信ずる者の契約」に署名し、クリスチャンとしてクラークの帰国後もその死の前年まで文通し交流を続けた。また内田は農学校卒業と共に北海道開拓使の工業局土木課御用係として開拓の第一線を荷うこととなり、まさにクラーク精神を体現する第一人者の志に立ったのである。

（二）

一八八一年内田は民事局勧業課勤務となり内陸部の道路建設のため地形・地質の調査を日高から十勝・釧路・根室・北見に展開することとなった。さらに一八八六年北海道庁の設立と共に道庁に転じた内田は植民地選定主任として北海道の本格的開拓のための植民地選定事業を担当することとなり農学校一期生の柳本通義と共に十二組の調査チームを編成し全道の踏査を開始した。

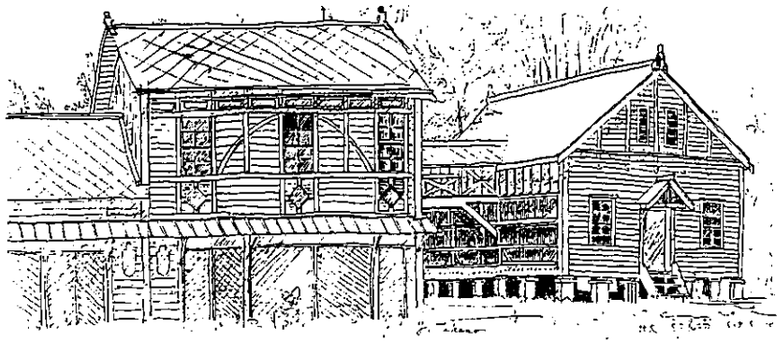
「北海道内部原野ハ樹木鬱蒼、荊棘繁茂、又ハ沼泥地、低湿地等ニシテ行クニ路ナク、宿スルニ家ナシ。此間ヲ調査センニハ、先ツ糧食を負ヒ、刀鋸ヲ携ヘ、旧土人ヲ嚮導トシ、荊棒ヲ披テ蹊ヲ通シ、天幕ヲ張リ雨露ヲ凌キ、或ハ刳木舟ヲ造テ河川ニ遡ル等其困難名状ス可ラス。」

内田の調査報告「北海道植民地選定報文」の緒言の語るところである。かくして四年にわたった調査は二八億六六〇〇万坪の農耕・牧畜適地を選び出し、多くの開拓民を招致する先がけをしたのである。

（三）

内田の開拓適地区画は、未開の原野を三百間毎に基盤目状にし農家六戸（一戸分五町歩）を配置するものであった。内田はその後も全道の気候・土壌・生物・河川の調査に奔走する日々をおくり足を千島にものばしている。

内田は一八九三年に開拓調査の大既を終えたことにより退官を決意し、みずから開拓農民となる道を選び、雨竜郡に義兄（元札幌農学校長森源三）より五町歩を貸り後に隣接する三島農場の未墾地二五町歩を追加してアメリカ式の近代農業経営に着手した。また一八九五年には旧松江藩主が持つ上川郡近文の一七六六町歩の松平農場の管理者を委嘱された。内田は雨竜農場でも松平農場でも一進一退の労苦のすえ、北海道に実際に適応する農法を確立し、一九〇六年に松平候から農場の成功により水田八十町歩を贈られ、一九二二年には東京で開催された拓殖博覧会と一九一八年の北海道開道五十年記念博覧会に於て模範農場として名誉金碑を贈られた。内田はまたホルスタイン牛や緬羊の導入を試み飼育を奨励し今日の発展に導いた。一九三三年逝去にあたり、葬儀は若き日に共に誓い建立した札幌独立キリスト教会に於て執行され弔詞に立った佐藤昌介は「黒田長官が吾人に期待せるところを実現した。」ものとし北海道開拓のために未開の大地に立って献身した内田を賛えた。



北大モデルバーン畜舎２

人物点描

北海道私学の開基

戸津高知（農学校明治31年卒）

（一）

戸津高知は、一八七二年（明治五年）、仙台市に於て仙台藩士の長男として生れた。この年三月は北海道開拓使が東京芝・増上寺に於て仮学校（のちの札幌農学校）を設置した記念すべき年である。戸津は長ずるに及び仙台にて二高の補充部に入学するが、札幌農学校への受験を決意し二ヶ月で退学した。一八八八年八月渡道し編入試験を受けるが失敗し、北海英語学校という夜学校に入り、翌年札幌農学校に入学した。戸津の入学時は佐藤昌介が校長であり新渡戸稲三が欧米留学から帰国し母校に着任をした年でもあった。また明治学制が整い義務教育の確立と共に中等教育の気運が高まった時でもあり、一八七四年には函館遺愛女学校、一八八九年には札幌スミス女学校（現北星学園）が設立された。

北大古河記念講堂

また、一八八八年新渡戸は恵まれない子女子のために札幌遠友夜学校を設立し、農学校関係者がその教壇に奉仕に立っていた。一方で戸津は半年間学んだ北海英語学校の寄宿舎に住み農学校在学中はその手伝いに明けくれた。そして奇しくも、この活動が戸津にとり生涯をかけた聖職の場となるのである。

（二）

北海英語学校は、農学校一期生佐藤勇が戴星義塾として開校し、これを三期生大津和多理などが私立学校として改称したものである。しかし学校経営は厳しく大津は、ときの札幌区長浅野靖に支援を請い一八八七年に校主兼校長として就任してもらい、土地の無償下附など多くの便宜のもとに存続していた。

戸津は農学校卒業と共に庁立札幌中学校教諭として教育の一線に立っていたが、札幌の発展と共に公立中学だけでは不足となり、公立の拡充と共に私立中学の開設の志を持つに至った。戸津は一九〇一年、北海英語学校を豊水小学校旧校舎に移転させ中学校会による中等部の設置を決断しこの年に北海英語学校の教頭に就任した。私立中学開設の努力には多くの難関があったが、戸津は浅野校長や政界・実業界の多くの支援の下に一九〇五年に正規の中学校令による中学校の認可を実現し、私立北海中学校として開学することを実現した。

（三）

浅野校長は官界・政界・実業界の多忙な活躍の一方で、現在の北海学園所在地に校地を確保するなどの基礎づくりを実現し一九一四年に逝去した。戸津はその志を名実ともに継ぐこととなった。一九二〇年には札幌商業高等学校を創設し北海中学と双方の校長をしつつ、一貫して「愛をもって当れ」という言葉と共に積極的なパイオニアにふさわしい人材と猛者の輩出を待ち望んだ。一九四八年戸津は、一八八八年に北海英語学校に学んでから六十年の歳月を経て喜寿の祝賀を迎え北海学園名誉園長として後事を托し退任した。直接に薫陶を受けた者は北中卒七千・札商卒五千など一万三千人であり、皆が戸津を慈父の如く慕い「父っあん」と親しみを込め呼んだという。それから北海学園は一九五〇年北海短大・一九五二年北海学園大学を設立し北海道私学の雄として豊富な人材を輩出して今日に至っている。戸津は一九五九年、米寿を目前にして八十七才で逝去した。

人物点描

アラビア石油の快挙

山下太郎（農学校明治42年卒）

（一）

山下太郎は、一八八九年（明治二二年）、秋田県横手で生れ父の仕事のため上京し、慶応中学卒ののち明治三十七年同郷の田所拓太郎（元理学部長）と共に連絡船にのり、札幌農学校に入学、明治四十二年（一九〇七年）に農芸科を卒業した。山下は勉強よりも大夢にかける男であり学校はビリだったとも言われている。卒業と共に山下は東京にもどり『山下商会』を設立した。仕事は、でんぷんを水で溶きコンニャク粉を混ぜ熱鉄板に流しオブラートにする事だった。ときは日清・日露の戦争と第一次大戦と続く好景気のさなかであり、山下はこのチャンスに大正七年から鉄・肥料・雑穀を扱い中堅の商社に成長した。これらの仕事を海外植民地に手を広げ、その活動と人脈をもとに山下は満州に進出することとなった。満州では満鉄社宅の建設を一手に引き受け、莫大な財を成すと共に人は彼を〝満州太郎〟と呼んだ。

（二）

大東亜戦争に敗れ、山下は無一文で大陸から引き揚げて来た。山下は残った国内の事業を建設関係の仕事で再開した。そして政界・財界の満州人脈を動かし中東の石油採掘権の取得に動くのである。

日本は敗戦からやっと独立したばかりであり、石油の生産・流通は米英が国際資本メジャーとして独占している状況であった。山下は単身サウディアラビアに飛び込み数ヶ月に及ぶ交渉のすえ、ついにサウジ・クエートの中立地帯沖合区域に一九五七年「石油開発に関する利権協定」の締結にいたる。さらにもう一方の主権国家であるクエートとの交渉は米英国際資本との熾烈な競争の中で一九五八年に、サウジと同じく利権協定を実現することとなった。

イランの石油国有化法断行やエジプトのスエズ運河国有化、ナセルによるエジプト・シリア合併によるアラブ連合共和国の設立などアラブ民族主義高揚を背景に、度重なる交渉中でクエートのアブドラ首長が山下の人物を見込んだ結果によるものであった。

（三）

山下は一九五八年（昭和三十三年）「アラビア石油」を設立し社長に就任すると共に、ときの経団連会長石坂泰三を会長として就任してもらい国家の全面的支援を仰いだ。

世間が〝石油は出るのか〟と冷かしで見る中、翌年クエート沖合四八ｋｍの海上で第一号掘削井は深度四五〇ｍでガスが暴噴しカフジ油田を発見するに至った。一九六〇年（昭和三十五年）アラビア石油は恒久基地を建設し、一九六二年（昭和三十七年）からカフジ原油は日本に出荷させることになった。

山下は満州時代に田所との親交に答え、昭和十四年に北大に山下生化学研究室（現在の文系校舎南端）を寄贈し、昭和三十九年には七六才で北大に於て講演をし、多くの学生を前に『諸君の前でこうして語れるのは、まことに痛快にたえない』ことであると語った。生涯札幌農学校への思いを懐かしんだのである。

サウジ原油は、しばらく日本の原油輸入の一〇％を維持する貴重で安定したエネルギー源としての役割を荷った。今日に至り残念ながら五〇年の協定は失効し近くクエートからの撤収が行なわれることになっている。

北大工学部

昭和四十二年イスラエルとアラブ諸国が戦闘状態に入り中東戦争にエスカレートしてゆくころ、山下は陣頭指揮のさなか心臓病で倒れ七八歳で没。その心中かつて石油禁輸のＡＢＣＤラインから大東亜戦争に突入し敗戦の中でアラビアに雄飛し石油を手中にしたアラビア太郎の心は何を思ったのであろうか。

昭和三十年入寮五十周年記念同期会報告

厚谷純吉（昭和30年入寮）

昭和三十年入寮の同期生が卒寮後最初に一堂に会したのは昭和五十七年夏の旧寮で行われた恵迪寮閉寮記念同窓会である。そのときは二十一名の同期生が参加した。その後、平成一年六月に定山渓で恵迪寮三十年の集いを明峰先生と水野さんのお二人をお迎えして開催し十九名が参加した。平成七年九月恵迪寮同窓会総会・大寮歌祭の前日の十五日に支笏湖レイクサイドホテルで開催した。五組の夫婦を含め三十二名が参加し、その時は、ホテルの好意で屋外で火を囲み寮歌を楽しむことが出来た。平成十三年九月には恵迪寮大寮歌祭にあわせて恵迪寮二十九・三十年の集いを札幌のグリーンホテルで開催し四十二名が参加した。

平成十六年九月の札幌での恵迪寮大寮歌祭の前日三十年入寮の有志が集い入寮五十周年を迎える平成十七年には是非多くの仲間と集いたいものだと語り合い東京周辺での開催を希望し、その準備を小倉健三君・塚本茂樹君・中島庸介君・丸山玉樹君・山本二夫君にお願いをすることとした。東京では上記の五名に下嶋末雄君を加えて六名で幹事会を発足させ協議を行い日時を十一月八日とし開催場所をＫＫＲホテル東京として十二月には三十年入寮生全員に参加希望についての照会が行われた。その後準備は丸山玉樹君が中心になって進められ最終的な連絡も行われ、開催当日を待つばかりとなった。十月に入り突然丸山君の訃報が入った。心筋梗塞で一夜にて他界とのこと。愕然とする。会は予定どおり開催するとのこと。

十一月八日ＫＫＲホテル東京に同期入寮の仲間が続々と集合する。十七時三十分より記念の集合写真の撮影。参加者は三十八名。

平成７年９月15日　北海道大学恵迪入寮40周年の集い　於．支笏湖レイクサイドホテル

青柳宏一（小平市）厚谷純吉（札幌市）安藤利孝（芦屋市）安藤良雄（宇都宮市）安間荘（富士市）伊藤孝（札幌市）伊原務（東京都）逢坂国一（市川市）大坂久夫（狛江市）小倉健三（八千代市）川田恵昭（東京都）小出精（仙台市）酒井誠一郎（札幌市）崎原詔夫（川崎市）桜井充三（越谷市）佐藤貴夫（越谷市）下嶋末雄（八王子市）多賀春雄（横浜市）高橋陽一（札幌市）高橋守（金沢）（蓮田市）茅根愛二（横浜市）塚本茂樹（栃木県）土屋晴男（東京都）中島庸介（長野市）難波江伸武（吹田市）西村博之（小金井市）西村喜夫（町田市）早川福利（北広島市）藤森幹夫・直枝（船橋市）水島典弘（札幌市）宮田富士夫（大津市）幸健一郎（札幌市）村井亨正（上尾市）村上明（市川市）村瀬哲（船橋市）山崎陽三（さいたま市）山本二夫（横浜市）である。

北大恵迪寮の昭和31年・32年当時の食事献立例

昭和30年　１日55円			昭和32年　１日65円		
朝　食	昼　食	夕　食	朝　食	昼　食	夕　食
味噌汁 沢庵漬物	鉄火味噌 コロッケ、きゃべつ インドネシア美人 （金平牛蒡） オランダ煮 （さつま揚げ） ホッケ焼き魚 納豆 焼き魚	鯨かつ、きゃべつ 鯨カルカッタ焼き 天使 フライ 煮魚 焼き魚 カレーライス	味噌汁 沢庵漬物 生卵 鉄火味噌 納豆 梅干し マーガリン インドネシア美人 （金平牛蒡） オランダ煮 （はんぺん） 福神漬け	コロッケ、きゃべつ ホッケ焼き魚、紅生姜 天使 カレーライス、福神漬け 鮭ムニエル 焼き魚、大根おろし ひじき炒め煮	鯨かつ、サラダ 煮魚、お浸し フライ、豚汁 すき焼き 鯨カルカッタ焼き、きゃべつ 焼き魚ホッケ、パンプキンマッシュ
ご飯は、外米と麦が55%混入 味噌汁は４人分の桶から取り分ける 沢庵は２切れ たまに肝油がつく １日の熱量：2000kcal程度	上記の献立から１品 焼き魚には、塩鱒がよく使われた	上記から１品	味噌汁、沢庵漬物以外に１品追加。 １日の熱量：2,300kcal程度 蛋白質50～60ｇ 脂肪30ｇ程度	主料理に野菜や紅生姜、福神漬け、大根おろしなどが添えられる。 上記から１品	現在では高級なものになった鯨肉、ホッケなどが主流だった。 上記から１品

（注）食費を10円上げるのに委員は苦労したが、その成果は献立に端的に現れている。
恵迪寮の食事内容は、食費の割りに他の寮や他の大学からも評価され、献立の内容照会や指導の要請もあったが、恵迪寮の特異性もあってうまくいかなかったようだ。その特異性は、人数の多さによる大量購入の効果、スペシャル（余ったエッセンの販売）の活用、大学牧場からの牛乳の購入と販売、炊務委員による塩鱒等の直接購入など自治寮の機能を活用した成果とも言えよう。

定刻となり小倉健三君の開会のことばで集いは始まった。続いて十月に亡くなった浅井登美彦君と丸山玉樹君を含め十七名の冥福を祈り黙祷を奉げる。関東ブロック幹事長の中島庸介君の通称ドンちゃんですから始まった今回の三十年入寮五十周年の集い開催の経緯を含めた挨拶が述べられた。続いて三十年会を代表して幸健一郎君が挨拶。酒井誠一郎君の音頭で都ぞ弥生の斉唱。厚谷の乾杯で宴は始まった。しばし懇談が続く。寮生活時代で一番の問題は食のこと。当時の献立表を前にして思い出にふける。一日の食費は五十五円、朝食はズッペに沢庵二切れ。しかし四人がテーブルに着くのを待ってはじめて味噌汁を公平に盛り付ける慣わし。当時の炊務委員は安い食材を求めて二条市場までリヤカーを引いて買出しにも出かけたものである。

宴もたけなわになると寮歌の出番である。この日配られた歌集には定番の寮歌と黒い瞳の、泉のほとり、トロイカ、ともしび、などのロシア民謡、乾杯の歌、酒・歌・煙草また女等々。三十・三十一年の頃は歌声運動の盛んなときで北大の構内ではアコーデオンを中心にロシア民謡などが良く歌われていた時代であり、寮の中で歌われる歌といえば寮歌・猥歌・ロシア民謡などが主流であった。その中で忘れられない歌の一つが「酒・歌・煙草また女」である。この歌は佐藤春夫の詩「三田の時代を慕ふかな」に曲が付けられたものであるが、これについて三十一年入寮の前島一淑君がある雑誌に載せた文章をこの歌を全寮に

ファイヤーを囲み寮歌を高吟＝
平成７年９月15日於支笏湖レイクサイドホテル

恵迪寮29・30年の集い　平成13年９月15日　於　グリーンホテル札幌

広めた酒井誠一郎君が今回持参してくれたのでその一部を紹介する。

北大恵迪寮青春の歌

「酒、歌、煙草、また女」　前島一淑

……略……

この歌は私が昭和三十一年から二年間を過ごした北大恵迪寮では明治三十八年以来連綿と続いて北大生が自ら作詞、作曲して残した多くの寮歌とともに、寮生がもっとも愛唱する歌の一つでした。音程や歌詞は多少あやふやでも、いまでもほとんどの旧寮生は歌うことが出来、先月、寮生時代の旧友たちと酒席をともにしたときもこの歌が話題になりました。加藤さんは「若き二十のころなれや／三年がほどはかよいしも／酒、歌、煙草、また女／ほかに学びしこともなし」がもっとも知られる一節と書いておられましたが、

……略……

北大恵迪寮へ伝えたのは荒木武夫さんです。

……略……

念のため、北大恵迪寮でこの歌を広めたのは私の一年先輩の酒井誠一郎さんです。これらのことから推測しますと、作曲時期は昭和二十六～二十九年、北大に伝わったのは昭和二十九年、そして多くの寮生が口ずさむようになったのは昭和三十年です。当時の北大恵迪寮で青春を謳歌した私たちには、「酒、歌、煙草、また女」は若い時代の鮮烈でほろ苦い記憶とともに今も耳に閉こえています。（終り）

荒木さんと酒井君は柔道部の同室でありまた、酒井君は美声のもちぬしである。今でも同期の集まりではこの歌を酒井君に歌うことを所望しており五十周年のこの宴でも酒井君の美声が響きみんなが声を合わせた。時間も過ぎ山本二夫君の仲締めの挨拶で別室の二次会に席を移し深夜まで懇談が続いたがやがて別れのときとなりまたの機会をと心を残しつつ解散した。

北大恵迪寮昭和30年入寮50周年記念同期会
平成17年11月８日於KKR HOTEL TOKYO

二度目の北帰行と3940会

鮫島正純（昭和40年入寮）

初めて津軽海峡を渡ったのは昭和四十年の三月、もちろん連絡船で。それ以来数十回は乗っただろうか。函館山を見ると「海峡を無事に渡り終えた」安堵感が沸いた。列車に乗り換えて三十分もすると、勇壮な駒ケ岳の山容が目に飛び込んでくる。「ああ、北海道だ」という感覚が湧く。さらに近づくと、海回りだと樽前山、山廻りだと羊蹄山がみえる辺りで「もう一息だな」とうなずき、手稲山の稜線を目にすると「戻ってきた」と実感する。いつの間にか道南の山々が、ただそれを眺めていただけなのに、いつの間にかふるさとの山になっていた。

私には、明確にふるさとといえるものがない。生まれて小学一年まで過ごした広島は大いになつかしいが、ふるさと感を持つまでにはいたっていない。子供のころは夏休みを過ごしに、四人の祖父母と多くの叔父叔母いとこが住んでいた鹿児島に何回か行った。鹿児島本線の列車が下り坂を鹿児島駅に近づくと、桜島が眼前にひろがる。その時には、鹿児島で暮らしたことは全く無かったが、「ふるさとだ」という思いがいつも胸にこみ上げてきていた。しかし、小学二年以降は北大の六年間を除くと、ずっと東京暮らしであるから、実質的なふるさとは東京のはずである。それなのに、どうも「ふるさと東京」という実感は全く無い。そして今は弘前に住んでいる。東京方面から新幹線を使い、盛岡で岩木山がみえると「もうすぐだな」と思い、八戸で在来線に乗り換え、青森駅を経て大釈迦トンネルをくぐり、津軽平野に入ると雄大な岩木山が周囲を圧倒している。そしてここでも「帰ってきた」とつぶやくようになってきた。不思議なものだ、山は。何か縁があると、あるいはそれが見えるところに住むようになると、いつの間にかそれが「ふるさとの山」になってしまう。

雄大な岩木山

桜島、道南の山々、そして岩木山が私の「ふるさとの山」になっている。最後の、といっても今のところであるが、「ふるさとの山」がある弘前には、二〇〇三年六月に赴任した。それ以前には、八甲田・奥入瀬・十和田湖の観光コースを二度回ったことがある以外、津軽は通過経路の近くの地に過ぎず、住むことは全く想像すらしていなかった。弘前に赴任してきたことは、私にとっては二度目の北帰行である。弘前に住み始めた当初は、連絡船で行

き来した頃を懐かしく思い出すことがしばしばであった。一年半ほどたってそれも落ち着いてきた頃に、白浜憲一氏（昭和四十年入寮）から恵迪寮３９４０会のお誘いがあり、躊躇無く飛びついた。

二十名程の参加者のあの当時の顔は、すぐに思い出したり、懐かしい話がすすむうちにじわじわと思い出したり、であった。この３９４０会の盛り上がり具合と「もつらの母さん」については、同窓会誌「恵迪」に白浜氏と昭和三十九年入寮の芝垣美男氏がそれぞれ執筆しておられる。そこでふれられていないのは二次会のことである。といっても単に幹事の方の部屋での飲みなおしである。多少人数が減ったこともあって、そしてそれ以上に白浜氏と木谷氏の両氏が参加されていたことから、おのずとあの当時の学生運動のセクト対立の話になり、妙にしっとりと盛り上がった。当時、それぞれの立場で、非常にまじめに取り組まれていたことをあらためて実感した。

私がこの会に期待していたことのひとつは、昭和四十年の前期に同室であった三十九年入寮の南部氏の消息である。静かな方で、新入生が落ち着いて暮らせる雰囲気をかもし出しておられた。農学部農業生物学科昆虫学教室に進学されたはずである。どなただったかは記憶にないのだが、南部氏をご存知の方がおられた。残念なことに、何年か前に亡くなられたとのことであった。

当時の新入生は、入寮が決まって前期の部屋替えがあるまで、先輩が住んでいる部屋に仮に振り分けられた。どうしたはずみか、私たちの場合は、五名全員が新入生であった。そのため、そのうちの三名（大野泰熙氏、鶴井雅夫氏、中村富士男氏）とはその後も、それぞれの結婚式に参列するほどの付き合いが続いた。全員の勤務地が東京になった数年前には久しぶりに集まって旧交を温めたこともある。しかし、お互い仕事に追われる年代だったこともあり、「また会おう」のつもりがそれっきりになっていた。今回私が３９４０会に出席したことを契機に再び集うことになった。会うたびに、「恵迪時代」はそれぞれのバックグラウンドに深く根を下ろしていることを痛感する。

二〇〇四年十一月の第一回３９４０会の折、隔年に場所を移して開催しよう、という話になった。二〇〇六年には東京で、三十九年組（木谷勝、佐藤忠昭）、四十年組（飯塚健三、鎌田哲成、佐藤信雄、成ケ沢憲太郎）の諸氏の幹事役で開かれるとのこと。以降、二〇〇八年は名古屋または関西、二〇一〇年は九州が予定されているとか。懐かしい面々に再びお会いできることが、今から待ち遠しい。

全国から集い盛大に（東京・寮歌祭）

本田　彰

二〇〇五年十月一日午後一時半、大田区コンベンションホールにて安藤実行委員長の宣言により、第四回寮歌祭が開始された。例年通りに、現役応援団の指揮の下、校歌〝永遠の幸〟を、一年振りに会うＯＢの仲間達約百五十名と厳かに斉唱に入る。

出席者は当寮歌祭名誉顧問であり先日退官された吉原先輩が北海道からお越し戴いたのを始め、遠くは体育会ＯＢの山下氏（昭和四十八年卒）は大連からと、遠地からも多々駆け付けてくれており、当会も多くの方々に支えられ、年々安定した会となっている事を実感する。

◇　◇

第一部は、吉原先輩の乾杯の音頭の後、本日のトップバッターとして景気付けの意味もあり実行委員会による「春来にけらし（昭和十七年）」が始まる。此の一年間準備をやって来た委員会の連中が〝…白雪の厚き衣や重からーん…〟と本番開始。ムムッ、未だ皆の衆の声が硬い。一騎当千の猛者揃いではあるが、娑婆の汚れた空気に喉も体力も消耗しているのであろう。毎年出だしは此んなものである。

二番手は陸上部ＯＢ（今後〝ＯＢ〟は省略、出場団体は皆ＯＢの為）による「一帯ゆるき（明治四十年）」だ。曲のテンポに連られて声の張りも多少出て来たし、テーブル席からの合いの声や手拍子も乗って来た。三番手は群馬県の「億妖雲は（昭和十）」、四番手は千葉県の「蒼空高く…（昭和二）」となり、順次、進修寮・桑園寮・資源と続き、第一部を水産による放浪歌で締め括る。

〔第１回寮歌祭〕青春の再現に参加者は元気一杯

北大の組織的な寮歌祭は、一九六八年（昭和四十三年）にクラ館において第一回寮歌祭を現役応援団が初めて開き、爾来三十七年間、母校では現役諸兄の尽力で今日まで続いている事は誠に嬉しい限りである。それに力を得て我々ＯＢも日本各地で母校を想い老若男女が寮歌祭を催している訳で、将に北大魂は恵迪寮歌でもって連綿と受け継がれている一面は何人も認める所である。

◇　◇

第二部が休息時間を置いて開始された。

現役応援団・ブラスバンド部による懐かしくも（北大的に）華麗な演舞・演奏を、委員会が用意してくれた飲食物を頂き乍ら、観賞する。テーブルを越えて夫々が雑談に入り始めた。古しえの楽しかった記憶が甦り、全員の目がキラキラと輝いていた若かりし日のものに完璧に戻っているのである。

◇　◇

我々の東京寮歌祭が始まった経緯を紹介しよう。（「我々」と付けるのは、其れまでも諸先輩方が別の立派な寮歌祭をやって来られた事実に敬意を表する為。）

〔第２回寮歌祭〕都ぞ弥生斉唱
寮友と肩組み乱舞する

時節は二〇〇一年夏、東京で行われた七大学戦の後で現役の慰労を兼ねて新旧の仲間が交わり楽しく語り且つ高吟した訳です。メンバーは山元顧問に率いられた現役応援団及びブラバンが約二十名と、歓迎側としてＯＢ約四十名が集まった。我々恵迪出身として、寮歌への思いは普遍であり、親しい運動部仲間で集まれば寮歌を楽しんで居ました。唯、これ程の母校の精神的財産をもっと沢山の仲間と享受したいとの思いは常にありました。此の歓迎会において、恵迪寮出身者を中心とした応援団ＯＢや久し振りに会ったブラバンの出席者達と懐かしい話をする内に皆が如何に母校を偲っているか改めて感じました。そうした中で、寮歌こそが我々の心に北大精神を甦らす最高のものであるとの確信が深まった訳です。北大ＯＢの方々の熱き思いと世界に他に類を見ない北大寮歌の持つ精神文化は、現役時代に腹いっぱいに学び、社会に出て個々の人生観にこそ其の意味が昇華されるのではないかと私は理解しました。そして、日頃温めていた東京寮歌祭を立ち上げるべきだし、必ず成功すると確信しました。出席していた終生の友である込山・柄谷・安藤・佐々木の各氏等に披瀝した所、皆が同じ思いでしたし、ブラバンの原澤（旧姓、門馬）・村田氏等に相談した所、此方より何倍もの熱い思いで「やるべし！」とかえって尻を叩かれた次第でした。それから約一年、それは楽しくも悩みの連続でした。一般の北大ＯＢに気楽に参加して貰える寮歌祭にするには、先ず委員会スタッフの充実は不可欠でしたが、此んな窮地に計算無しに集まるのが矢張り北大精神ですねえ。多忙な中に事務局として込山・安藤・佐々木・門馬の各氏に加えて瀬尾・土屋・小野・松岡・増元・斉藤・岩崎・瀧波・細田（夫妻）・青柳・五関・遠藤氏等が続々と気持ち良く集まってくれて、第一回目の委員会がスタートしました。皆さん社会人であり、集合時間・場所が制限される中で、一般参加者に交通の便が良く出来るだけ安く気楽に参加出来る為には如何すれば良いのかを皆で一歩一歩積上げながら、又々、仲間との交流と信頼感を増して行く事が出来た訳です。

◇　◇　◇

〔第３回寮歌祭〕聞け、現役も交えた参加者の絶叫を！

第三部が開始。

柔道部による東征歌である。でかいのが並ぶと流石に迫力十分である。更にブラバン・畜産・東京シルバ会と続き、宴もたけなわ、皆も歌に酔い、アルコールも適度に回って来て大連の山下氏・剣道部の今城氏（昭和四十二年入学）・卒業も怪しげな大川氏等の幾人かは他の団体の寮歌に壇上に登って片っ端から参加している。引続き放浪舎・士幌小屋・サカエ・荘園寮・ローイングクラブと皆で腹の底から唱和し、体育会の音頭による「瓔珞みがく」となるとムードも最高で、且つ、アァ終宴も近いと言うジンと来るものを感じるのを北大コンパを知る者は皆判って頂けると思う。そして来るべきもの、現役団長の発声により「都ぞ弥生」の大合唱を会場全員が肩を組合って二度と帰らぬ若き日の感激に心行くまで皆で浸った次第です。

此れだけの立派な会場に素敵なプログラムや十分な飲食物に至るまでの手配は、実行委員を中心とした皆が打合せを行い分業して初めて出来る訳で、将に手作りの成果と言えます。因みに、第四回の主な役割は安藤委員長以下、佐々木・松岡・中井・門馬の各氏が事務局を務め、〈企画進行〉木村・斉藤・岩崎・北爪・山内・細田の各氏、〈受付・会場〉土屋・犬養・村田・横山・徳川の各氏と松岡夫人、他に旗・幟・太鼓等の設営等と皆が重複してやり遂げる訳です。更には、賛同者からの援助も忘れてはならない。社命で芸州に流された込山氏（第三回実行委員長）よりの樽酒・土屋氏から生しらす等の駿河名産品・寮歌祭名物料理となりつつある鮪鉄火丼の為、自作米供出の原澤家と炊き出しの安藤家、それと賄い方の安藤・本田及び純粋な寮歌好きで外部参加戴いている素敵なレディ等の婦人部隊、恒例となっていた山元顧問の銘酒「瓔珞」・柄谷氏や野球部からの酒の差入れ等、色んな産品の供出を頂ける皆さんの協力があるからこそ世にも稀なる素晴らしい寮歌祭が東京で開かれているのである。

かくして第四回東京寮歌祭を大成功の裡に終えました。此れ迄述べた如く、実行委員会の献身的な尽力をベースに、事務局が纏め役を務め、参加者全員が積極的に協力すると言う立派な会が出来上がった訳です。

当寮歌祭の立ち上げに際して仲間で次の二つの事を確認しました。

（一）北大（恵迪）寮歌を愛し、北大精神を高揚する仲間である事。

（二）母校を精神的に応援し、現役に役立つ事があれば積極的に後押しする仲間である事。

◇　◇　◇

〔第４回寮歌祭〕４回目ともなり、益々充実！

運営に当っては、一部の者だけで催すものではなく、右の志を同じにする者同士が当会を継続させる為に事務局メンバーは定期的に交代（若返り）を図り、委員会は色んな方に入って頂く事とした。（既に現事務局は三次目のメンバー。）

何故に多忙な連中が自己犠牲の下に此処まで頑張るのか？又、何故に多岐の年代に分かれるＯＢの見知らぬ者同士が例年二百名も参加するのか？　それは間違い無く、北大魂が寮歌の中に脈々と流れ続け、その心を皆が愛するからです。我等が母校の精神文化を求め、寮歌を高吟したいからこそ、開催側も心から楽しみ乍ら準備を行い、出席者も繰返し参加する訳です。此の熱き思いをＯＢの皆さんと永遠に楽しみたいし、少しでも多くの先輩・後輩ＯＢとその御家族に是非参加して戴きたいのです。実際、東京寮歌祭はＯＢ各人の思いをエネルギーとして自力で継続すべく船出する事が出来ました。今後も若い方々に引き継がれ、年々発展する事を確信致します。

北大（恵迪）寮歌の偉大さと北大ＯＢの尽きる事の無い精神文化探求への熱情に改めて最大の敬意を払いつつ、今回の紹介を締めさせて戴きます。

第一回東京寮歌祭実行委員長
本田　彰
（昭和四十四年度、恵迪卒寮）
二〇〇五年十二月吉日

◇　◇

（追）

東京寮歌祭は実に色んな方から協力戴いており、今回の拙文に紹介仕切れなかった重要な方々が沢山居られますが、小員の至らない能力の所為と言う事で敢えて御容赦を願う次第です。

恵迪寮の文化財No.7

伊藤誠也第五代総長揮毫 扁額「青年抱大志」

【掲示場所】

従来の恵迪寮においては、北十八条にあった第二代寮舎に掲げられていた書額であるが、講堂だったか、応接室だったか明らかでない。現在は、北海道大学に寄託して博物館が管理している。

【揮毫経過】

この扁額は、第二次世界大戦の敗戦で北大構内に駐留軍が進駐していた一九四五（昭和二十）年～五〇（昭和二十五）年に書かれたと推定されるが、その揮毫年代等の詳細は明らかでない。しかし、扁額の「青年抱大志」は、次のような学内の動きに呼応して作成されたに違いない。

その第一は、昭和二十三年に行われたクラーク像の再除幕式である。中央ローンにあるクラーク像は、大正十五年に創基五十周年記念事業の中で除幕されたが、その像が第二次大戦下に軍需品生産のために拠出されて台座のみであったため、戦時の不安と圧政を超えて獲得した自由と民主主義を再認識しようとして伊藤総長の下で再建されたことである。そのような動きの発端には、昭和二十二年に学制改革によって新制の北海道大学が発足し、新たに法文学部が加わって総合大学として一歩を踏み出したことも大きな要素であった。

続いて昭和二十六年には、クラーク先生がBoys, Be Ambitious!と叫んで別れた島松の地に「クラーク奨学碑」が建てられた。北大内には「クラーク精神」、「クラーク魂」などが言い伝えられ、これによって建学精神の伝承・北大魂の発揮が強調されているが、伊藤総長時代は、まさにその意向が最も高揚された時であった。加えて扁額は、終戦後の疲弊した社会の中で「恵迪寮生＝北大生よ！くじけることなく勉学に専念して欲しい」と言う期待が込められていると考えられる。

【揮毫者紹介】

北州、すなわち伊藤誠也先生は、終戦の年から新学制に代わるまでの総長であったため、正式には北海道帝国大学総長（一九四五～四七）、北海道大学総長（一九四七～四九）、北海道大学学長（一九四九～五〇）という三つの肩書きを使われた。伊藤誠也先生は、一九〇二（明治三十五）年に恵迪寮入寮し、一九〇八年に農科大学生物学科を卒業された。先生は、一九三〇年ごろ泥炭地水田の増加と共に水稲の「いもち病」が大発生したのを見て、その伝染経路と発生の機作を明らかにすると共に総合防除法を開発して北海道稲作の発展に多大の貢献をされた。また、「日本菌類誌」をまとめて植物病原学の基礎を築かれ、農業植物学の先達である。

恵迪寮同窓会通信

事務所：062-8611 札幌市豊平区平岸1-1㈱ラルズ気付　電話兼Fax.(011)815-6377

vol.22

平成18年度理事会の概要

第10期第３年次（平成18年４月１日～19年３月31日）恵迪寮同窓会理事会は、平成18年５月13日午後３時から札幌パークホテルで開催される。理事会終了後に議事録を原稿にしていては、本会誌「恵迪６号」の発行日に間に合わないため、事務局が作った議案書に従って理事会の様子を想定して紹介する。これは極めて無謀な処理ではあるが、本会の活動が支部活動を中核にし、本部が会誌「恵迪」発行とホームページ管理等の全国展開に関わる活動および会計業務に限定されたこと、本誌の「支部活動欄」には支部毎に昨年の活動報告と本年度事業計画（色刷り頁の大寮歌祭東日本大会を含む）が報告されていて、理事会で最重要課題となる「前年度活動報告と決算案」、「本年度活動計画と予算案」の内で会計事項を除いた事項が別頁で紹介済みであること、各理事に議案書が事前に配布されて各地で検討されていることなどから、理事会を軽視するわけでないが、会誌発行に向けた臨機応変の処置として許容いただきたい。（以下の節では敬称略）

理事会の冒頭には、各支部の役員改選に従って会長指名となっている役員の入れ替えがある。この内で本会を代表する［会長］中瀬篤信（Ｓ26）、［副会長］辻山昌佑（Ｓ26；西日本支部長）、篠原猛（Ｓ29；東日本支部長）、幸健一郎（Ｓ30；北海道支部長）、井口光雄（Ｓ28；会長代行）の体制は、北海道支部の役員若返りにより白浜憲一（Ｓ40；北海道支部長）が副会長に追加されて就任する。その他北海道支部の役員は、［副支部長］新井三郎（Ｓ32）、千川浩治（Ｓ40）、［幹事長］皆川吉郎（Ｓ43）、［副幹事長］猪狩柳太郎（Ｓ43）、谷口哲也（Ｓ48）らが選出されており、理事会構成者に変更があると思われる。**第１号議案；第10期２年次事業報告**では、在来の会誌「恵迪」と「同窓会通信」を合併した新機関誌「恵迪」の発行が１年間の試行から定常化へ位置づけされ、昨年６月に５号が刊行された。本会ホームページは、新たに広報部会［部会長；高野豊（Ｓ32）］を新設してホームページの拡大を図ったところ、ニュース、談話室への書き込みが毎週あって楽しくなった。是非とも本会ホームページ（URL：http://home.att.ne.jp/apple/keiteki－ob）を参照され、どんどん投稿をお願い致します。さらに北海道支部現寮部会［部会長；大隅昭二（Ｓ40）］の努力によって「現寮支援・交流の活性化」に取り組み、５月と11月に交流会が開かれて現寮生と親密な関係が作られ始めた。その他、恒例の大寮歌祭や寮歌歌始めの会等は、グラビア頁や支部報告ページ等に記載の通りである。また、**第３号議案；第10期３年次事業計画**については、本誌色刷りページの大寮歌祭を始めとして各支部ページに記載されたとおりである。第１と３号議案に含まれる**第10期２年次（平成17年度）決算報告と３年次（平成18年度）**

表２　年・終身会費の納入状況と平成18年度支部配分額

	年度会費		終身会費		計 C＝A＋B	交付金 Cx50%
	人数	金額A	人数	金額B		
北海道支部	67	207,000	1	30,000	237,000	118,500
東日本支部	92	288,000	1	30,000	318,000	159,000
西日本支部	75	224,000	3	90,000	314,000	157,000
計	234	719,000	5	150,000	869,000	434,500

表１　第10期２年次（平成17年度）決算（案）・３年次（平成18年度）予算（案）

＜収入の部＞

科　　目	平成17年度 予算額	平成17年度 決算額	平成18年度 予算額	摘　　要
１．会費収入				
年度会費収入①	750,000	719,000	750,000	@３千円×250人（決算232名）
組織運営資金②	1,000,000	513,000	1,000,000	@２千円×500人（決算238名）
終身会費収入③	0	150,000	0	@30,000×０人（決算５名）
カンパ収入④	300,000	196,350	300,000	
小　　計	2,050,000	1,578,350	2,050,000	
２．事業収入				
大寮歌祭収入	0	0	0	支部会計へ移行、今期は㊐支出
恵迪グッズ販売収入⑤	200,000	118,200	200,000	タイピン、写真集、テープ等
「恵迪」販売収入⑥	0	13,900	0	
広告収入	300,000	633,000	300,000	会誌恵迪掲載分、出版費に見合い
雑収入⑦	0	2,710	0	
小　　計	500,000	767,810	500,000	
３．利息収入	1,500	490	500	
当期収入合計（A）	2,551,500	2,346,650	2,550,500	
４．繰越金	0	0	0	
５．基本金戻入収入	0	688,444	0	（業務の支部移管経過措置）
収入合計（B）	2,551,500	3,035,094	2,550,500	

【本部経費収入見込額＝（①＋③）／２＋②＋SUM（④～⑦）】＝1,875,000

＜支出の部＞

科　　目	平成17年度 予算額	平成17年度 決算額	平成18年度 予算額	摘　　要
１．運営費				
事務局費	240,000	240,000	240,000	
会議費	200,000	379,999	400,000	内、東西日本支部理事旅費22万円
通信費	120,000	105,243	120,000	決算額≒電話・プロバイダー代
印刷費	30,000	0	30,000	
雑費	50,000	86,131	50,000	ソフト代、寮歌祭祝等
小　　計⑧	640,000	811,373	840,000	
２．事業費				
恵迪発行関係費	800,000	1,430,221	800,000	決算額≒恵迪発行関係費＋広告収入
同窓会名簿管理費⑨	60,000	60,000	60,000	会員台帳データベース管理
同窓会名簿発行費	0	0	0	個人情報保護法との関係で検討中
同窓会通信関係費⑩	0	0	0	原則として会誌恵迪と合併発行
現寮関係費⑪	30,000	30,000	30,000	現寮支援・現寮生交流会
総会・寮歌祭費⑫	300,000	300,000	300,000	次期より支部会計へ移行→０円
支部交付金	403,500	403,500	434,500	今期新設支部別（①＋③）x 50%
恵迪グッズ制作費⑬	50,000	0	50,000	
小　　計	1,643,500	2,223,721	1,674,500	
３．予備費	268,000	0	36,000	
当期支出合計（C）	2,551,500	3,035,094	2,550,500	
４．基本金繰入支出	0	0	0	当期は②と④の収入確保に努力し、
支出合計（D）	2,551,500	3,035,094	2,550,500	基本金戻入収入を０としたい。

【本部経費支出見込額＝SUM（⑧～⑬）】＝200万円、次期より170万円

注）昨年の決算と本年の予算との対比から、年次変化の少ない年度会費①は言うまでもなく、第８期平均決算額126万円余から第９期平均決算額96万円余へ、さらに平成16年67.8万円、17年51.3万円と急減している組織運営支援金②およびカンパ④の回復に努力しないと、本会経営の基礎が崩れる恐れがでます。会員各位の特段のご理解とご協力をお願い致します。

予算案は、次ページの表１に示した通りとなり、その結果、**第２号議案；各支部への予算配分額**は、表２の通りとなった。第10期は、前期末に北海道支部が発足して東・西日本支部と合わせて３支部体制が整ったため、府県等の「地域別恵迪会」等の結成や会員サービス強化の観点から、今期から主要な活動は支部が担当することとした。そのため、表２のように年会費等の収入の半分は支部に再配分し、本部は前述の通り全国展開に関わる共通活動を担当する方式を採用したが、表１に書き込んだ本部収入見込式と支出見込み式、さらに表１欄外記事から明らかなように、近年急激に減収となっている組織運営支援金②・カンパ④の増収に努力しないと、健全経営が不可能な状態である。会員各位の特段のご理解とご協力をお願い致します。

第４号議案；恵迪寮百周年企画については、会員各位に向けて初めて紹介する話題でもあり、理事会審議を経て新設される実行委員会の活動内容が確定していないものの、原案によって詳細を報告する。札幌農学校寄宿舎は、明治40（1907）年に帝国大学昇格（東北帝大農科大学、仙台ではそれから施設を作って初入学は1911年）を契機に「恵迪寮」と命名されたから、平成19年は「帝大百年・恵迪寮百年」となる。これを機会に本会は、全学に呼び掛けて記念事業「恵迪寮百年記念祭」を開催し、恵迪魂の高揚と本会の活性化を図りたい。理事会では、事業を推進する「北海道大学恵迪寮百年記念祭委員会」の結成、そこで詳細が決まる事業の大綱が審議されるが、全学・全国的な広がりを作って恵迪寮百年を祝いたいものである。記念事業の素案には、本会第11期総会と連動して記念式典・講演会・祝賀会を始めに、全国寮歌祭・地域寮歌祭、支部毎の開識社、祝典演奏会（オケラ・マンドリン・合唱団等の合同演奏会）、記念文集または「恵迪７号増刊号」、恵迪寮文化財の学内一括展示・大学寄贈、都ぞ弥生歌碑の改装、記念寮歌ＣＤ作成（兼；募金者記念品）、記念グッズ作成等が候補に挙がっている。

佐藤昌介（初代1891－1930）　今　裕（4代1891－1930）　南鷹次郎（2代1930－1933）　南鷹次郎（2代1930－1933）　今　裕（4代1891－1930）　伊藤誠哉（5代1945－1950）

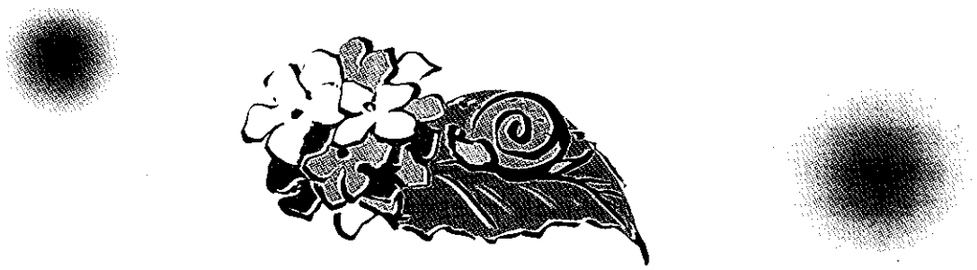
この内で「恵迪寮文化財の学内一括展示・大学寄贈」は追加説明が必要である。本会は、昭和58年の第２代寮舎解体・新々寮移転時に恵迪寮財産の移転が不可能になったことから、寮舎内に掲げてあったクラーク肖像画（現状：農学部寄託、以下同じ）、学長書額７点（開拓の村１＋農学部１＋博物館５寄託）および恵迪寮玄関看板（開拓の村寄託、南総長筆）、それに移転を記念して寄贈されたヤマネ社製（阿澄昌夫社長）の恵迪寮舎ミニチュア（倉庫収蔵は困ると借り出して開拓の村展示）、寄贈の書額数点（所有権未確認）等を管理している。特にクラーク肖像画と写真に示した学長書額７点は、本誌の連載記事「恵迪寮の文化財」と本会ホームページで紹介している通り、北大で最初に作られた肖像画と、佐藤昌介初代・南鷹次郎２代・今裕４代・伊藤誠哉５代総長の書額であり、学内に残る総長・学長の書額（本部と農学部を合わせて数点）にもない貴重な財産である。また、それら書額は、その時代の情勢に応じて総長が学生に向けて発した強力なアッピール文であり、恵迪寮百年のあかしとなる資料である。しかし、現在、その大半が倉庫と個室に収蔵されて目に見えない状況にあるのは本来の姿でない。また、偶然に本会の管理下になったものの、その由来から言って同窓会が私物化できるものでもない。そこで、例えば北大総合博物館の常設展示室に学生活動の

コーナーを設け、これら文化財を一挙に展示して大学史展示を充実させるなどの公開手法を提案するものであり、併せてそれら文化財の管理権を大学に移転したいと考える。これの実現には、大学や博物館との詳細な調整が必要であるし、一方で同窓会各位の了解と展示経費の一部負担など経費面のご支援をお願いせねばならない。

また、「都ぞ弥生歌碑の改装」について補足すると次のようになる。同歌碑は、北大創基80周年の記念事業として提案され、当時、恵迪寮執行委員長であった横山清本会代表幹事が、発起人代表渡辺名誉教授らと募金に回って資金を作り、昭和32年９月24日に作曲者赤木頭次氏、作詞者横山芳介氏令夫人とご子息芳男さんを迎えて除幕式を行っている。昭和31－32年入寮生は、寮舎南の原始林踏分け道横に用意された建設用地の整地作業への出役、盛大な除幕式への参加、寮食堂に赤木氏を迎えてのラジオ中継や会食会などを思い出されるであろう。明治45年度寮歌「都ぞ弥生」は、３大寮歌と呼ばれて人口に膾炙し、学内では校歌に代えて式典等に演奏される北大を代表する歌であるため、その歌碑も巨大な白御影石造りとし、周囲に円弧状に自然石を配置して50cmほどの高さの台座に設置して威厳のある構成となっていた。しかし、寮舎と原始林西にあった湿地がグランドとなり、さらに恵迪寮新々寮舎が移転するにおよんで、原始林の踏分け道を土盛りして舗装する際、無謀にも歌碑周辺の台座を撤去し、恐らく土盛りの中に埋め込んだことから、その後の歌碑は道端に本体のみが孤立する無惨な姿になった。台座の一部が道路用地に掛かったとは言え、道路工事に合わせて新たな台座の設置も可能なのに歌碑を裸で放置した大学当局の無見識さに呆れるばかりか、昼間には生協販売品や宅急便のトラックが歌碑に横付けして休養しているのを見掛けると、除幕時の姿を知る者として怒りを感じる。全国の旧制高校寮が消えゆく中で今も「恵迪寮」を継承し、百年に亘って恵迪寮歌を継続制定してきた歴代の寮生たち、すなわち恵迪魂に裏打ちされた恵迪寮関係者でなければ都ぞ弥生歌碑を守れないのであろうか。恵迪寮百年記念事業の一つとして、歌碑の台座を復元し、煤煙の影響と思われる黒御影石製の歌面の腐食を磨くなどを行い、北海道大学のシンボルとしての都ぞ弥生歌碑の威厳を再現する事業を提案したい。これら記念事業の具体案は、理事会で実行委員会を発足させてから検討する内容であるが、今から広く会員各位の多様なご意見をお伺いしたいし、意見交換の場を本会のホームページに特設して、よりよき実行案を具体化して行きたいと思う。

本年度最大のイベントとなる「恵迪寮同窓会大寮歌祭東日本大会」は、来る９月30日（土）午後２時（受付開始13：15）から５時まで東海大学校友会館（東京都千代田区霞ヶ関３－２－５　霞ヶ関ビル33Ｆ）で開催される。詳細は色刷りページに掲載していますから、仲間と話し合って多数参加されるようお願いして、仮想の平成18年度理事会の概要報告を終わります。

（文責：副代表幹事　髙井宗宏）



東日本支部ニュース

東日本支部寮歌祭仙台大会報告

一、寮歌祭（平成十七年五月二十八日）

五月晴れに恵まれた二十八日（土）十四時から、仙台市青葉区のホテル白萩で開かれた。中瀬篤信会長（昭和二十六年入寮）の挨拶を始め、地元代表による歓迎の辞や旧制二高尚志同窓会の佐藤剛彦会長の挨拶などのあと、先ず「都ぞ弥生」全曲の高らかな斉唱から始まった。次いで毎年の北大寮歌祭に於ける〝常連歌〟を中心に二十余曲の熱気ある放吟が続いたが、その合間に、友情参加の二高ＯＢの方々が登壇し、校歌「天は東北」と寮歌「山紫に」等を、雄大剛健の気風を十分に発揮して披露して下さり大変感動的であった。そして終盤には平成十年寮歌「生命萌え出で」が、作曲者の長谷川健君（平成七年・現在理学部博士課程院生）本人によって紹介され、大いに好評を博した。ここで一緒に登壇した堀江峻太君（平成十三年）は今大会出席者中の最年少。そして長谷川、堀江の両君ともに地元仙台一高の出身で、北大入学後は共に応援団長を務めた好青年であり、会場に若い新しい風を吹き入れてくれた。

一方、予科から入学された方々も、この日の最先輩の河合正恭氏（昭和九年）を筆頭に十四人（関東十二、仙台二人）を数え、殆んどが寮歌祭常連の方々で今年も颯爽として万年青年ぶりをいかんなく発揮して下さった。

この日の模様は翌二十九日の河北新報朝刊にカラー写真入りで掲載された。（グラビア頁参照）この写真は「都ぞ弥生」斉唱のときのもので、中央は発声者の小篠守正氏（昭和十七年）、旗振りの中央は宍戸昌夫氏（昭和十年）である。右端に見える盛り花は、「津軽の滄海の」の作歌者で仙台出身の二階堂孝一氏（昭和十一年）の妹さん嶋倉孝子さん（仙台市）が贈って下さったもの。又、左方の卓上の鉢植えは、宮城県出身で三笠市在住の鈴木英世氏（昭和十六年）が贈って下さったものである。寮歌祭常連の鈴木氏は今回、直前になって欠席の止むなきに至り、〝残念無念の小生の名代です〟とのメッセージを添えて、自宅の庭から掘り起こしたばかりの延齢草を、五、六株鉢植えにして大会直前に送って下さったもので、丁度満開となったその〝真白の花影〟を目の前にして「都ぞ弥生」を斉唱できたのも大変感激であった。

「都ぞ弥生」の斉唱
（ミヤギテレビの画面より）

この日の宴の筵の中には、小さな写真がステージの方に向って飾られている卓があった。写真の主は仙台の渡辺英夫さん（昭和十九年）で、写真を同伴して出席されたのは奥さんの美智子さんと、長男の伊知郎さん（昭和六十年）であった。英夫さんは惜しくもつい先年亡くなられたが、生前に建てられていた墓標には「都ぞ弥生」とだけ刻まれているほど、北大寮歌をこよなく愛した方であった。この日も寮歌の数々を満足して聴きそして一緒に歌っておられたに違いない。又、別の卓には支倉常長公（江戸時代に政宗公が派遣した訪欧使節団の長）の二十九代目の子孫・支倉哲男さん（八十七才）の姿があった。哲男さんは、北大在学中に惜しくも亡くなられた長男の研一さんを偲び、何十年か振りに北大同窓生の歌う「都ぞ弥生」を聴きたくてとの願いで出席されたのであった。

今大会出席の九十人の内、北大関係者七十五人の概その内訳は、関東五〇％、東北（大部分は宮城）四〇％、北海道一〇％であった。地方での開催はそこに住む人々の出席を促すのに大変効果的であると思った。出席さ

れた全ての方々に心よりお礼申し上げます。

最後に、今尚連綿として歌い継がれそして作られ続けている全国でも稀有の存在・恵迪寮歌の作者の中から、今年出席された方々を次に紹介します。

宍戸昌夫氏　昭和十一年「嗚呼茫々の」等三歌の作歌や作曲。
渋谷富業氏　昭和二十一年「時潮の波の」の作歌。
寺井幸夫氏　昭和二十一年「時潮の波の」の作曲。
加藤秀弘氏　昭和四十七年「楡陵に月は」の作歌。
矢野哲憲氏　昭和四十七年「楡陵に月は」等三歌の作曲。
長谷川健氏　平成八年「若き力」等四歌の作歌や作曲。

二　仙台市内バスツアー（五月二十九日）

仙台を訪れた機会に独自に近辺の探勝をしたい人も少なくないことと予想し、大会要綱には市内観光バスの案内等も載せる一方、バスツアーの参加者は少なくなるかも知れないという心配もつきまとっていたが、結果としては予約したマイクロバスの定員と殆んど同数の二十人の参加があり、目出たく九時前にホテル前を出発、薄曇りだったが穏やかな日和の下、次の各所を巡ることができた（車窓からの観覧も含む）。順に記すと、

(1)二高第二代の地（現在、東北大農学部）と、すぐ近くにある二高以来の伝統を有する明善寮（但しここも昭和五十七年春に鉄筋造りになった。）
(2)北山霊園――ここで二階堂孝一氏の墓参と「津軽の滄海の」献歌。妹さん・嶋倉さんご家族も参列された。
(3)市の中心部にある、二高や東北帝大理科大学発祥の地（現在、東北大片平キャンパス）。
(4)中国の文豪魯迅が仙台医専留学中に住んだ下宿。
(5)青葉城周辺の、五色沼（日本に於けるフィギュアスケート発祥の地）。東北大川内キャンパス及び青葉山キャンパス。
(6)青葉城（別名仙台城）趾――伊達政宗公の像や、「荒城の月」の作者、土井晩翠の詩碑と像が建つ。ここからは仙台市の中央部が一望できた。
(7)仙台の〝ミニグランドキャニオン〟竜の口峡谷の一部を、八木山橋を徐行しながら眼下に眺めたあと、八木山動物公園内に建つベーブルース像を見学。（ルースは、かつてこの地にあった八木山球場で来日初ホームランを放った。）
(8)柳生寺――ここで「魔人の呪」の作歌者で仙台出身の佐藤惣之助氏（大正六年）の墓参と献歌。そのあと同氏の生家前を徐行して通り、
(9)仙台の旧市街で僅かに戦火を免れた古い街並を経て、
(10)フルキャストスタジアム宮城近くを通り、

折しも楽天―阪神戦で満員のスタンドを垣間見たあと、十五時半に仙台駅東口に帰着解散した。

寮歌祭とツアーとをミヤギテレビは二日間に亘って取材に来て、数日後、同局の人気の自主製作ワイド番組「OH！バンデス」の中で〝仙台出身者の北大寮歌〟というタイトルで、五分近くも放映してくれた。グラビア及び本稿中のテレビ画面の写真はその番組から写したものである。前述の河北新報社とミヤギテレビ両社の協力にも心より感謝し報告を終える。

友情出演の二高ＯＢ

（仙台在住　小出　精　昭和三十年）

北海道支部ニュース

二〇〇五年度事業報告と二〇〇六年度事業計画等

北海道支部長　白浜　憲一

Ⅰ　二〇〇五年度事業報告

①平成十七年度「寮歌歌初めの会」一月二十九日　場所・氷雪の門約一〇〇名参加
②現寮生・ＯＢ交流会　第一回五月二十一日　場所・恵迪寮前庭　寮生十五名、ＯＢ三名参加　第二回十一月十二日　場所　恵迪寮図書資料室　寮生十五名、ＯＢ五名参加・外国人留学生初参加。
③親睦ゴルフ大会　第二十二回大会六月二十六日　場所・札幌ベイＧＣ二十四名六組参加　優勝者　中瀬篤信氏（昭和二十六年入寮）第二十三回大会九月十七日場所・札幌真駒内ＣＣ十九名四組参加　優勝者　井口光雄氏（昭和二十八年入寮）ゴルフ大会納会九月十七日　十名参加
④開識社　十月一日　場所・時計台ホール　講師　石城謙吉氏（昭和三十二年入寮、知床世界自然遺産地域科学委員会委員長）演題「知床世界自然遺産のこれから」約一〇〇名の同窓生、現寮生、一般市民が参加。新聞各紙も話題として採り上げた。
⑤各地区恵迪会　◎道北　旭川恵迪会――「道北恵迪寮歌祭開催七月十六日　場所・旭川パレスホテル十九名参加◎オホーツク恵迪会――オホーツク恵迪会発会式十一月二十六日　場所・北見ピッツアークホテル九名参加〈役員〉代表　稲田正範氏（昭和三十四年入寮）幹事長　中島貢氏（昭和四十年入寮）副幹事長　田村博昭氏（昭和四十五年入寮）を選出。◎道南・函館恵迪会――「道南恵迪寮歌祭」開催十二月三日場所・函館ホテルテトラ十三名参加〈役員〉代表　鈴木宏悦氏（昭和二十九年入寮）幹事長　高石勇光氏（昭和五十一年入寮）副幹事長　森越清彦氏（昭和四十一年入寮）を選出。◎室蘭恵迪会――十二月十七日忘年会開催
⑥幹事会　年間七回開催

Ⅱ　二〇〇六年度事業計画

一　活動基本方針①草創期の同窓会理念と諸活動による成果を正当に受け継ぎ、発展的な世代交代をスムーズに実現する。②支部運営組織改革と各地区恵迪会の拡充を図り、強固な組織作りを行う。さらに、同窓会会員の産みの母体となる現恵迪寮との関係を強化する。③特に昭和四十年代以降入寮生の新規会員の結集を図る方針を明確にして実行する。④年度当初に「年度事業計画」を発表し、会員の参加を容易にし、会運営の効率化を図る。⑤広報宣伝活動のツールとしてインターネットを活用し、時代に相応しい組織作りを行う。本部ホームページの充実を図る。

二　支部運営組織改革①幹事長の下に、組織部会、親睦部会、現寮部会、広報部会、開識社部会の五部会を設置する。　◎組織部会――各地区恵迪会を統括し、新規会員の結集を図る。　◎親睦部会――「寮歌歌初めの会」、親睦ゴルフ大会などを企画、開催する。　◎現寮部会――現恵迪寮生との交流などを企画、開催する。　◎広報部会――同窓会ＨＰとの連携、支部活動のＩＴ戦略を実行し、支部ニュースを年二回（一月と九月）発行する。　開識社部会――年一回の開識社を企画、開催する。②支部長・副支部長・幹事長・副幹事長・各部会長で支部常任幹事会を設置する。支部常任幹事会は、支部幹事会に活動方針を提案し、その決定に基づき事業と業務を執行する。③各部会は三～六名で構成し、必要に応じて部会長が召集する。

三　各部会の事業計画①組織部会――　地区恵迪会の寮歌祭◎「道南恵迪寮歌祭」……六月十日（土）主催：道南・函館恵迪会◎「道北恵迪寮歌祭……七月一日（土）主催：道北・旭川恵迪会◎「オホーツク恵迪寮歌祭……七月十五日（土）主催：オホーツク恵迪会◎「十勝恵迪寮歌祭」……六月十七日（土）　主催：十勝・帯広恵迪会　地区恵迪会の結成「釧路・根室恵迪会」……七月二十二日（土）に結成。「日高・苫小牧恵迪会……七月八日（土）に結成。　◎入寮三十周年（昭和五十一年入寮）四十周年（昭和四十一年入寮）五十周年（昭和三十一年入寮）記念集会の組織②親睦部会――　第二十四回親睦ゴルフ大会……六月二十五日（日）　第二十五回親睦ゴルフ大会……九月二十三日（日）　平成十九年度「寮歌歌初めの会」……新年一月二十七日（土）氷雪の門③現寮

部会――　第三回寮生・ＯＢ交流会……五月二十日（土）予定。第四回寮生・ＯＢ交流会……十一月十一日（土）予定。④広報部会――年二回（九月と一月）支部ニュース発行。　同窓会会員へのアンケート実施（五月）　同窓会ホームページへの記事収集、投稿。　同窓会会員のメールアドレス収集。⑤開識社部会――平成十八年度「開識社」開催……十月七日（土）北大遠友学舎

恵迪寮同窓会・北海道支部　2006年度事業計画《保存版》

2006年４月21日

日	時	行　事	幹事会・役員会
1月			21日（土）第１回幹事会
	28日（土）	平成18年度寮歌歌初めの会　氷雪の門	28日（土）支部総会
2月			
3月			
4月	中旬	恵迪第６号発行（アンケート実施）	21日（金）第１回常任幹事会
5月	13日（土）	恵迪寮同窓会本部定期理事会	12日（金）第２回幹事会
	20日（土）	第３回現寮生交流会	
	中・下旬	恵迪寮同窓会本部・定期理事会	
6月	10日（土）	第２回道南恵迪寮歌祭（ホテルテトラ）	
	17日（土）	第１回十勝恵迪寮歌祭	
	25日（日）	第24回親睦ゴルフ大会	
7月	01日（土）	第３回道北恵迪寮歌祭	
	08日（土）	日高・苫小牧恵迪会結成	
	15日（土）	第１回オホーツク恵迪寮歌祭	
	22日（土）	釧路・根室恵迪会結成	
8月			04日（金）第２回常任幹事会
9月	上旬	支部ニュース秋・冬号発行	08日（金）第３回幹事会
	23日（日）	第25回親睦ゴルフ大会・納会	
	30日（土）	東日本支部「大寮歌祭」（東京）	
10月	07日（土）	開識社（北大遠友学舎）	
11月	11日（土）	第４回現寮生交流会	17日（金）第３回常任幹事会
12月	16日（土）	室蘭恵迪会	15日（金）第４回幹事会
1月	上旬	支部ニュース新年号発行	12日（金）第４回常任幹事会
			19日（金）第５回幹事会
	27日（土）	平成19年度寮歌歌初めの会　氷雪の門	27日（土）支部総会

恵迪寮同窓会・北海道支部
062－0931　札幌市豊平区平岸１条１丁目（株）ラルズ本部内
TEL　011－815－6377　（E-mail）　keiteki@spa.att.ne.jp
同窓会公式ホームページ　http://home.att.ne.jp/apple/keiteki-ob/
同窓会郵便振替　02720－8－7923

恵迪クッズ販売のご案内

本会が刊行・製作した恵迪グッズは、次のとおりです。事務局までＦａｘ．でお申込みくださるか、郵便振替用紙に注文品名を書いて送金ください。郵便振替の場合は、もっとも早くお届けできます。

恵迪寮同窓会

郵便振替　〇二七二〇―八―七九二三
（本会への送金は、全て振替でお願いします）
事務局Ｆａｘ．　〇一一―八一五―六三七七

【グッズ品名】　　【頒価】
・陣羽織　　六、〇〇〇円
・恵迪タイピン　　一、五〇〇円
・寮歌テープ　　一、〇〇〇円
・恵迪絵ハガキ　　一〇〇円
・写真集「青春の北大恵迪寮」　　一、〇〇〇円
・恵迪寮同窓名簿（平成九年刊）　　一、〇〇〇円
・同窓会誌「恵迪」第五号、第六号　　七〇〇円
「恵迪」二～四号は無料、送料相当分を負担

【仲介グッズ品名】　　【頒価】
・寮歌集（北大恵迪寮刊、最新刊）　　一、〇〇〇円
・恵迪寮史（復刻版、昭和七年刊）　　六、〇〇〇円
・恵迪寮史（第二巻、昭和五十八年刊）　　九、〇〇〇円

西日本支部ニュース

二〇〇五年恵迪寮同窓会西日本大会
二〇〇五年七月十六日アパホテル名古屋錦にて

西日本支部幹事長　伊藤靖久

恵迪寮同窓会西日本大会は二〇〇五年七月十六日、名古屋市中区錦三丁目アパホテル名古屋錦を会場に五十九名の参加を得て、十三時スタート、第一部開識社、第二部西日本支部総会、第三部寮歌祭・懇親会の式次第で進行した。第一部開識社は愛知県国際博推進局事業調整課長勢力常史氏を講師に迎え、「盛り上がる愛知万博！―その見どころ―」のテーマで講演をいただいた。勢力氏は北大との関係はない方ですが、刈谷市在住の同窓先輩深谷勲氏（昭和32年入寮）より愛知県庁の北大同窓生（恵迪寮生ではない）国際博推進局次長長崎栄一氏を通してご紹介いただいた方です。北大関係者も全国に勢力を張っていることに感心した次第。今回西日本大会の開催地を名古屋地区としたのは一度関西から離れてみることと大阪と東京の中間ということで愛知万博効果による参加を期待したものです。実行委員会としては名古屋市在住の牧野俊一氏（昭和33年入寮）のご厚意により最安値の万博入場券を用意したが、余らせてしまった。割安の入場券に惹かれた方は意外と少なかったわけだが、次の日の万博見学予定の方には喜ばれた。それはさておき、講演はパワーポイントを使い、十三時から十五時までと約二時間に及ぶ聞き応えがあるものだった。皆様もご承知のように環境保護に大きな声が上がり会場計画が練り直された結果、クラスター型の開発として大きく二会場に分割され、様々な新交通機関で会場内がネットワークされたこと、交通アクセスが混雑緩和を目的に分散され、会場内東西南北の四地区に駐車場が設けられ、どの地区から入ってどの地区から出ればスムーズな見学が可能か等、会場見学の早回り裏技を披露されるなど講師の人柄と役職を反映し、精緻かつ洒脱なものだった。質疑応答も活発になされ、二時間という時の長さを忘れさせた。講師の勢力様ありがとうございました。紙上をお借りし、改めて御礼申し上げます。

第二部は十五時十五分から十六時まで西日本支部の総会を行った。〝都ぞ弥生〟の斉唱の後開会宣言、恵迪寮同窓会中瀬会長、西日本支部辻山支部長の挨拶に続いて物故者に黙祷を捧げ、事業報告を幹事長の私、会計報告を岩井事務局長、監査報告を植松会計監査、規約及び役員改選・新役員の紹介を私が行い、最後に西日本大会アピールの採択により総会を滞りなく終了した。

第三部は待ちに待ったメーンイベント大寮歌祭及び懇親会が十六時十五分から山本雅彦君（昭和50年入寮）の司会・進行によりスタート。長老池田秀司先輩（昭和19年入寮）の矍鑠たる挨拶に始まり、地元名古屋地区の実行委員を代表して大会の態勢づくりに尽力された深谷勲先輩の挨拶、そして九州地区を代表して参加された外園邦彦先輩（昭和29年入寮）の乾杯で開宴した。会食と歓談に移り、各地区の方々の自由スピーチ、自己紹介、友人消息など賑々しく報告が続き、茶畑仁司先輩（昭和26年入寮）の名物スピーチの頃には会場は交歓のるつぼと化し、スピーチが全く聞こえない有様であったが、先輩お構いなし、話の止まるを知らずであった。これはならじと寮歌祭パート1、校歌「永遠の幸」に始まり、寮歌「藻岩の緑」、「春雨に濡るる」、「津軽の滄海の」。寮歌祭パート2、桜星会歌「瓔珞みがく」、寮歌「魔神の呪い」、「タンネの氷柱」、「時嘲の波の」と元応援団木村成二君（昭和46年入寮）手配の大太鼓の合いの手にあわせ歌い継がれていった。太鼓の威力や大を再認識。ホテルもよく許してくれたものだ。ついに寮歌祭フィナーレ、「都ぞ弥生」、「別離の歌」そして最後に「ストームの歌」で閉めを行った。次回大会担当東日本篠原支部長の挨拶、大会実行委員会の紹介の後閉会宣言と相成った。二次会はそのまま同じホテルの上階の深谷先輩手配のラウンジへ雪崩れ込み、大太鼓たいてまたまた寮歌。貸切ラウンジに入りきれず廊下にまではみ出す始末。参加者並びに大会実行委員共に満足感、充実感に包まれ成功裡に大会を終えることが出来た。

飛び入りを含め参加者五十九名というのは決して多い数字ではない。前回の西日本支部京都大会の場合、参加者は約百名であった。が、後日開いた反省会の感想第一声は参加人数の割には充実していて良かったというものであった。西日本と言えどもエリアは広い。次はどこか思案のしどころである。

恵迪100年　次号協賛広告御案内

平成18年６月１日
北海道大学恵迪寮同窓会
会長理事　中瀬　篤信
代表幹事　横山　　清

平成19年は札幌農学校開学130周年帝国大学昇格100周年・恵迪寮銘名100周年です、私共恵迪寮同窓会は毎年雑誌「恵迪」を発行しており、同窓生およそ1.2万人対し、３千部を発行いたしました。

つきましては、貴殿あるいは貴社におきまして協賛広告の御出稿をお願い申し上げる次第です。時節厳しい情勢の下ですが、何卒以下の要領を御参照たまわり、御検討の上御出稿いただければ幸いです。

貴殿の御健康と御活躍をお祈り申し上げ、お願いとさせていただきます。

敬具

記

広告価格　Ｂ５版１ページ　5.0万円
　　Ｂ５版１／２ページ　2.5万円
　　名刺版　0.3万円（カラー広告は倍額となります）
広告原稿　活字体のみの場合は当方で指定どおり無料で作成します。
　　デザイン広告は制作の上、当方に原稿を御提供願います。
御支払い　雑誌が完成後、現物と共に御請求とお振込用紙を御送付します。
　　請求後、１ヶ月以内に御支払い願います。
※御不明な点は同窓会支部および事務局にお問合せください。

以上

恵迪寮同窓会事務局

〒062－0937　札幌市豊平区平岸１条１丁目９－６㈱アークス内
TEL011－813－6377／FAX011－813－2228　E-mail keiteki.@spa.att.ne.jp
担当：佐藤　静子

広告掲載申込書　恵迪寮同窓会　殿

広告主	社（氏）名			
	住所			
	TEL		FAX	
	担当者名		TEL	
掲載枠	Ｂ５版１Ｐ　　Ｂ５版１／２Ｐ　　名刺広告			
広告原稿	・作成の上、　月　日までに届ける ・以下の内容で事務局に任せる			

2006年大寮歌祭ON霞ヶ関

平成18年度の寮歌祭は地上100メーターの天空会場をご用意しました。秋の昼下がり、首都の東の際、霞ヶ関、永田町、国会議事堂、はたまた六本木ヒルズを見下ろし、天下国家を論じながら、我らが世界に誇る天空のさざめき、北大寮歌を放歌高吟しようではありませんか。（下駄履きは出来ません）

恵迪寮同窓会　東日本支部　支部長　篠原　猛

＜開催要項＞

日　時：平成18年９月30日（土）14：00～17：00（受付は13：15から）
場　所：霞ヶ関ビル33Ｆ　東海大学校友会館（東京都千代田区霞ヶ関３－２－５）
　　TEL：03（3581）0121
会　費：8,000円（同伴家族者は2,000円）
連絡先：〒176－0021　東京都練馬区貫井４－47－42
　　関口　光雄（昭和39年入寮）TEL＆FAX：03（3926）0080
　　（e-mail:　jubesannchinoko@ybb.ne.jp）

＜式次第＞

① 第一部　東日本支部総会
② 第二部　懇親会・大寮歌祭
③ 第三部　大寮歌祭

玉稿大歓迎

「恵迪」は毎春１回発行する予定です。また本年2007年は恵迪100年ですので特別に恵迪100周年記念号を発行する計画です。そこでＯＢの皆様からの投稿をお待ちしています。

寮時代の思い出に限らず近況、昔の生活と現在の違い、現代の政治、風土についての御意見や御批判あるいは個人の旅行記、趣味の俳句、詩などあらゆるジャンルの文を御寄せ下さい。これまでの号でも数人の方が投稿されています。

原稿は１行20字厳守、約1000字から5000字をメドとします。もちろん写真、カットも大歓迎です。

なお「恵迪」の版権、編集権は恵迪寮同窓会に属します。したがって投稿の採用、見出し、中見出しをつけること、写真の扱い方などは特別の場合を除き編集委員会におまかせ下さるようお願い致します。写真、カットは本発行後に返済致します。

（締め切りは平成18年12月31日）

あて先

〒062－8611　札幌市豊平区平岸１条１丁目9-6　株式会社ラルズ内　恵迪寮同窓会

編集後記

第７号は一つの柱として現寮生との結びつきを強めようということが第１回の編集会議で決まりました。このため、現寮生を１人、編集委員に加わってもらうことが決定。寮生に持ちかけたところ、渡辺恵美さん（教育学部２年）に快く引き受けていただきました。

そこで早速現寮生７人に寮生活について書いてもらい「恵迪は今。現寮生の目から」というタイトルで特集を組みました。また、グラビアで「寮生活・今と昔」として見開きで現寮の生活ぶりと昔の寮生を対比して見ました。また、雪中ジャンプ大会もグラビアを飾りました。これらはジャンプ大会をのぞき、渡辺さんの積極的な協力のたまもので、あつく御礼申し上げたいと思います。

もう一つの柱としてＯＢ各位からの玉稿を「自由投稿」として特集しました。これには和気和民さん（昭和20年入寮）高木冨士男さん（昭和22年同）村山正さん（昭和23年同）木暮成一さん（昭和28年同）に面白く興味深い原稿を寄せていただきました。誠に有難うございました。

最後にお願いがあります。「１行20字を厳守して下さい」との連絡にもかかわらず18字、31字等で書いて来られる方が数人おり、編集作業上、手間取りました。次回からはお守り下さいますよう。

（文責・「恵迪」部会長・平岡　義康）

〔編集委員〕厚谷純吉（Ｓ30）高井宗宏（Ｓ31）河村征治（Ｓ32）白浜憲一（Ｓ40）
谷口哲也（Ｓ48）渡部恵美（教育学部１年）佐藤静子（ラルズ）

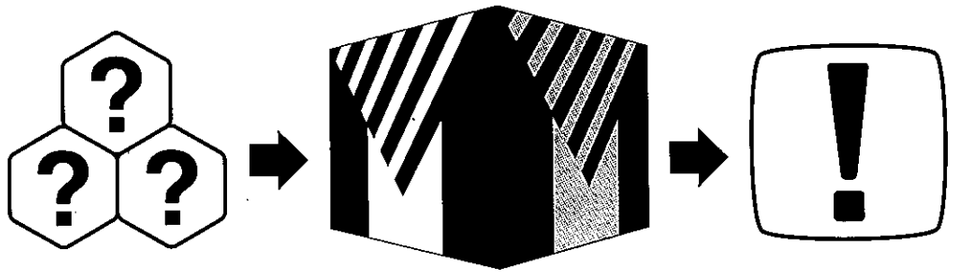
恵迪　第6号　平成18年5月

発行　恵迪寮同窓会
〒062-8611　札幌市豊平区平岸1条1丁目9-6
株式会社ラルズ内
☎011-815-6377
E-mail　keiteki.@spa.att.ne.jp

発行者
恵迪寮同窓会長
中瀬篤信

印刷者　社会福祉法人
北海道リハビリー
〒061-1102　北広島市西の里507番地1
☎011-375-2116

自然の無限の可能性を、
「新しい食」の驚きに変えていきます。



自然のちからを、未来のチカラへ。

健康って、おいしい。
MEIJI
明治乳業

明治乳業株式会社　代表取締役会長　中山 悠　〒136-8908 東京都江東区新砂1-2-10

北海道大学総長
中村睦男
昭和三二年入学
法学部法律学科卒
札幌市北区北八条西五丁目
TEL（〇一一）七一六―二一一一

北海道大学監事
弁護士・公認会計士
伊東孝
昭和三〇年入寮
経済学部経済学科卒
札幌市西区八軒七条西一丁目
TEL（〇一一）六二一―六三九五

北海道大学連合同窓会長
北海道大学東京同窓会長
松田昌士
昭和三〇年入学
法学部法律学科卒
東京都新宿区高田馬場二―五―二四
メゾンドール高田馬場三―〇号
TEL（〇三）三二〇八―六三七八

北海道大学連合同窓会副会長
東日本地域担当
中山悠
昭和三一年入学
農学部農芸化学科卒
東京都江東区新砂一―二〇―一〇
TEL（〇三）五六五三―〇三〇六

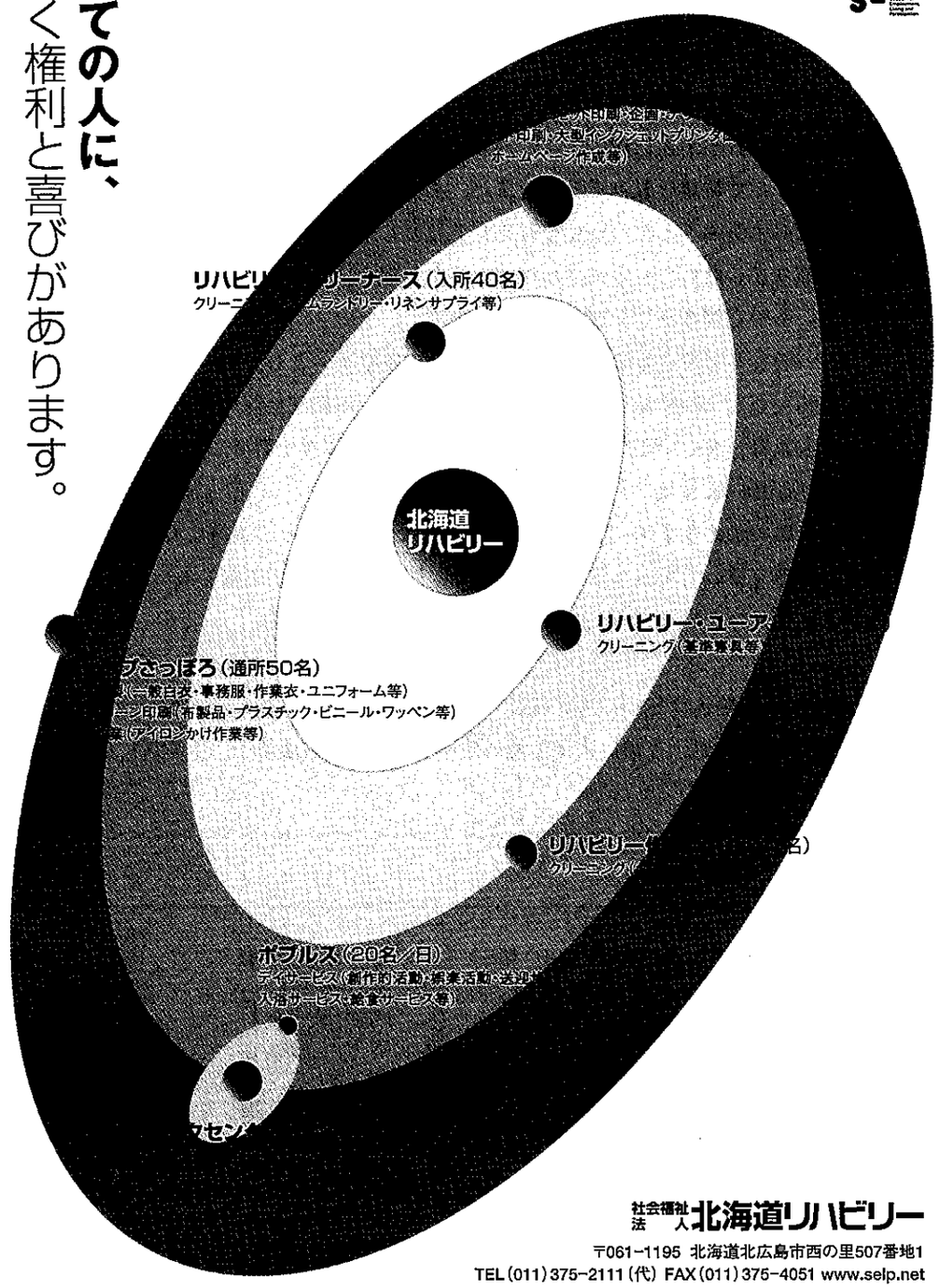
北海道大学連合同窓会副会長
北大水産学部同窓会長
横山清
昭和三一年入寮
水産学部遠洋漁業学科卒
札幌市中央区南一三条西二二丁目一―一五
TEL（〇一一）五三〇―二三六一

恵迪寮同窓会名誉会長
㈱繁富工務店会長
繁富一雄
昭和六年入寮
工学部機械工学科卒
札幌市中央区南一二条西六丁目一―一一
TEL（〇一一）五二一―三八六五

恵迪寮同窓会会長
中瀬篤信
昭和二六年入寮
札幌医科大学卒
〒060-0016
札幌市南区真駒内南町二―二―四
TEL（〇一一）五八三―五三三九

月桂冠株式会社
専務取締役
内藤拓
昭和三四年入寮
獣医学部獣医学科卒
〒611-0013
宇治市莵道東畑上り五―一三―一
TEL（〇七七四）三三―四三三五

全ての人に、
働く権利と喜びがあります。



社会福祉法人 北海道リハビリー
〒061-1195 北海道北広島市西の里507番地1
TEL（011）375-2111（代） FAX（011）375-4051 www.selp.net

北海道大学名誉教授
工学博士
村山 正
昭和二四年入学
工学部機械学科卒
札幌市中央区円山西町八—六—一
TEL (〇一一) 六二一—八〇五五

北海道大学生活協同組合
理事長
榎戸武揚
〒060—0808
札幌市北区北八条西七丁目
TEL (〇一一) 七四六—六二一八

さっぽろ高齢者生活協同組合
理事長
河原克美
昭和二六年入学
農学部農業物理学科卒
札幌市北区北六条西六丁目六—二
TEL (〇一一) 七一七—〇〇七七

日本清酒株式会社
代表取締役社長
白髪良一
〒060—0053
札幌市中央区南三条東五丁目二
TEL (〇一一) 二二一—七一〇六

日本アクセス北海道株式会社
代表取締役社長
山本佳宏
〒065—0043
札幌市東区苗穂町九丁目
TEL (〇一一) 七五〇—三一〇〇

日本水産株式会社札幌支社
支社長
新田純生
〒063—0801
札幌市西区二十四軒一—一—四—二五
TEL (〇一一) 六四四—八六〇一

株式会社菱食北海道支社
支社長
山口利裕
〒003—0036
札幌市白石区流通センター四丁目
TEL (〇一一) 八六一—三七六一

株式会社シー・ジー・シー北海道
代表取締役副社長
桐生泰夫
札幌市中央区南一条東二丁目
TEL (〇一一) 二二二—三四八一

恵迪寮同窓会副会長
会長代行
井口光雄
昭和二八年入寮
文学部哲学科卒
〒060—2286
札幌市南区藤野二四六—一三五
TEL (〇一一) 五九六—二五五三

恵迪寮同窓会副会長
西日本支部長
辻山昌佑
昭和二六年入寮
農学部農業経済学科卒
〒571—0047
門真市栄町九—一—
TEL (〇六) 六九〇九—三二二九

恵迪寮同窓会副会長
東日本支部長
篠原猛
昭和二九年入寮
医学部医学科卒
〒359—1141
所沢市小手指町二—四—五
TEL (〇四二九) 二八—二二九四

恵迪寮同窓会副会長
北海道支部長
幸健一郎
昭和三〇年入寮
農学部農業経済学科卒
〒065—0027
札幌市東区南8条東4丁目五—一
TEL (〇一一) 五七二—三二二〇

恵迪寮同窓会
副代表幹事
厚谷純吉
昭和三〇年入寮
札幌医科大学卒
〒060—0013
札幌市南区真駒内緑町三—四—一—一〇〇四
TEL (〇一一) 五八三—二九三六

恵迪寮同窓会
副代表幹事
高井宗宏
昭和三一年入寮
農学部農業工学科卒
〒061—1132
北広島市北進町四丁目三—二
TEL (〇一一) 三七三—四二六八

恵迪寮同窓会
副代表幹事
河村征治
昭和三二年入寮
農学部林産学科卒
〒063—0038
札幌市西区西野八—一〇—三—八
TEL (〇一一) 六六二—二五五七

恵迪寮同窓会
恵迪部会長
平岡義博
昭和三三年入寮
文学部文学科卒
〒〇〇一—〇九一三
札幌市北区新川三条二丁目三—一
TEL (〇一一) 七六二—一六一五

CGC

世界中から良いものを

CGCは、日本全国の有力中堅スーパーマーケットが協業の旗のもとに、その総力を結集した大量共同仕入機構です。

CGC北海道本部は北海道大学構内の緑化支援のために寄付させていただきました。

創業25周年記念事業

北海道大学は一昨年秋の台風により、構内にある樹齢百年以上の銘木が次々と倒れました。
大都市に潤いを与える貴重な緑地である北海道大学キャンパスの緑地推進のために寄贈させていただきました。

倒れたポプラ並木 ▶

創業25周年記念式典で感謝の記念プレートを受ける横山社長

北海道のCGCグループ

■北海道の企業数…12社　■店舗数……228店

(2006年2月現在)

株式会社シージーシー北海道本部

代表取締役社長　横山 清

UNIV coop　よりよい生活と平和のために

北海道大学生活協同組合

理事長　榎戸　武揚・専務理事　柳田　章

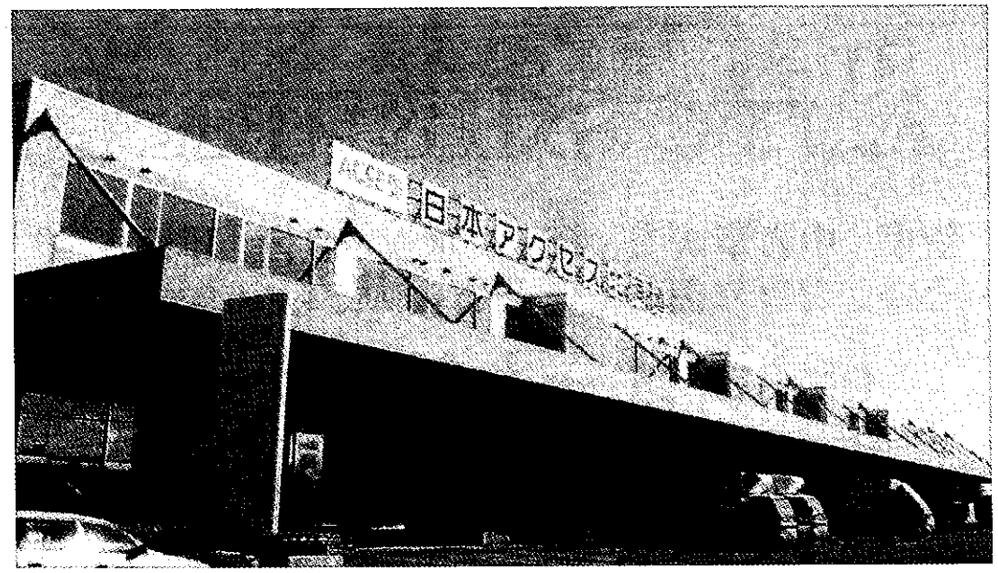
〒060－0808　札幌市北区北８条西７丁目
電話直通　011（746）6218
大学内線　3285
ＦＡＸ　011（746）2341
E－mail　yanagida@coop.hokudai.ac.jp
http://www.hokudai.seikyou.ne.jp/

「信頼され、選ばれる ナンバーワン食品卸へ」

当社は、北海道の総合食品卸会社です。全温度帯の商品を幅広く取り扱っており、北海道内の量販店様や外食チェーン様へお届けしております。

当社のスローガンは、一つ目として**「お客様第一主義」**であり、お客様の繁栄が当社の繁栄に繋がると信じて、お客様の為に最善を尽くしてまいります。

二つめは**「社員第一主義」**です。社員従業員への立場に立った判断、社員の満足を目指します。



日本アクセス北海道株式会社

〒065-8522　札幌市東区苗穂町9丁目1番1号　電話代表(011)750-3100

営業拠点：札幌・旭川・帯広・函館・北見・釧路

営業種目

◎ 水力・火力・原子力発電所工事
◎ プラント設備工事
◎ 環境設備工事
◎ 昇降機・立体駐車設備工事
◎ 変電所工事
◎ 動力・制御・計装・電気工事
◎ 一般土木工事
◎ 建設機械整備・改造

株式会社 **繁富工務店**

代表取締役会長　繁富一雄 (機械10期)
代表取締役社長　繁富文承 (機Ⅱ修士1期　工博)

本社	札幌市中央区南12条西6丁目1番28号	☎ (011)511-3428
江別事業所	江別市緑町西3丁目10番6号	☎ (011)382-2994
苫小牧事業所	苫小牧市字勇払157番地2	☎ (0144)56-0711
泊事業所	古宇郡泊村大字堀株村字ヘロカルウス789番地　北電(株)泊発電所補修事務所内	☎ (0135)75-3402
知内事業所	上磯郡知内町字元町28番地13	☎ (01392)5-6157
札幌事業所	札幌市西区発寒11条12丁目2番5号	☎ (011)661-3588
旭川事業所	旭川市永山3条9丁目1番5号	☎ (0166)48-2660

恵迪寮同窓会

本　　部　〒062－8611　札幌市豊平区平岸1－1ラルズ内
電話　011(815)6377

北海道支部　〒062－8611　札幌市豊平区平岸1－1ラルズ内
電話兼FAX(DI)011(815)6377

東日本支部　〒176－0021　東京都練馬区貫井4－47－42
関口光雄方
電話兼FAX　03(3926)0080
E-mail:jubesannchinoko@ybb.ne.jp

西日本支部　〒530－0001　大阪市北区梅田1丁目2－2－200
大阪駅前第二ビル2F北大会館内
電話兼FAX　06(6343)3736

AUTO SURPRISE

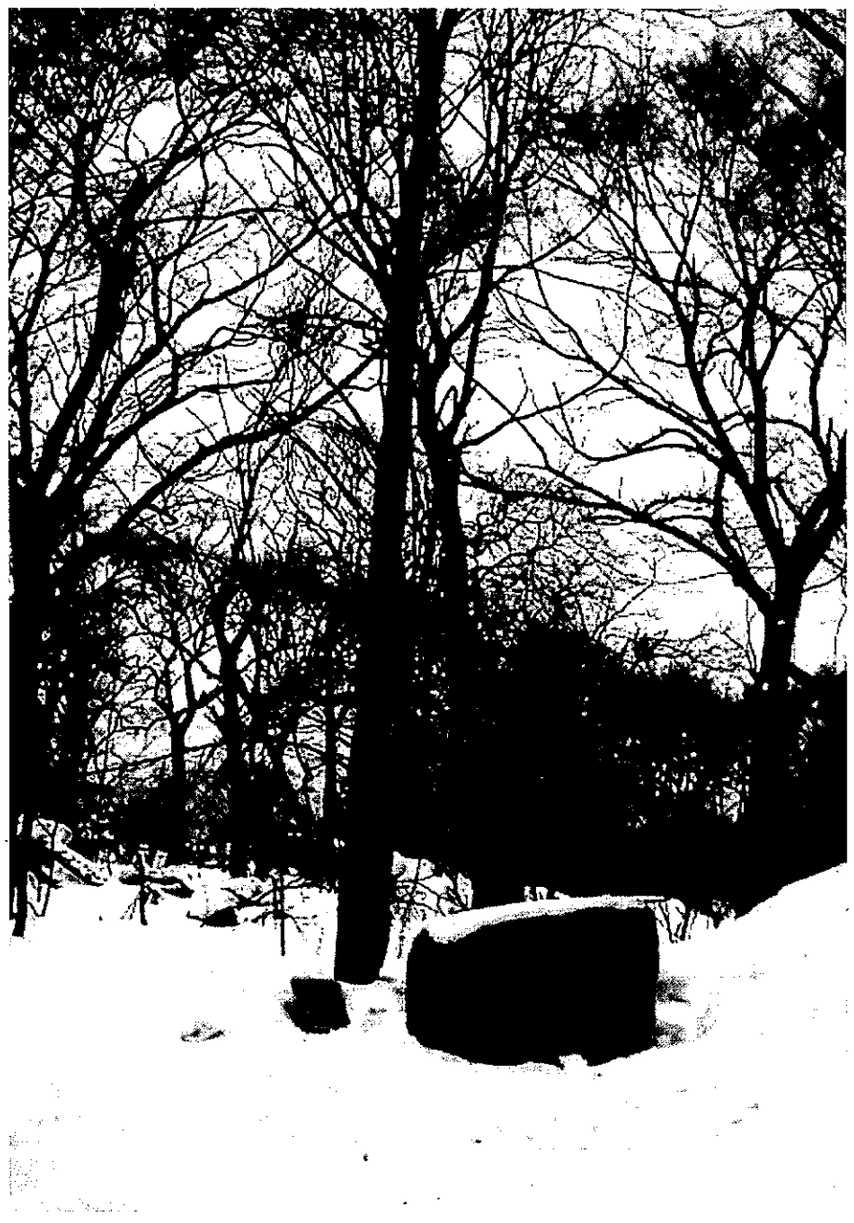
新車、中古車販売、板金、車検、整備、車両保険、
その他お車に関することなら何でも…

有限会社 **オートサプライズ**

本社／〒003-0821　札幌市白石区菊水元町1-1-10-1
TEL 011(879)1617　　FAX 011(879)1619

カーライフ・サッポロ店／
〒002-8011　札幌市北区太平11条5丁目1-4
TEL 011(775)3525　　FAX 011(775)3526
代表取締役会長　平　岡　義　博
(自宅) 札幌市北区新川3条12丁目3－1　TEL 011(762)1615

恵迪



厳寒の原生林と都ぞ弥生の碑（恵迪寮横）

恵迪寮同窓会　第6号 2006年

豊かな大地に輝くかけ橋に